

一般国道9号（中山名和道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県西伯郡大山町

SHIMO ICHI TSUKI JI NO MINE HIGASHIDOORI

下市築地ノ峯東通第3遺跡

2012

鳥取県埋蔵文化財センター
国土交通省 倉吉河川国道事務所

序

一般国道9号中山名和道路の改築に伴う本発掘調査は、鳥取県埋蔵文化財センターが、国土交通省倉吉河川国道事務所の委託を受けて、平成21年度から実施し、平成22年度末時点で延べ約3万平方メートルの発掘調査を行っています。

平成22年度に発掘調査を行った、大山町に所在する下市築地ノ峯東通第3遺跡では、縄文時代の落とし穴、弥生時代の竪穴住居跡などを確認しました。落とし穴は、一般的に出土遺物が少なく、時期決定においてはその形態により縄文時代と判断することが多いのですが、今回の調査では、落とし穴中の堆積土から抽出した微細な炭化材を年代測定することによる時期決定を試みております。今後もしできる限り、このような自然科学的な手法を適切に取り入れながら、埋蔵文化財の解明に取り組んでいくこととしております。これらの調査成果は、この地域の歴史を解明するための重要な資料となると考えます。

本書は、その調査結果を報告書としてまとめたものです。この報告書が、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財が郷土の誇りとなることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成24年2月

鳥取県埋蔵文化財センター

所 長 久保 穰二郎

序 文

一般国道9号は山陰地方を東西に結ぶ主要幹線道路であり、広域交通はもとより、観光交通、生活交通など、多様な交通を担う重要な路線です。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、鳥取市青谷町から米子市(鳥取－島根県境)までを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

中山名和道路は、西伯郡大山町八重から同町下市にかけての多種多様な交通による交通混雑の緩和、安全・円滑な交通の確保のほか、災害時の緊急輸送路の代替路線としての機能分担などを目的とし、さらに山陰の地方都市間の連携を強化するとともに、環日本海交流の基幹軸の一翼を担う高規格幹線道路(自動車専用道路)として整備を行っています。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第94条の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成22年度は「殿河内定屋ノ前遺跡」、「下市築地ノ峯東通第2遺跡」、「下市築地ノ峯東通第3遺跡」のほか5箇所の発掘調査について、鳥取県埋蔵文化財センターと委託契約を締結し、発掘調査を行いました。

本書は、上記のうち、「下市築地ノ峯東通第3遺跡」ほか5箇所の調査結果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集に至るまでご尽力いただいた鳥取県埋蔵文化財センターの関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成24年2月




国土交通省 倉吉河川国道事務所

所長 江角 忠也

例 言

1. 本報告書は、国土交通省倉吉河川国道事務所の委託により、鳥取県埋蔵文化財センターが、一般国道9号(中山名和道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、平成22年度に行った下市築地ノ峯東通第3遺跡の本発掘調査、及び殿河内日ノ出峰第1遺跡、殿河内日ノ出峰第2遺跡、下甲退休原第1遺跡、赤坂頭無し遺跡、石井垣上河原遺跡の確認調査の成果である。
2. 本報告書に記載した遺跡の所在地及び調査面積は以下のとおりである。
 - (1)本発掘調査
下市築地ノ峯東通第3遺跡：西伯郡大山町下市399-2ほか 調査面積：4,829㎡
 - (2)確認調査
殿河内日ノ出峰第1遺跡：西伯郡大山町殿河内735-4 調査面積：35.5㎡
殿河内日ノ出峰第2遺跡：西伯郡大山町殿河内735-4 調査面積：116㎡
下甲退休原第1遺跡：西伯郡大山町下甲1041-653 調査面積：170㎡
赤坂頭無し遺跡：西伯郡大山町石井垣363-7ほか 調査面積：446㎡
石井垣上河原遺跡：西伯郡大山町石井垣313-4 調査面積：66㎡
3. 本報告書で示す標高は、下市築地ノ峯東通第3遺跡では2級基準点H18-2-1を、確認調査では国土交通省が設置した近隣の基準点を基準とする標高値を使用した。方位は公共座標北を示す。磁北は、座標北に対し、約7°06′西偏する。なお、X：、Y：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標値である。
4. 本報告書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図「大山」・「赤碕」、1/25,000地形図「淀江」・「御来屋」・「船上山」、大山町作成の1/5,000「大山町地形図」を使用した。
5. 本報告にあたり、下市築地ノ峯東通第3遺跡の調査前後航空写真撮影、基準点測量・方眼測量、調査前後地形測量、出土炭化材の年代測定を業者委託した。
6. 本報告書に掲載した遺物の実測・浄書は埋蔵文化財センターで行った。
7. 本報告書で使用した遺構・遺物写真は調査担当職員が撮影した。
8. 本報告書の編集は加藤・原田が行った。執筆は調査担当職員が分担して行い、目次に執筆者名を記した。
9. 発掘調査によって作成された図面・写真などの記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターに保管している。
10. 現地調査及び報告書作成にあたっては、大山町教育委員会に御協力いただいた。明記して深謝いたします。

凡 例

1. 遺物の注記における遺跡名には以下の略語を用い、合わせて「遺構名、遺物番号、日付」を記入した。
下市築地ノ峯東通第3遺跡：ツキシ3
殿河内日ノ出峰第1遺跡：ヒノデ1 殿河内日ノ出峰第2遺跡：ヒノデ2
下甲退休原第1遺跡：下タイ 赤坂頭無し遺跡：アカカシ 石井垣上河原遺跡：イワカミ
2. 本報告書で用いた遺構・トレンチの略号は以下のとおりである。
SI：竪穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SD：溝・溝状遺構 SK：土坑 P：柱穴・ピット
Tr：トレンチ
3. 本報告書における遺構番号(新)は発掘調査時のもの(旧)と変更している。新旧の遺構名・番号の対応は各遺跡ごとに付した遺構名新旧対照表で示している。
4. 本書における実測図の縮尺については、特殊なものを除き基本的に以下の縮尺としている。
遺構図 SI・SB：1/60、SD・SK：1/40、P：1/40、遺物・礫等検出状況：1/20
遺物実測図 土器：1/3・1/4、石器：1/2・2/3・1/3
確認調査トレンチ平面・断面図：1/80
5. 本書における土層名称・土器色調は、基本的には『新版 標準土色帖』による。
6. 遺物実測図の断面は須恵器を黒塗りとし、それ以外のものは白抜きで示している。また、遺物実測図中におけるトーン及び記号は以下のとおりである。
：赤色顔料塗布、(石器)被熱 ：側縁の潰れ範囲 ：ケズリの方向(砂粒の動き)
S：石器・礫
7. 遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。
8. 本報告書における遺構・遺物の時期決定は下記参考文献を参照した。

【参考文献】

- 小林達雄編 1989『縄文土器大観4』小学館
小林謙一 2008「縄文時代の暦年代」『縄文時代の考古学2 歴史のものさし - 縄文時代研究の編年体系 -』同成社
清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年 - 山陽・山陰編 -』木耳社
牧本哲雄 1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第6遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

目 次

序
序文
例言
凡例

第1章 調査の経緯

| | |
|---------------|--------|
| 第1節 調査に至る経緯 | (加藤) 1 |
| 第2節 調査の方法と経過 | (加藤) 2 |
| 1 調査区の名称と調査方法 | 2 |
| 2 本発掘調査の経過 | 2 |
| 3 確認調査の経過 | 2 |
| 第3節 調査体制 | (加藤) 4 |

第2章 遺跡の立地

| | |
|-----------|--------|
| 第1節 遺跡の立地 | (加藤) 5 |
| 第2節 歴史的環境 | (中村) 6 |

第3章 下市築地ノ峯東通第3遺跡の調査成果

| | |
|----------------------------|--------------------|
| 第1節 遺跡の概要 | (加藤) 9 |
| 1 遺跡の立地 | 9 |
| 2 基本層序 | 9 |
| 3 調査の概要 | 11 |
| 第2節 遺構 | (加藤・原田) 13 |
| 1 竪穴住居跡 | 13 |
| 2 掘立柱建物跡 | 14 |
| 3 土坑 | 15 |
| 第3節 遺構外出土遺物 | (加藤・原田) 32 |
| 1 土器 | 32 |
| 2 石器 | 34 |
| 第4節 自然科学分析の成果 | (パリノ・サーヴェイ株式会社) 36 |
| 下市築地ノ峯東通第3遺跡の 放射性炭素年代測定 | 36 |

| | | |
|------------|---------|----|
| 第5節 総括 | (加藤・原田) | 39 |
| 1 調査成果のまとめ | | 39 |
| 2 落とし穴について | | 41 |

第4章 確認調査の概要

| | | |
|-------------------------|---------|----|
| 第1節 概要 | (加藤) | 46 |
| 第2節 殿河内日ノ出峰第1遺跡・第2遺跡の調査 | (加藤・原田) | 47 |
| 第3節 下甲退休原第1遺跡の調査 | (加藤・原田) | 50 |
| 第4節 赤坂頭無し遺跡の調査 | (加藤・原田) | 53 |
| 第5節 石井垣上河原遺跡の調査 | (加藤・原田) | 65 |

写真図版

報告書抄録

挿図目次

| | | | |
|---------------------|----|-----------------|----|
| 第1図 中山名和道路関係遺跡位置図 | 1 | 第18図 SK 9 | 21 |
| 第2図 遺跡位置図 | 5 | 第19図 SK10 | 21 |
| 第3図 周辺遺跡分布図 | 7 | 第20図 SK11 | 21 |
| | | 第21図 SK12 | 22 |
| 下市築地ノ峯東通第3遺跡 | | 第22図 SK13 | 22 |
| 第4図 調査地周辺の地形 | 9 | 第23図 SK14 | 23 |
| 第5図 調査前地形測量図 | 10 | 第24図 SK15及び出土土器 | 24 |
| 第6図 基本層序概念図 | 11 | 第25図 SK16 | 25 |
| 第7図 遺構配置図 | 12 | 第26図 SK17 | 25 |
| 第8図 SI 1 | 13 | 第27図 SK18 | 25 |
| 第9図 SI 1 出土土器 | 13 | 第28図 SK19 | 26 |
| 第10図 SB 1 | 14 | 第29図 SK20及び出土土器 | 26 |
| 第11図 SK 1 及び出土土器 | 15 | 第30図 SK21及び出土土器 | 27 |
| 第12図 SK 2・3 | 16 | 第31図 SK22及び出土土器 | 28 |
| 第13図 SK 4 | 17 | 第32図 SK23 | 29 |
| 第14図 SK 5 及び出土土器 | 18 | 第33図 SK24及び出土土器 | 29 |
| 第15図 SK 6 | 19 | 第34図 SK25及び出土土器 | 29 |
| 第16図 SK 7 | 19 | 第35図 SK26及び出土遺物 | 29 |
| 第17図 SK 8 | 20 | 第36図 SK27 | 30 |

| | | |
|------|--------------------------------------|----|
| 第37図 | SK28 | 30 |
| 第38図 | SK29・30及び出土土器 | 31 |
| 第39図 | 縄文土器出土点数模式図 | 32 |
| 第40図 | 遺構外出土土器(1) | 33 |
| 第41図 | 遺構外出土土器(2) | 33 |
| 第42図 | 石器出土点数模式図 (礫石器を除く) | 34 |
| 第43図 | 遺構外出土石器 | 35 |
| 第44図 | 下市築地ノ峯東通第3遺跡の 暦年較正曲線 | 38 |
| 第45図 | 下市築地ノ峯東通第3遺跡 遺構配置図 | 40 |
| 第46図 | 下市築地ノ峯東通第3遺跡 落とし穴分類図 | 41 |
| 第47図 | 下市築地ノ峯東通第3遺跡 落とし穴分類別分布及び 推定ルート | 43 |

確認調査

| | | |
|------|-----------|----|
| 第48図 | 確認調査遺跡位置図 | 46 |
|------|-----------|----|

殿河内日ノ出峰第1・第2遺跡

| | | |
|------|-----------------------------------|----|
| 第49図 | 殿河内日ノ出峰第1・第2遺跡 トレンチ位置及び基本層序柱状図 | 47 |
|------|-----------------------------------|----|

| | | |
|------|------------------|----|
| 第50図 | 殿河内日ノ出峰第1遺跡 Tr.1 | 49 |
| 第51図 | 殿河内日ノ出峰第2遺跡出土遺物 | 50 |

下甲退休原第1遺跡

| | | |
|------|-----------------|----|
| 第52図 | トレンチ位置及び基本層序柱状図 | 51 |
| 第53図 | 出土遺物 | 52 |

赤坂頭無し遺跡

| | | |
|------|----------------|----|
| 第54図 | トレンチ配置図 | 54 |
| 第55図 | 基本層序柱状図 | 56 |
| 第56図 | Tr.6・20・21出土土器 | 57 |
| 第57図 | Tr.7及びSI1出土土器 | 58 |
| 第58図 | Tr.8 | 60 |
| 第59図 | Tr.13及び出土土器 | 61 |
| 第60図 | Tr.12及び出土土器 | 62 |
| 第61図 | Tr.11出土土器 | 63 |
| 第62図 | Tr.14 | 63 |

石井垣上河原遺跡

| | | |
|------|-----------------|----|
| 第63図 | トレンチ配置及び基本層序柱状図 | 65 |
| 第64図 | Tr.4 | 67 |
| 第65図 | Tr.4出土土器 | 68 |
| 第66図 | Tr.6 | 69 |
| 第67図 | Tr.2・3・5出土遺物 | 70 |

挿表目次

下市築地ノ峯東通第3遺跡

| | | |
|----|------------------------------|----|
| 表1 | 遺構名新旧対照表 | 12 |
| 表2 | 石器石材別組成表 | 34 |
| 表3 | 下市築地ノ峯東通第3遺跡の 放射性炭素年代測定結果 | 37 |
| 表4 | 下市築地ノ峯東通第3遺跡 落とし穴分類 | 41 |
| 表5 | 下市築地ノ峯東通第3遺跡 出土土器観察表(1) | 44 |
| 表6 | 下市築地ノ峯東通第3遺跡 出土土器観察表(2) | 45 |

| | | |
|----|-------------------------|----|
| 表7 | 下市築地ノ峯東通第3遺跡 出土石器観察表 | 45 |
|----|-------------------------|----|

確認調査

| | | |
|----|----------|----|
| 表8 | 確認調査成果一覧 | 46 |
|----|----------|----|

殿河内日ノ出峰第1・第2遺跡

| | | |
|-----|------------------------|----|
| 表9 | 殿河内日ノ出峰第1遺跡トレンチ一覧 | 48 |
| 表10 | 殿河内日ノ出峰第2遺跡トレンチ一覧 | 50 |
| 表11 | 殿河内日ノ出峰第2遺跡 出土土器観察表 | 50 |

| | | |
|-----|-------------|----|
| 表12 | 殿河内日ノ出峰第2遺跡 | |
| | 出土石器観察表 | 50 |

下甲退休原第1遺跡

| | | |
|-----|---------|----|
| 表13 | トレンチ一覧 | 51 |
| 表14 | 出土石器観察表 | 52 |
| 表15 | 出土石器観察表 | 52 |

赤坂頭無し遺跡

| | | |
|-----|---------|----|
| 表16 | トレンチ一覧 | 57 |
| 表17 | 出土石器観察表 | 64 |

石井垣上河原遺跡

| | | |
|-----|---------|----|
| 表18 | トレンチ一覧 | 66 |
| 表19 | 出土石器観察表 | 70 |
| 表20 | 出土石器観察表 | 70 |

文中写真目次

| | | | | |
|-----|--------------|-----|----------|---|
| 写真1 | 下市築地ノ峯東通第3遺跡 | 写真3 | 確認調査調査風景 | 4 |
| | 表土剥ぎ風景 | | | 3 |
| 写真2 | 下市築地ノ峯東通第3遺跡 | | | |
| | SB1調査風景 | | | 3 |

PL.目次

下市築地ノ峯東通第3遺跡

| | | | | | |
|-------|---|--------------------|-------|---|----------------------|
| PL. 1 | 1 | 調査地周辺の地形(北から) | PL. 6 | 1 | SK1完掘状況(北東から) |
| | 2 | 調査地周辺の地形(南から) | | 2 | SK1検出状況(東から) |
| PL. 2 | 1 | 調査地周辺の地形(西から) | | 3 | SK2完掘状況(東から) |
| | 2 | 調査地全景(左が北) | | 4 | SK2・3土層断面(東から) |
| PL. 3 | 1 | SI1完掘状況(南東から) | | 5 | SK3完掘状況(南西から) |
| | 2 | SI1土層断面(西から) | | 6 | SK3底面ピット土層断面(南西から) |
| PL. 4 | 1 | SI1 P1土層断面(北東から) | PL. 7 | 1 | SK3底面ピット礫検出状況(南から) |
| | 2 | SI1 P2土層断面(東から) | | 2 | SK3底面盛土(南東から) |
| | 3 | SI1 P3土層断面(東から) | | 3 | SK3土層断面(西から) |
| | 4 | SI1 P3炭化材検出状況(東から) | | 4 | SK4完掘状況(南から) |
| | 5 | SB1完掘状況(北西から) | | 5 | SK4底面ピット礫検出状況(東から) |
| PL. 5 | 1 | SB1 P1土層断面(北から) | | 6 | SK4土層断面(南東から) |
| | 2 | SB1 P2土層断面(東から) | PL. 8 | 1 | SK5完掘状況(北から) |
| | 3 | SB1 P3土層断面(南から) | | 2 | SK5底面ピット内礫検出状況(北西から) |
| | 4 | SB1 P4土層断面(南西から) | | | |
| | 5 | SB1 P5土層断面(北東から) | | | |
| | 6 | SB1 P6土層断面(北西から) | | | |
| | 7 | SB1 P7土層断面(北から) | | | |

| | | | | | |
|-------|---|-------------------------|-------|---|-------------------------|
| | 3 | SK 5底面ピット検出状況 (北西から) | | 2 | SK16底面ピット土層断面 (南西から) |
| | 4 | SK 5底面ピット土層断面(南西から) | | 3 | SK16土層断面(南から) |
| | 5 | SK 5土層断面(北西から) | | 4 | SK17完掘状況(北から) |
| | 6 | SK 6完掘状況(北から) | | 5 | SK17底面ピット検出状況 (南から) |
| PL. 9 | 1 | SK 6底面ピット土層断面 (西から) | | 6 | SK17土層断面(南西から) |
| | 2 | SK 6底面ピット検出状況 (南から) | PL.16 | 1 | SK18完掘状況(北西から) |
| | 3 | SK 6土層断面(南西から) | | 2 | SK18底面ピット土層断面 (南から) |
| | 4 | SK 6検出状況(北から) | | 3 | SK18底面ピット検出状況 (北から) |
| | 5 | SK 7完掘状況(東から) | | 4 | SK18土層断面(南西から) |
| | 6 | SK 7土層断面(北から) | | 5 | SK19完掘状況(北東から) |
| PL.10 | 1 | SK 7検出状況(東から) | | 6 | SK19底面ピット土層断面 (南東から) |
| | 2 | SK 8完掘状況(北から) | | 1 | SK19底面ピット検出状況 (西から) |
| | 3 | SK 8底面ピット土層断面 (南西から) | PL.17 | 2 | SK19土層断面(北東から) |
| | 4 | SK 8底面ピット検出状況 (南から) | | 3 | SK20完掘状況(北から) |
| | 5 | SK 8土層断面(東から) | | 4 | SK20底面ピット検出状況 (北西から) |
| | 6 | SK 8検出状況(東から) | | 5 | SK20土層断面(南から) |
| PL.11 | 1 | SK 9完掘状況(北から) | | 6 | SK21完掘状況(北から) |
| | 2 | SK 9土層断面(北東から) | | 1 | SK21礫検出状況(北から) |
| | 3 | SK 9検出状況(北から) | PL.18 | 2 | SK21土層断面(北から) |
| | 4 | SK10完掘状況(東から) | | 3 | SK22完掘状況(北から) |
| | 5 | SK10底面ピット検出状況 (東から) | | 4 | SK22炭化材検出状況(南西から) |
| | 6 | SK10土層断面(北東から) | | 5 | SK22土層断面(西から) |
| PL.12 | 1 | SK11完掘状況(北東から) | | 6 | SK22検出状況(北から) |
| | 2 | SK11底面ピット検出状況 (北西から) | PL.19 | 1 | SK23完掘状況(北西から) |
| | 3 | SK11土層断面(南西から) | | 2 | SK23土層断面(北から) |
| | 4 | SK12完掘状況(東から) | | 3 | SK23検出状況(北から) |
| | 5 | SK12底面ピット土層断面(西から) | | 4 | SK24完掘状況(北東から) |
| | 6 | SK12底面ピット検出状況(南から) | | 5 | SK24土層断面(東から) |
| PL.13 | 1 | SK13完掘状況(北から) | | 6 | SK24検出状況(北西から) |
| | 2 | SK13底面ピット土層断面 (南西から) | PL.20 | 1 | SK25土層断面(西から) |
| | 3 | SK13底面ピット検出状況(南から) | | 2 | SK26土層断面(北から) |
| | 4 | SK13土層断面(南東から) | | 3 | SK26検出状況(南から) |
| | 5 | SK14完掘状況(北西から) | | 4 | SK27完掘状況(南から) |
| | 6 | SK14底面ピット土層断面 (南西から) | | 5 | SK27土層断面(南から) |
| PL.14 | 1 | SK14底面ピット検出状況 (北西から) | | 6 | SK27検出状況(北西から) |
| | 2 | SK14土層断面(南西から) | PL.21 | 1 | SK28土層断面(1)(南西から) |
| | 3 | SK14検出状況(北西から) | | 2 | SK28土層断面(2)(北西から) |
| | 4 | SK15完掘状況(北から) | | 3 | SK29土層断面(北東から) |
| | 5 | SK15土層断面(南西から) | | 4 | SK30完掘状況(北東から) |
| | 6 | SK15検出状況(北西から) | | 5 | SK30遺物出土状況(北東から) |
| PL.15 | 1 | SK16完掘状況(北から) | PL.22 | 6 | SK30土層断面(北東から) |
| | | | | 1 | SK21・22・24~26出土土器 |
| | | | | 2 | SK 1・5・15・20出土土器 |
| | | | | 3 | 調査地内出土石器 |

- 4 遺構外出土土器(1)
 PL.23 1 SI 1 出土土器
 2 SK30出土土器
 3 遺構外出土土器(2)

殿河内日ノ出峰第2遺跡

- PL.24 1 Tr.2(南西から)
 2 Tr.5(北東から)
 3 Tr.6(北西から)
 4 Tr.7(南東から)
 5 Tr.4土層断面(東から)
 6 Tr.8(南東から)

殿河内日ノ出峰第1遺跡

- PL.25 1 Tr.1(南東から)
 2 Tr.1 SK 1 完掘状況(南東から)
 3 Tr.1 SK 1 埋土下層炭化材
 (南から)
 4 Tr.1 SK 1 埋土上層炭化材
 (西から)
 5 Tr.1 SK 1 土層断面(東から)
 6 Tr.1 SK 1 土層断面(南西から)

殿河内日ノ出峰第1遺跡 下甲退休原第1遺跡

- PL.26 1 Tr.2(東から)
 2 Tr.3(東から)
 3 Tr.4(南東から)
 4 Tr.5(東から)
 5 出土土器
 6 出土石器

下甲退休原第1遺跡

- PL.27 1 Tr.2(西から)
 2 Tr.5(北西から)
 3 Tr.9(北西から)
 4 Tr.4(東から)
 5 Tr.7(北東から)
 6 Tr.8(南西から)

赤坂頭無し遺跡

- PL.28 1 Tr.7(北西から)
 2 Tr.7 SI 1 土層断面(北西から)
 3 Tr.7 SI 1 土層断面(東から)
 PL.29 1 Tr.8(南西から)
 2 Tr.8 東壁土層断面(北から)
 3 Tr.8 東壁流出溝土層断面(北西から)
 PL.30 1 Tr.10(北東から)
 2 Tr.5(西から)
 3 Tr.6(北東から)
 4 Tr.20(北から)
 5 Tr.21(南から)

- 6 Tr.18(西から)
 PL.31 1 Tr.22(南東から)
 2 Tr.15(南東から)
 3 Tr.13(北東から)
 4 Tr.13 P 1(北東から)
 5 Tr.13北壁土層断面(南東から)
 6 Tr.13(北東から)
 PL.32 1 Tr.12(南西から)
 2 Tr.12 P 1 土層断面(南から)
 3 Tr.12 P 2 土層断面(北から)
 4 Tr.12 P 3 土層断面(北から)
 5 Tr.12 SK 1・SD 1 土層断面
 (北から)

- PL.33 1 2区東側調査前状況(北東から)
 2 Tr.14(南西から)
 PL.34 1 Tr.3(南西から)
 2 Tr.3北壁土層断面(南東から)
 3 Tr.23(北西から)
 4 Tr.24(南東から)
 5 Tr.4(南東から)
 6 Tr.1(北西から)
 PL.35 1 Tr.6・7・20・21出土土器
 2 Tr.11・12・13出土土器

石井垣上河原遺跡

- PL.36 1 Tr.4石列(西から)
 2 Tr.4石列(北から)
 PL.37 1 Tr.4西壁土層断面(南東から)
 2 Tr.4南壁土層断面(北西から)
 3 Tr.4北壁土層断面(南西から)
 PL.38 1 Tr.4土器出土状況(北東から)
 2 Tr.6(北西から)
 3 Tr.6集石検出状況(南西から)
 PL.39 1 Tr.1(北東から)
 2 Tr.2(南西から)
 3 Tr.3(北から)
 4 Tr.5(北から)
 5 出土土器(1)
 6 出土土器(2)
 7 出土石器

第1章 調査の経緯

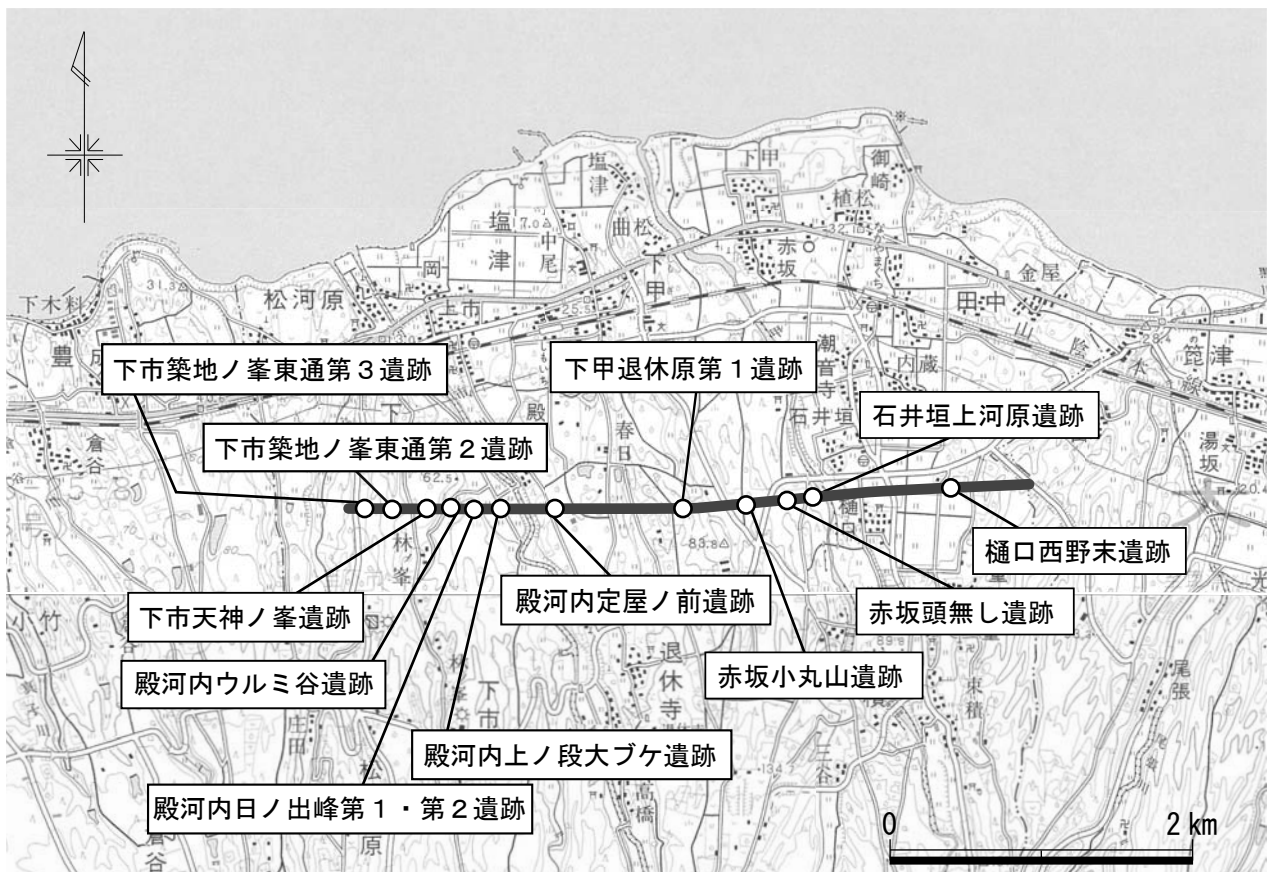
第1節 調査に至る経緯

本調査は、平成22年度に一般国道9号中山名和道路の改築に伴い実施した、周知の埋蔵文化財包蔵地(以下、「遺跡」と記載)の本発掘調査及び確認調査である。本発掘調査を実施した遺跡は、下市築地ノ峯東通第3遺跡(西伯郡大山町下市)である。確認調査を実施した遺跡は、殿河内日ノ出峰第1遺跡・殿河内日ノ出峰第2遺跡(大山町殿河内)、下甲退休原第1遺跡(大山町下甲)、赤坂頭無し遺跡(大山町石井垣)、石井垣上河原遺跡(大山町石井垣)である。

山陰地方では、国道9号線の交通混雑緩和、荒天時の交通障害解消、災害時の緊急輸送の代替道路確保及び将来の国土幹線道路整備として、山陰自動車道の整備事業が進められている。鳥取県西部地域では、米子道路、名和淀江道路が自動車専用道路として一部供用されている。

このうち、大山町内における中山名和道路の計画地内及び隣接地には多数の遺跡が所在し、建設に先立ち計画地内の遺跡の有無、範囲、内容等を確認する必要性が生じた。このため、平成19年度から大山町教育委員会により、国庫補助事業として逐次試掘・確認調査が実施された。また、平成20・21年度には、鳥取県埋蔵文化財センターが確認調査を実施した。

上記試掘・確認調査の結果を受け、文化財保護法に基づく手続きを踏まえ、鳥取県埋蔵文化財センターが調査主体となり、平成21年度は樋口西野末遺跡の一部及び下市天神ノ峯遺跡の本発掘調査を实



第1図 中山名和道路関係遺跡位置図

施し、平成22年度に発掘調査報告書を刊行した。

平成22年度は下市築地ノ峯東通第3遺跡(本書)、下市築地ノ峯東通第2遺跡、殿河内定屋ノ前遺跡の本発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の方法と経過

1 調査区の名称と調査方法

下市築地ノ峯東通第3遺跡の調査前の状況は畑地である。調査に先立ち、世界測地系公共座標第V系に載るように調査区内に10m方眼の基準杭を設定し、グリッドを設けた。グリッド名は、東西南北軸交点の北東杭名を採った。座標は、C4杭(X: -54270m、Y: -70820m)、G7杭(X: -54310m、Y: -70850m)などとなった。標高値は、平成18年度名和地区外路線測量業務で設置された2級基準点H18-2-1における成果を基準とした。

確認調査は、大山町殿河内から同町石井垣までの約2.3kmの区間内に所在する周知の遺跡を対象とし、幅1~2m、長さ5~10m程度のトレンチを設定し調査を行った。座標については、国土交通省が設置した近隣の基準点を使用した。

上記本発掘調査・確認調査では、検出した遺構・遺物の記録に光波トランシット及び自動レベルを用い、簡易遣り方測量及び光波トランシットによる座標測量を行った。現地での写真撮影は35mm判、ブローニー(6×7)判により、地上又は写真用足場上から行った。また、調査前状況及び調査後状況写真については、ラジコンヘリコプターからの空中写真撮影(ブローニー判カメラ使用)も併せて行った。遺物写真撮影は、4×5判カメラを用いた。いずれも白黒ネガフィルム並びにカラーポジフィルムを使用し、適宜デジタルカメラも使用した。

2 本発掘調査の経過

下市築地ノ峯東通第3遺跡は、平成21年度に実施した確認調査(鳥取県埋蔵文化財センター 2011)の結果を受け本発掘調査を実施することとなった。

調査は、4月6、7日に調査前地形測量、4月8日に調査前航空写真撮影、4月12日から15日に重機による表土剥ぎを実施し、表土剥ぎ終了後4月26日に方眼杭の打設を行った。4月28日から発掘作業員の稼働を開始し、遺構検出・掘り下げ、及び遺構の実測作業などを行った。その後8月19日に調査後航空写真撮影、8月27日に調査後地形測量を実施し、遺構の実測等を経て9月3日に発掘調査に係る全ての現地作業を終了した。

調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡1棟、時期不明の掘立柱建物1棟、土坑30基を検出した。土坑のうち、20基は掘方の形態的特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。調査面積は4,829㎡である。

3 確認調査の経過

確認調査は、殿河内日ノ出峰第1遺跡・殿河内日ノ出峰第2遺跡・下甲退休原第1遺跡・赤坂頭無し遺跡・石井垣上河原遺跡の5遺跡について、8月23日~12月22日にかけて実施した。延べ調査面積は833.5㎡である。

下甲退休原第1遺跡は、平成21年度における確認調査実施範囲の西隣に位置する。8月23日から9

月14日にかけてトレンチを10本設定し調査を行ったが、遺構を確認することはできなかった。調査面積は170㎡である。

殿河内日ノ出峰第2遺跡は狭小な丘陵上に位置し、その東隣の斜面及び斜面下位の平坦部が殿河内日ノ出峰第1遺跡である。殿河内日ノ出峰第2遺跡は、9月16日から10月4日にかけてトレンチ10本を設定した(延べ面積116㎡)。殿河内日ノ出峰第1遺跡は、11月24日から12月22日にかけてトレンチ5本を設定した(延べ面積35.5㎡)。調査の結果、殿河内日ノ出峰第2遺跡では遺構を確認できなかった。殿河内日ノ出峰第1遺跡では土坑を1基確認したが、出土遺物が皆無であることや他トレンチの状況を勘案すると、それ以外に遺構が存在する可能性が極めて低いと判断し、検出した土坑を完掘し調査完了とすることとした。

10月5日から11月22日にかけて、石井垣上河原遺跡・赤坂頭無し遺跡においてトレンチ30本(延べ面積512㎡)を設定し、調査を行った。その結果、石井垣上河原遺跡では弥生時代及び古墳時代の墳墓に伴う可能性を持つ石列等を確認した。赤坂頭無し遺跡では古墳時代を中心とした遺物が出土し、竪穴住居跡、土坑、ピット、溝状遺構等を確認した。

【参考文献】

鳥取県埋蔵文化財センター 2011『樋口西野末遺跡 下市天神ノ峯遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書37

調査日誌抄

下市築地ノ峯東通第3遺跡

| | | | |
|-------|----------------|--------|--------------------------------------|
| 4月6日 | 調査前地形測量開始 | 7月27日 | SB1完掘写真撮影 |
| 4月8日 | 調査前航空写真撮影 | 8月9日 | 重複する落とし穴(SK2・3)の先後関係を確認 |
| 4月12日 | 重機による表土剥ぎ開始 | 8月19日 | 調査後航空写真撮影 |
| 4月26日 | 方眼測量実施 | 8月30日 | 調査後地形測量終了 |
| 4月28日 | 発掘作業員稼働、調査開始 | 9月3日 | 現地作業終了 |
| 5月6日 | 遺構検出作業開始 | 11月13日 | 下市築地ノ峯東通第2遺跡現地説明会において、遺物、写真パネルを展示、解説 |
| 5月18日 | 表土中から石匙出土 | | |
| 6月9日 | SI1検出 | | |
| 6月25日 | 谷部の掘り下げ、遺構精査開始 | | |



写真1 下市築地ノ峯東通第3遺跡 表土剥ぎ風景



写真2 下市築地ノ峯東通第3遺跡 SB1調査風景

確認調査

| | |
|---------------|-----------------|
| 8月23日～9月14日 | 下甲退休原第1遺跡確認調査 |
| 9月16日～10月4日 | 殿河内日ノ出峰第2遺跡確認調査 |
| 10月5日～10月21日 | 石井垣上河原遺跡確認調査 |
| 10月14日～11月22日 | 赤坂頭無し遺跡確認調査 |
| 11月24日～12月22日 | 殿河内日ノ出峰第1遺跡確認調査 |



写真3 確認調査 調査風景

第3節 調査体制

下記の体制で発掘調査、報告書作成を行った。

鳥取県埋蔵文化財センター

| | |
|---------|-------------|
| 所 長 | 久保 穰二郎 |
| 次 長 | 中尾 淳一 |
| 総 務 係 | |
| 副 主 幹 | 福島 良 |
| 主 事 | 楠原 真衣 |
| 事 務 職 員 | 大丸 真紀、岡村 好美 |

発掘事業室

| | |
|---------|------------------------------|
| 室 長 | 山柘 雅美(兼調整係長) |
| 調 整 係 | |
| 発掘調査員 | 岩垣 命 |
| 事 務 職 員 | 太田垣 聡美(4月～5月)、高橋 恵美子(6月～10月) |

調査担当(琴浦調査事務所)

| | |
|---------|----------------------|
| 副 主 幹 | 牧本 哲雄(総括責任者) |
| 文化財主事 | 加藤 裕一(調査担当責任者)、原田 克美 |
| 事 務 職 員 | 山根 美穂 |

第2章 遺跡の立地

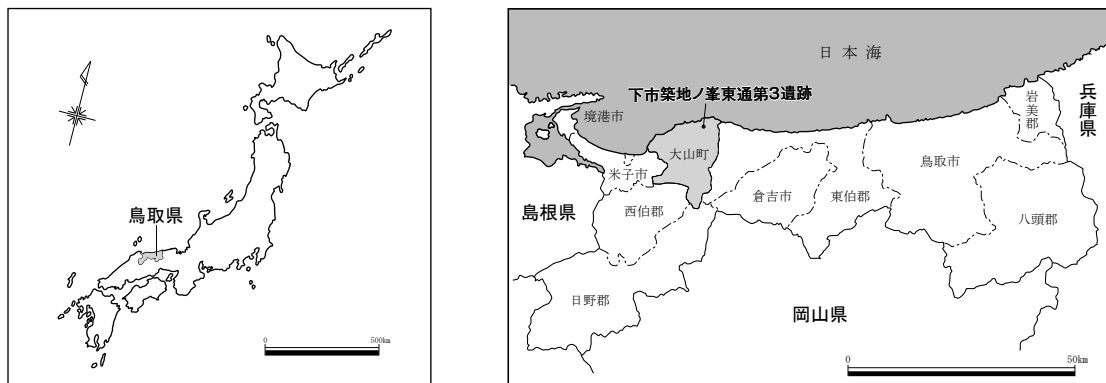
第1節 遺跡の立地

下市築地ノ峯東通第3遺跡が所在する大山町は、鳥取県西部、西伯郡の北東部を占める位置にあり、県庁所在地の鳥取市からは西へ約80km、県西部中核都市の米子市に隣接する。町域は、南端の大山(1,729m)を頂点に、船上山(615m)から金屋付近の日本海に至る線を東辺とし、西辺は大山を頂点に下槇原・孝霊山(751m)を結び保田付近の日本海に至る、不整逆三角状に広がる形を呈す。東西約15km、南北約20km、総面積は約189.8km²を測り、人口は18,089人(平成23年7月現在)の農畜産漁業・観光を主な産業にする町である。

本町の地勢は、大山山系から放射状に流れる小河川により開削並びに侵食され残った、手指状に延びる台地上の尾根と急峻な小溪谷が繰り返す火山性台地と、甲川、下市川、真子川、名和川、阿弥陀川流域に発達した平野部からなる。平野部は、肥沃な黒ボク地帯で、特に阿弥陀川流域は県内でも屈指の広さとなる扇状地を形成している。台地は、御来屋砂礫層上に主に大山火山灰土の堆積したもので、海岸線付近まで延びている。町内には、前述の大山山麓に源流を発する河川の他、大小計12本の川が日本海に注いでいる。

日本海に面した地域では、御崎港、御来屋港を中心に沿岸漁業が盛んで、特にウニ・板ワカメは特産品になっている。町域北側から中部域は、農業を中心とした第1次産業が盛んである。低地では水田、台地上ではブロッコリー、スイカ、果樹などの栽培が盛んである。旧名和地域は台地上にあるという特性から、多数の溜め池が形成され、農業用水として利用されている。町域南側は、高原を利用した畜産が盛んであるとともに、国立公園にも指定され、大山寺・大神山神社などの著名な文化財もある。また、冬季には多くのスキー客で賑わっており、四季を通じて多くの観光客が訪れる県内でも屈指の観光地になっている。

下市築地ノ峯東通第3遺跡は大山町東部(旧中山町)、海岸線から約1.7kmの丘陵上に位置する。調査地の北西部は小規模な谷地形をなしており、標高は概ね72~75mを測る。



第2図 遺跡位置図

第2節 歴史的環境

ここでは、下市築地ノ峯東通第3遺跡が所在する大山町東部（旧中山町）を中心に、隣接する琴浦町西部地域も含めた周辺遺跡の概要について述べる。

旧石器時代

鳥取県下の旧石器資料は15遺跡で確認されている。周辺では、梅田萱峯遺跡（73）でナイフ形石器が、豊成上金井谷峰遺跡（15）で台形石器が、本来の位置を遊離した状態で出土している。

縄文時代

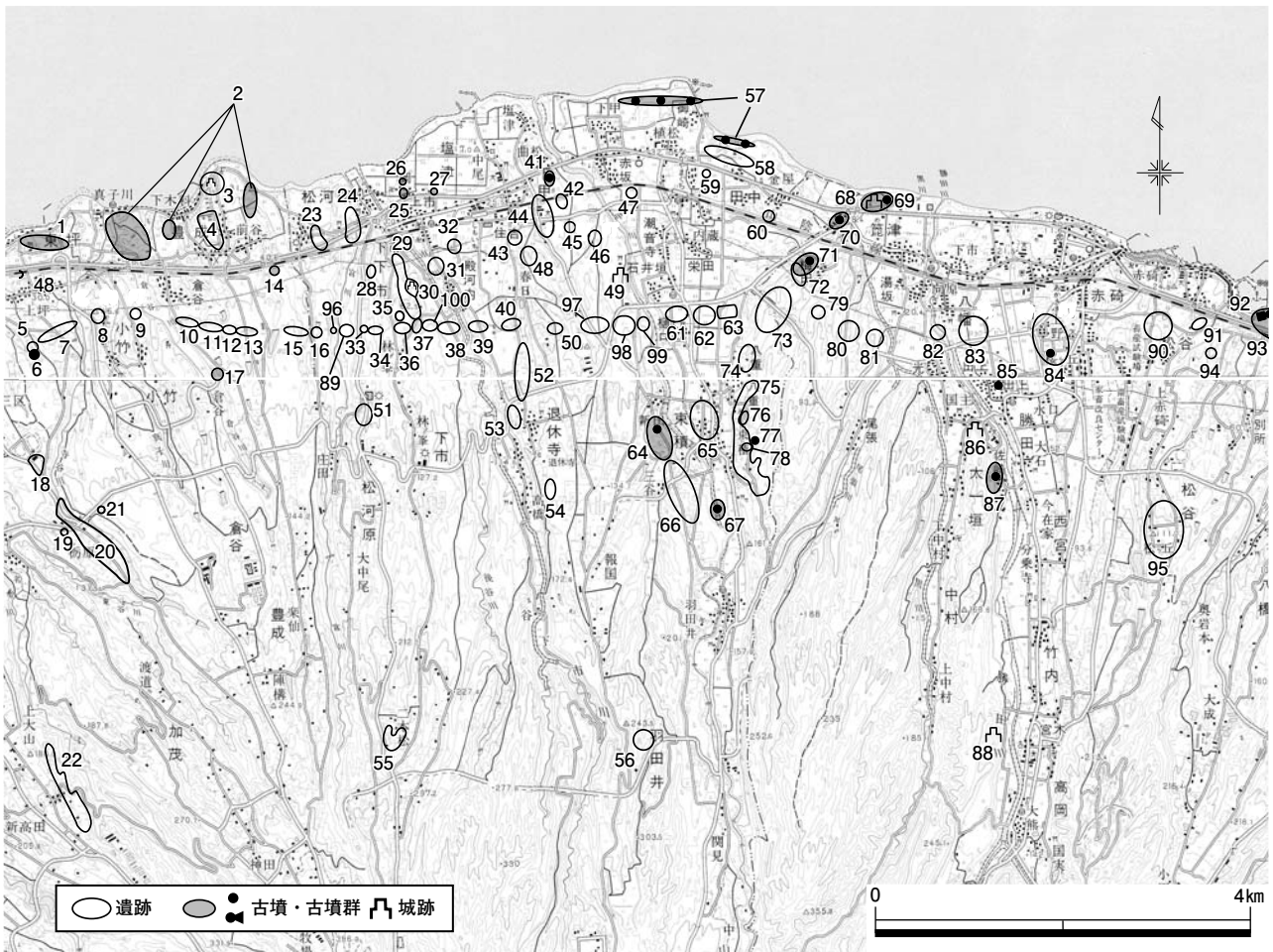
当該地域は、県内においてもこの時期の遺跡が多数存在する地域である。草創期では、羽田井・退休寺などで有茎尖頭器が表採され、住吉第2遺跡（48）で有茎尖頭器、細工塚遺跡（31）で局部磨製石斧が出土している。早期では、遺構は伴わないが赤坂後口山遺跡（46）、退休寺飛渡り遺跡（53）、上大山第1遺跡（22）、角塚遺跡（18）などで押型文土器が出土している。前期では、石器製作を行っていたと推定される下市築地ノ峯東通第2遺跡（34）、貯蔵穴が確認された細工塚遺跡がある。後期では、南原千軒遺跡（82）で石囲い炉をもつ堅穴住居跡が検出されている。遺構外から県内6例目となる土偶が出土している。その他、落とし穴が八重第3遺跡（74）、小松谷遺跡（44）、下甲抜堤遺跡（45）、赤坂後口山遺跡、下市築地峯東通第3遺跡（33）、小竹上鷹ノ尾遺跡（9）など多数の遺跡で検出されており、狩猟場として丘陵・微高地縁辺部が利用された様子が窺われる。

弥生時代

この地域では前期の遺構は少なく、樋口第1遺跡（62）、三谷遺跡（66）などで土器が出土している程度である。中期になると遺跡数が増え、集落遺跡として細工塚遺跡、退休寺遺跡（52）、退休寺飛渡り遺跡、南原千軒遺跡、殿河内定屋ノ前遺跡（39）、化粧川遺跡（90）などが挙げられる。倉谷荒田遺跡（11）では、中期後葉の堅穴住居跡から鉄製品が出土しており、山陰地方における鉄器の普及開始段階の一例となっている。墳墓では墓ノ上遺跡（91）、別所女夫岩峯遺跡（琴浦町別所）で木棺墓が見つかっており、梅田萱峯遺跡では、中期後葉の貼石を施した長方形の墳丘墓（梅田萱峯弥生墳丘墓）が検出された。現時点で県内では最古級の弥生墳丘墓である。後期には、退休寺遺跡、八重第3遺跡、福留遺跡（84）、籠津乳母ヶ谷第2遺跡（80）、梅田萱峯遺跡、梅田東前谷中峯遺跡（79）など丘陵上に集落が多数造営される。湯坂遺跡（81）では埋葬に伴って小型の墳丘墓を増築した例があり、山陰地方では珍しい鉄石英製の管玉が副葬されていた。

古墳時代

古墳時代に入ると大型前方後円墳が各地に築かれる。当該地域の古墳は、ほとんどが中期から後期にかけてのものである。前方後方墳の別所1号墳（笠取塚古墳、全長52m）（92）は、墳形の特徴から前期に築造された可能性がある。また、中期後半の高塚古墳（岡1号墳）（27）は朝顔形埴輪・形象埴輪などが出土した直径30mの大型円墳で当地域の首長墳と位置づけられる。中期から後期にかけては丘陵や段丘上に古墳や横穴墓が群を成して築造されるようになる。御崎古墳群（57）、別所古墳群（93）、籠津古墳群（69）、坂ノ上古墳群（70）、梅田（栄田）古墳群（71）、東積古墳群（67）、三谷古墳群（64）、豊成古墳群（2）などがある。御崎古墳群・別所古墳群・梅田古墳群では、横穴式石室が採用される直前の時期に、この地域独特の河原石を用いた箱式石棺を主体部にもつものがみられる。後期には、岩屋堂古墳（岡古墳）（25）、長野2号墳、岩屋平ル古墳（77）、豊成28号墳、出上



1 東坪古墳群、2 豊成古墳群、3 長野城跡、4 浜ノ坂遺跡、5 西坪岩屋谷遺跡、6 西坪岩屋谷古墳、7 東坪中林遺跡、8 小竹下宮尾遺跡、9 小竹上鷹ノ尾遺跡、10 倉谷西中田遺跡、11 倉谷荒田遺跡、12 豊成叶林遺跡、13 豊成上神原遺跡、14 豊成28号墳、15 豊成上金井谷峰遺跡、16 松河原上奥田第2遺跡、17 倉谷横穴群、18 角塚遺跡、19 栃原窯跡、20 栃原遺跡、21 上寺谷たたら、22 上大山第1遺跡、23 松河原第3遺跡、24 松河原第2遺跡、25 岩屋堂古墳(岡古墳)、26 岡3号古墳、27 高塚古墳、28 築地峯東通遺跡、29 林之峯東通遺跡、30 天守山遺跡・天守山城跡、31 細工塚遺跡、32 向畑遺跡、33 下市築地ノ峯東通第3遺跡、34 下市築地ノ峯東通第2遺跡、35 要害ノ峯遺跡、36 下市天神ノ峯遺跡、37 殿河内ウルミ谷遺跡、38 殿河内上ノ段大ブケ遺跡、39 殿河内定屋ノ前遺跡、40 住吉中平野遺跡、41 曲松古墳群、42 林之峯遺跡、43 住吉第1遺跡、44 小松谷遺跡、45 下甲坂堤遺跡、46 赤坂後口山遺跡、47 赤坂大五輪塔、48 住吉第2遺跡、49 石井垣城跡、50 下甲退休原第1遺跡、51 築地ノ峰第3遺跡、52 退休寺遺跡、53 退休寺飛渡り遺跡、54 退休寺第1遺跡、55 二本松遺跡、56 羽田井遺跡、57 御崎古墳群、58 御崎第1遺跡、59 御崎第2遺跡、60 田中川上遺跡、61 樋口長田遺跡、62 樋口第1遺跡、63 樋口西野末遺跡、64 三谷古墳群、65 樋口第2遺跡、66 三谷遺跡、67 東積古墳群、68 籠津城跡、69 籠津古墳群、70 坂ノ上古墳群、71 梅田(栄田)古墳群、72 梅田六ツ塚遺跡、73 梅田萱峯遺跡、74 八重第3遺跡、75 八重第4遺跡、76 八重第1遺跡、77 岩屋平古墳、78 八重第2遺跡、79 梅田東前谷中峯遺跡、80 籠津乳母ヶ谷第2遺跡、81 湯坂遺跡、82 南原千軒遺跡、83 八幡遺跡、84 福留遺跡、85 出上岩屋古墳、86 條山城跡、87 太一垣古墳群、88 大仏山城跡、89 下市前築地遺跡、90 化粧川遺跡、91 墓ノ上遺跡、92 別所1号墳(笠取塚古墳)、93 別所古墳群、94 松谷中峰遺跡、95 松ヶ丘遺跡、96 松河原上奥田第3遺跡、97 赤坂小丸山遺跡、98 赤坂頭無し遺跡、99 石井垣上河原遺跡、100 殿河内日ノ出峰第1・第2遺跡

第3図 周辺遺跡分布図

岩屋古墳(県史跡)(85)など切石積みの横穴式石室をもつものがあり、米子市淀江町域にかけての同一文化圏を形成している。この時代の集落は、依然として丘陵上に営まれる傾向が強く、前期の八重第3遺跡、下市前築地遺跡(89)、中期から後期の住吉第2遺跡、南原千軒遺跡などがある。また籠津乳母ヶ谷第2遺跡では、後期の鍛冶工房が検出されている。

古代

大山町東部(旧中山町域)の古代の行政区画は伯耆国の汗入郡に属する。『倭名類聚抄』によれば、東積・汗入・奈和・尺度・高住・新井の6郷が記載されるが、旧中山町域は東積・汗入の2郷が相当する。汗入郡衙の位置については明らかになっていない。隣接する琴浦町内においては、斎尾廃寺が位置する加勢蛇川右岸が伯耆国八橋郡の中心地であったと推定されている。斎尾廃寺は山陰地方唯一の国特別史跡で、金堂や塔、講堂跡が残り、これらを取り囲む土塁状の高まりも存在する。伽藍配置は法隆寺式である。

この時代の集落には、竪穴住居跡や掘立柱建物跡が確認された小松谷遺跡、掘立柱建物跡が確認さ

れた樋口西野末遺跡（63）、八幡遺跡（83）、倉谷西中田遺跡（10）がある。倉谷西中田遺跡では、製塩土器の廃棄土坑が検出され、一般集落での塩の流通状況を窺うことができる。田中川上遺跡（60）は、溝から8世紀前半の須恵器・土師器がまとまって出土している。

生業に関わる遺跡としては、下市築地峯東通第2遺跡（34）で、須恵器窯3基、製鉄炉1基、炭窯多数が検出されている。栃原窯跡（19）は須恵器窯と考えられるが、上寺谷たたら（21）の製鉄炉やその周辺での鉄滓表採事例などから、炭窯の可能性も指摘されている。

また、大山町名和の名和下菖蒲谷遺跡では、時期は不明であるが古代山陰道推定路線上で道路状遺構を確認している。小竹下宮尾遺跡（8）でも道路状遺構が検出されている。

中世

律令体制の崩壊とともに封建制社会が形成される。旧名和町域には、名和氏に関する旧跡が認められる。隣接する琴浦町南部にそびえる標高615mの船上山には、南北朝期に後醍醐天皇が隠岐から逃れた行宮跡（国史跡）がある。

当該地域では中世城館が各地に残り、籠津豊後守敦忠の居城とされる石井垣城跡（49）、天守山城跡（30）、條山城跡（86）、大仏山城跡（88）がある。また、長野城跡（3）・籠津城（槇城）跡（68）など日本海沿岸部にも砦跡が築かれている。

南原千軒遺跡では平地に立地する居館跡が確認され、大規模な堀によって方形に区画された屋敷内には、主屋とみられる大型の掘立柱建物跡や屋敷墓、鍛冶工房が検出されている。倉谷西中田遺跡は丘陵上に立地する自然地形や堀により方形に区画された居館跡が見つかった。堀の拡張と出土遺物から二時期の変遷が窺える。区画に自然地形と堀を利用した出現期から、屋敷地の拡充を経て、四方を堀で区画する「方形居館」が完成したものと考えられる。屋敷内からは掘立柱建物跡や井戸、土壇墓が検出され、外郭に鍛冶工房が付随していた可能性がある。

また、中世における特徴的な石造物として、琴浦町内の海岸部から船上山にかけて、鎌倉末期と推定される宝塔と宝篋印塔の二様式を合わせもつ独特の形態の赤碕塔が7基確認されている。

【参考文献】

中山町誌編集委員会編 2009『新修中山町誌』

名和町誌編纂委員会編 1978『名和町誌』

鳥取県埋蔵文化財センター 1986『鳥取県の古墳』

鳥取県埋蔵文化財センター 1988『旧石器・縄文時代の鳥取県』

鳥取県埋蔵文化財センター 1989『歴史時代の鳥取県』

内藤正中・真田廣幸・日置条左エ門著 1997『県史31 鳥取県の歴史』（株）山川出版社

鳥取県教育委員会 2004『鳥取県中世城館分布調査報告書』第2集（伯耆編）

発掘調査報告書類については割愛させていただいた。

第3章 下市築地ノ峯東通第3遺跡の調査成果

第1節 遺跡の概要

1 遺跡の立地(第2・4・5図、PL.1・2)

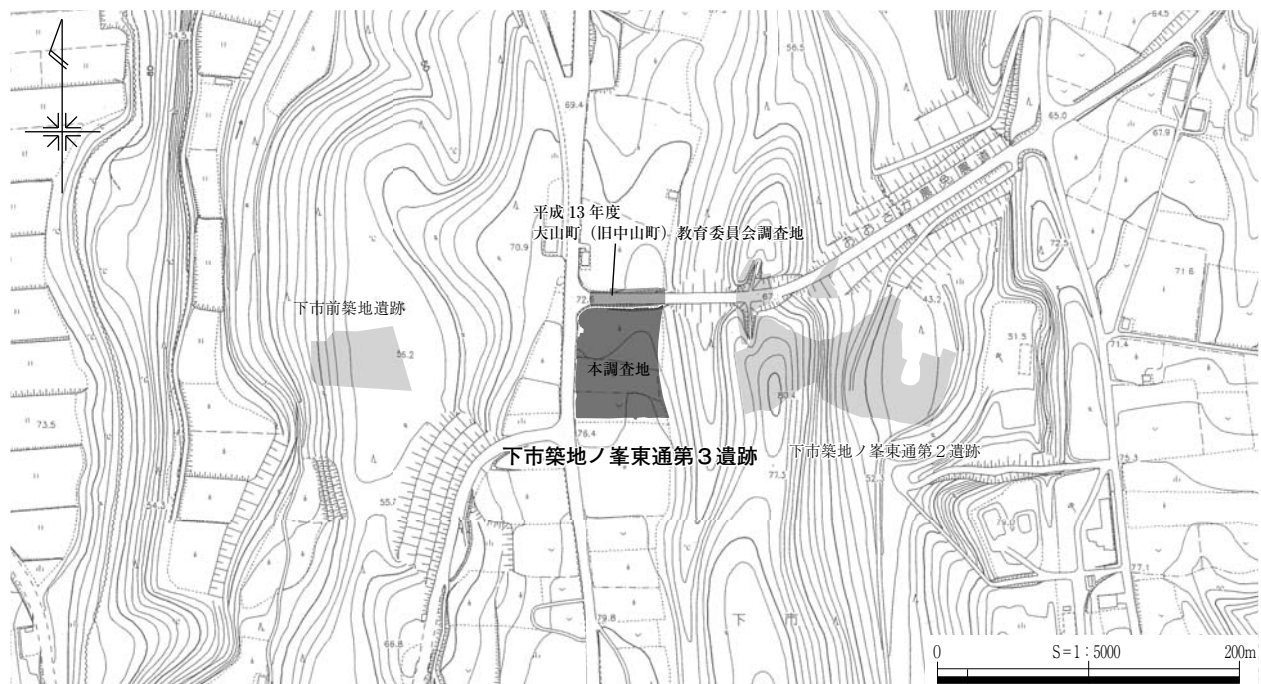
下市築地ノ峯東通第3遺跡は、大山北麓に手指状に派生する丘陵上に位置する。これらの丘陵は大山山系に源を発する多数の中小河川の浸食を受け、放射状に開析されたことにより生じたものである。調査地内北西側には小規模な埋没谷があり、複雑な開析作用の一端を窺わせる。調査地の標高は概ね72~76mで、北方の日本海へ向けて緩やかに傾斜する地形を示す。

本遺跡の西側には宮川が流れており、調査地から西は同川へと下る斜面となる。その斜面地中腹には平坦地が広がり、下市前築地遺跡が所在する。一方の東側は急峻で狭い谷地形となり、谷地形を挟み東側には下市築地ノ峯東通第2遺跡が位置する。

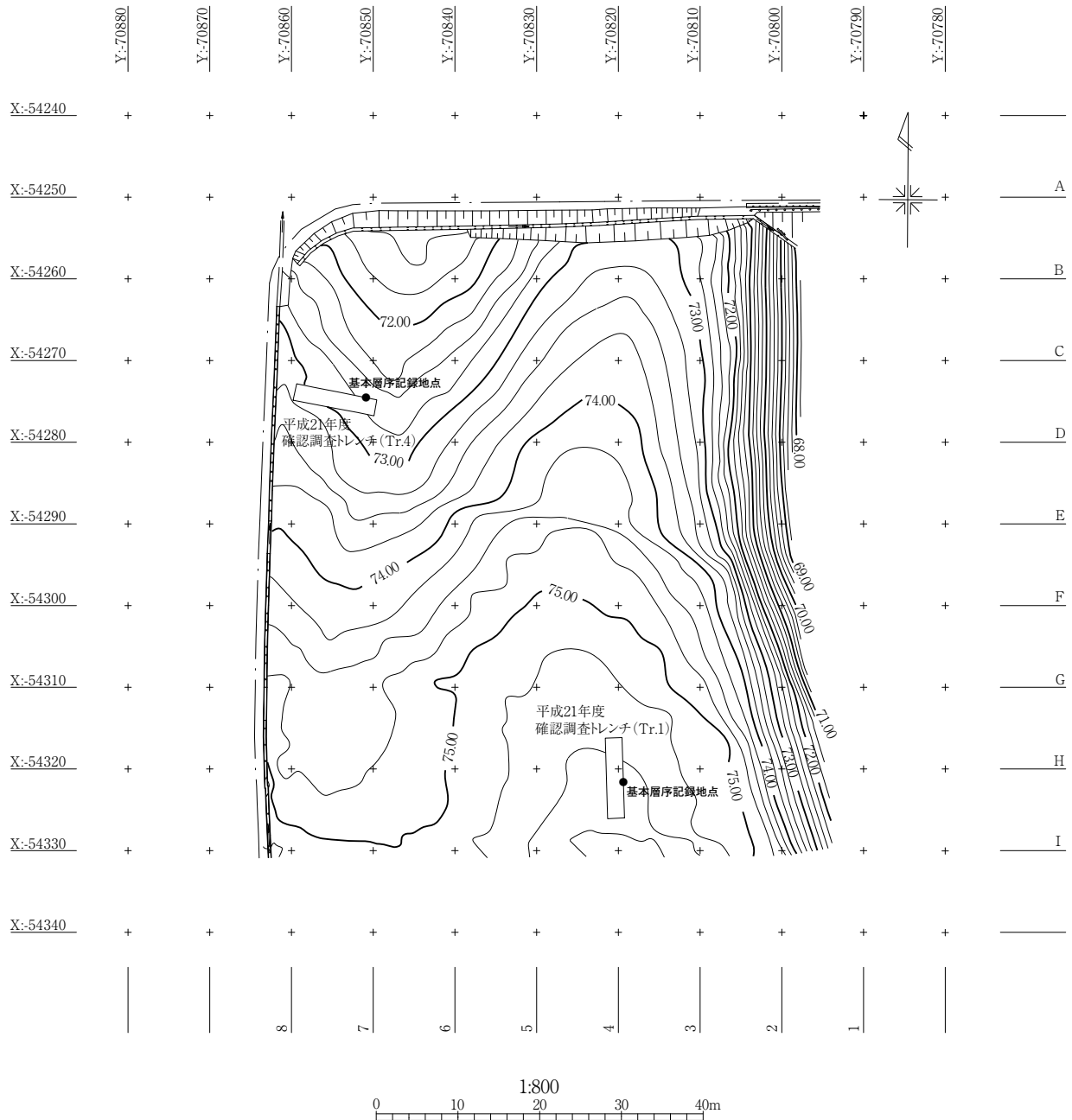
調査地は畑地として利用されており、梨等の作物栽培に伴う耕作溝等の改変があり、調査地全体が大きく削平を受けていた。なお、本発掘調査に先立ち、平成21年度に鳥取県埋蔵文化財センターが確認調査を実施し、2箇所の特レンチ調査を行った(Tr.1・4)。また、平成13年度には、県営逢坂地区農免農道整備事業に伴い、本調査地北隣が大山町教育委員会(当時：中山町教育委員会)により発掘調査されている(中山町教育委員会2002)。

2 基本層序(第6図)

調査地内の土層堆積は、先述の確認調査特レンチを利用し、確認を行った。小規模な谷地形を呈する調査地西側を谷部、東側を丘陵部と呼称し、それぞれ概要を述べる。



第4図 調査地周辺の地形



第5図 調査前地形測量図

【谷部】

I層：極暗褐色土（7.5YR2/3）表土。10cm程度堆積し、著しく土壌化する。遺物が少数出土する。

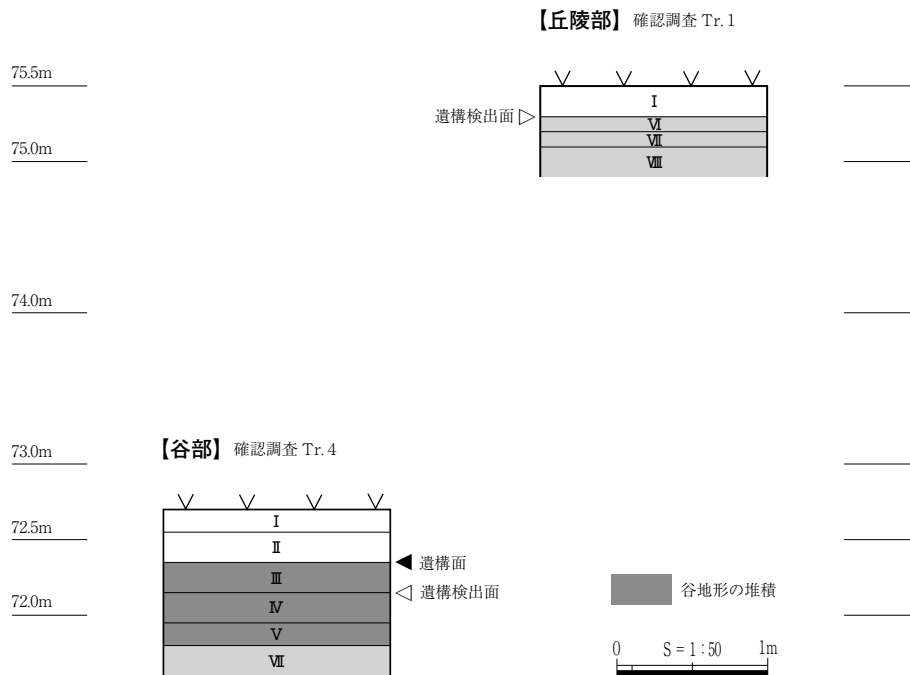
II層：黒褐色土（10YR3/3）表土下に堆積する耕作土。ロームブロックを多く含み、粘性・締まりともに弱い。遺物を若干包含する。

続くⅢ～Ⅴ層は谷地形に係る堆積である。谷を埋める堆積の上位は畑地化及び耕作に伴い削平を受けているとみられ、以下の堆積中からは遺物は出土していない。

Ⅲ層：黒色（7.5YR1.7/1）を呈する。現状では本層上面が遺構面となる。

Ⅳ層：黒褐色（7.5YR2/2）を呈する堆積で、Ⅲ層の色調と遺構埋土の色調が類似し検出が困難であったため、原則として本層上面が遺構検出面となった。

Ⅴ層：黒褐色（7.5YR3/1）を呈する堆積。



第6図 基本層序概念図

VII層：浅黄橙色（10YR8/4）、乳白色を呈するローム層。

【丘陵部】

I層：暗褐色土（10YR3/3）表土及び耕作土。10～20cm程度堆積し、遺物が少数出土する。

VI層：黄橙色土（10YR7/8）始良丹沢火山灰（AT）に由来する堆積と考えられる。耕作による改変のため、表土直下が本層となり、上面で遺構検出を行った。本層以下では遺物は出土していない。

VII層：浅黄橙色（10YR8/4）谷部と対応する堆積。乳白色を呈するローム層。

VIII層：明赤褐色（5YR5/8）を呈するローム層。粘性・締まりともに強い。

3 調査の概要（第7図、表1）

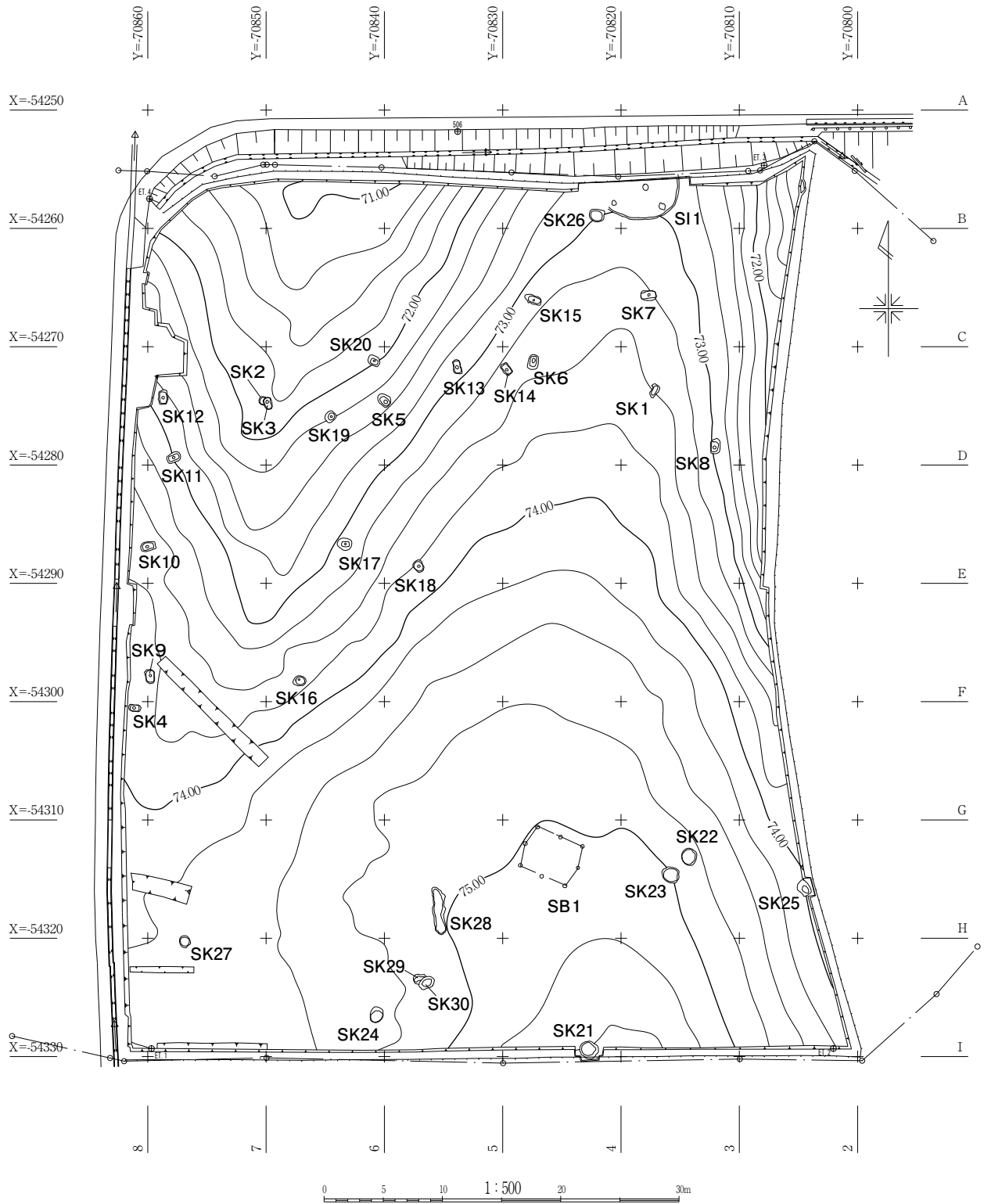
下市築地ノ峯東通第3遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居跡1棟、時期不明の掘立柱建物跡1棟、土坑30基を検出した。遺構名称は調査時と報告時で多く異なるため、表1にその対照一覧を示した。

土坑のうち、20基は出土遺物や掘方の形態的特徴から縄文時代に帰属する落とし穴と考えられる（SK1～20）。落とし穴とした土坑のうち4基の埋土中からは縄文土器片が出土している。落とし穴以外にも縄文土器が出土する土坑（SK21・22、24～26）が散見されたほか、遺構外からも縄文土器は一定数の出土が認められた。縄文土器は多くが細片で詳細が不明だが、早期、中期、後期もしくは晩期に帰属する可能性を持つ資料が出土している。縄文時代に帰属する可能性を持つ土坑の底面及び埋土下層から炭化材を抽出し、放射性炭素年代測定を実施したところ、縄文時代前期、中期の年代観を得た。詳細は本章第4節に掲載している。

他では、弥生時代の遺構として後期後葉の竪穴住居跡1棟を検出したが、後世の改変のため遺存状態は不良であった。遺構外を含めると当該期から古墳時代前期にかけての遺物が少数だが確認できた。

【参考文献】

中山町教育委員会 2002『下市築地ノ峯東通第2遺跡 下市築地ノ峯東通第3遺跡』中山町文化財調査報告書第24集



第7図 遺構配置図

表1 遺構名新旧対照表

| 新遺構名 | 旧遺構名 | 新遺構名 | 旧遺構名 | 新遺構名 | 旧遺構名 | 新遺構名 | 旧遺構名 | 新遺構名 | 旧遺構名 | 新遺構名 | 旧遺構名 |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| SI 1 | SI 1 | SK 5 | SK16 | SK11 | SK23 | SK17 | SK25 | SK23 | SK 4 | SK29 | SK13 |
| SB 1 | SB 1 | SK 6 | SK18 | SK12 | SK26 | SK18 | SK22 | SK24 | SK 1 | SK30 | SK12 |
| SK 1 | SK 9 | SK 7 | SK 8 | SK13 | SK17 | SK19 | SK27 | SK25 | SK 6 | | |
| SK 2 | SK28 | SK 8 | SK 7 | SK14 | SK21 | SK20 | SK30 | SK26 | SK10 | | |
| SK 3 | SK29 | SK 9 | SK11 | SK15 | SK19 | SK21 | SK 3 | SK27 | SK 2 | | |
| SK 4 | SK14 | SK10 | SK24 | SK16 | SK20 | SK22 | SK 5 | SK28 | SK15 | | |

第2節 遺構

1 竪穴住居跡

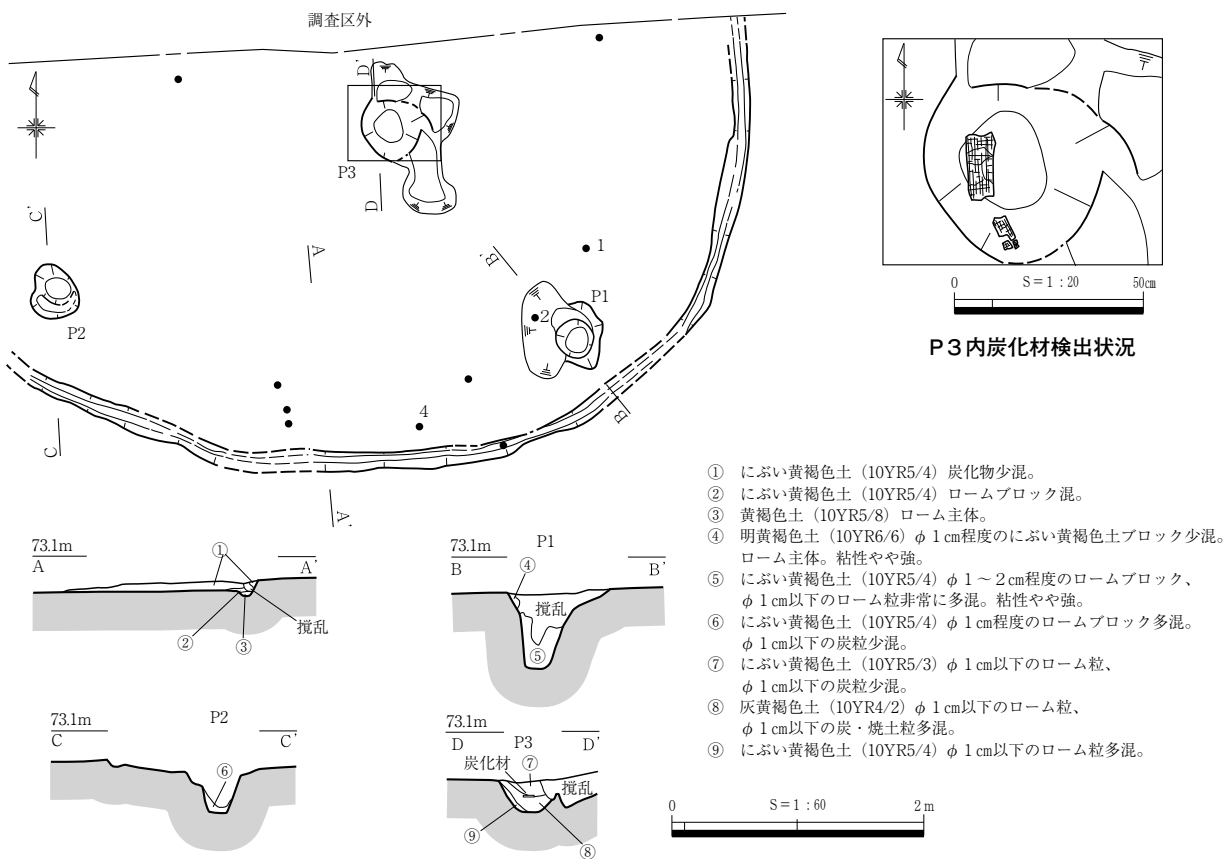
SI 1 (第8・9図、PL.3・4・23)

A 3・4グリッド、調査地北側の標高73.0mに位置する。表土・耕作土直下で確認した遺構である。平面プランの概ね北半分が調査区外となる。また、後世の削平により掘方の大半を失っていた。

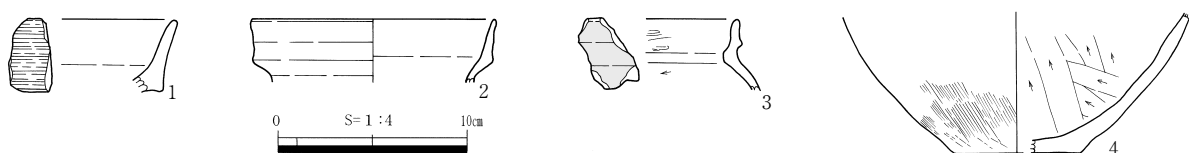
平面形は径7m程度の円形と考えられ、検出面からの深さは最大で15cmで、かろうじて周壁溝や床面が遺存するにすぎない。埋土はにぶい黄褐色を呈し、若干の炭化物粒を包含する。

ピットは3基確認した(P1～3)。P1・2は位置から主柱穴と考えられる。攪乱により埋土の残存状態が悪く、柱痕跡は確認できなかった。P3は床面のほぼ中央に位置することから中央ピットに該当すると考える。埋土中位で炭化材を検出したが、P3も樹木根や耕作による攪乱を大きく受けていた。

遺物は床面直上で数点の土器片を確認したほか、遺構内外の攪乱土中から若干数土器が出土し、4点を図示した(第9図1～4)。1・2は床面直上、3・4は埋土中からの出土である。1は壺又は甕の口縁部資料で、口縁帯に多条平行沈線が施される。2は甕で、口縁帯に施文が為されないタイプ。



第8図 SI 1



第9図 SI 1 出土土器

3は小型の甕で、外面に赤色顔料が塗布される。4は壺又は甕の底部資料である。

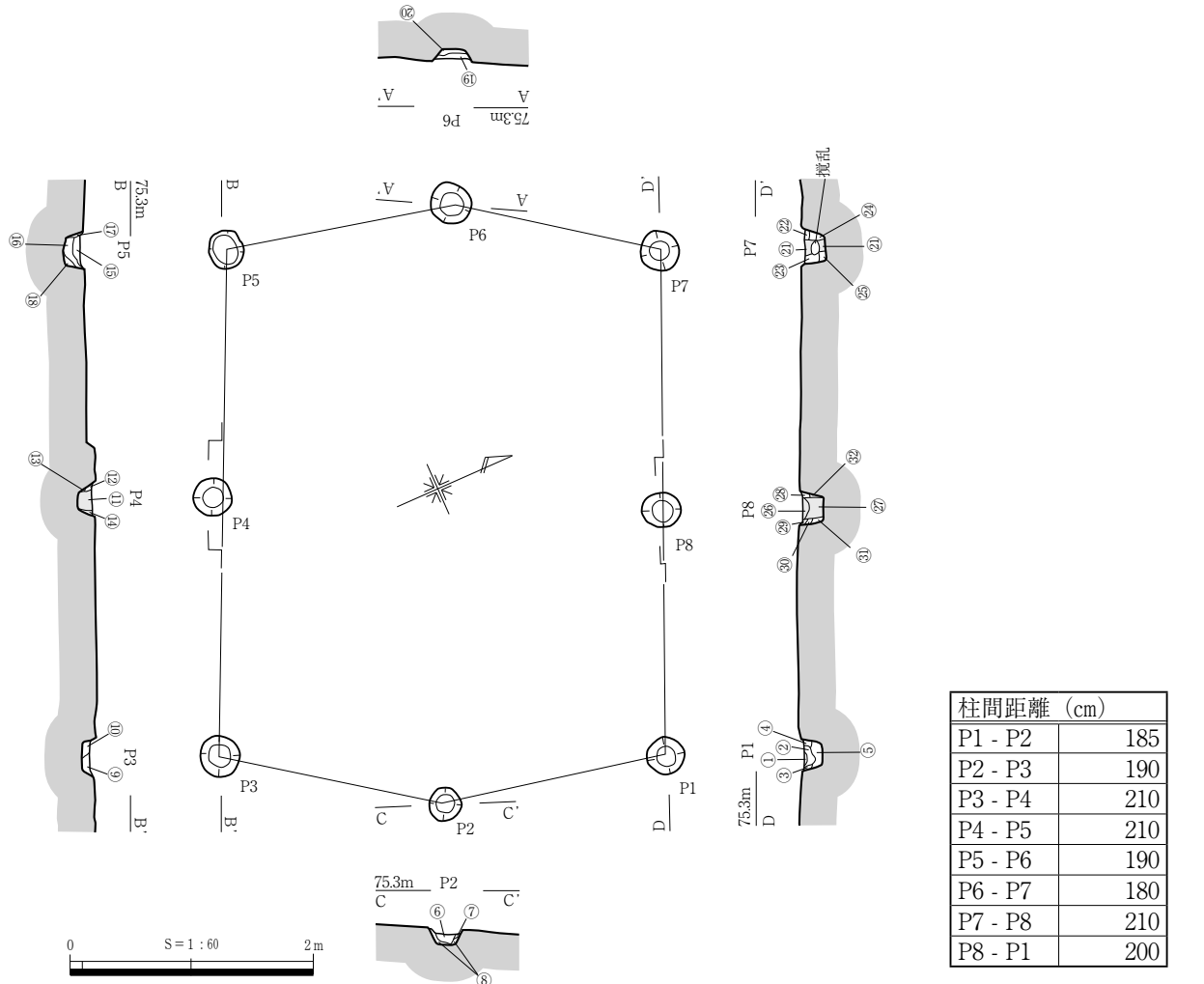
上記出土遺物の特徴から、本遺構の帰属時期は弥生時代後期後葉と考える。

2 掘立柱建物跡

SB 1 (第10図、PL.4・5)

G4グリッド、調査地南側の標高75.0m付近に位置する。表土・耕作土直下で検出した。

桁行2間(4.2m)、梁行2間(3.6m)の建物で、平面積は16.4㎡である。主軸方向はN-66°-Wである。



- ① におい黄褐色土 (10YR4/3)
φ 1mm以下のローム粒微混。
- ② 灰黄褐色土 (10YR4/2)
φ 1mm以下のローム粒多混。
- ③ におい黄褐色土 (10YR5/4)
φ 1cm以下のローム・炭粒微混。
- ④ 褐灰色土 (10YR4/1)
φ 1cm以下のローム粒多混。
- ⑤ 褐灰色土 (10YR4/1)
φ 1~2cm程度のロームブロック多混。
- ⑥ 灰黄褐色土 (10YR4/2)
φ 1cm以下のローム・炭粒混。
- ⑦ におい黄褐色土 (10YR5/4)
φ 1cm以下の灰黄褐色土粒混。
- ⑧ におい黄褐色土 (10YR5/3)
φ 1cm以下のローム粒多混。
- ⑨ 灰黄褐色土 (10YR4/2)
φ 1cm以下のローム粒多混。
- ⑩ 灰黄褐色土 (10YR4/2)
φ 1cm以下のローム・炭粒少混。
- ⑪ 灰黄褐色土 (10YR4/2)
φ 1cm程度のロームブロック、φ 1cm以下のローム・炭粒少混。

- ⑫ 褐灰色土 (10YR4/1)
φ 1cm以下のロームブロック少混。
- ⑬ におい黄褐色土 (10YR5/4)
φ 1cm以下の灰黄褐色土粒微混。
- ⑭ におい黄褐色土 (10YR5/4)
φ 1cm以下の灰黄褐色土粒微混。粘性やや強。
- ⑮ 灰黄褐色土 (10YR4/2)
φ 1~3cm程度のロームブロック、φ 1cm以下のローム・炭粒少混。
- ⑯ 灰黄褐色土 (10YR5/2)
φ 1~3cm程度のロームブロック多混。
- ⑰ におい黄褐色土 (10YR5/4)
φ 1cm以下のローム・炭粒少混。
- ⑱ におい黄褐色土 (10YR5/4)
φ 1cm程度のロームブロック多混。
- ⑲ 灰黄褐色土 (10YR4/2)
φ 1cm程度のロームブロック、φ 1cm以下のローム粒多混。
- ⑳ におい黄褐色土 (10YR5/4)
φ 1cm程度のロームブロック、φ 1cm以下のローム粒多混。
- ㉑ 灰黄褐色土 (10YR4/2)
φ 1cm以下のローム粒多混。
φ 1cm以下の炭粒微混。柱痕跡。

- ㉒ 黄褐色土 (10YR5/6)
ローム主体。φ 1cm程度のにおい黄褐色土
ブロック (10YR5/3) 少混。
- ㉓ 灰黄褐色土 (10YR4/2)
φ 1~2cm程度のロームブロック混。
φ 1cm以下の炭粒微混。
- ㉔ 褐灰色土 (10YR4/1) φ 1cm以下のローム粒混。
- ㉕ 灰黄褐色土 (10YR4/2)
φ 1~2cm程度のロームブロック非常に多混。
- ㉖ 灰黄褐色土 (10YR4/2)
φ 1cm以下のローム・炭粒微混。
柱痕跡。しまりやや弱。
- ㉗ 灰黄褐色土 (10YR4/2)
φ 1cm以下のローム・炭粒混。柱痕跡。
- ㉘ におい黄褐色土 (10YR5/3) φ 1cm以下のローム粒多混。
- ㉙ におい黄褐色土 (10YR5/3) φ 1cm以下のローム粒多混。
- ㉚ 褐灰色土 (10YR4/1) φ 1cm以下のローム粒混。
- ㉛ におい黄褐色土 (10YR4/3) φ 1cm以下のローム粒多混。
- ㉜ におい黄褐色土 (10YR4/3) φ 1cm以下のローム粒少混。

第10図 SB 1

検出面における柱穴(P1～8)の規模は、径が30～35cm、深さは6～20cmで、掘方上位の多くは後世の改変により失われている。P2・4・7・8において、柱痕跡の可能性を持つ堆積を確認した(⑥・⑪・⑲・⑳・㉔層)。これらを柱痕跡とした場合、柱の径は10～15cm程度と想定できる。

柱筋の通りは概ね良好である。P2・P6は柱筋から外方へ若干だが張り出しており、棟持柱を据えた可能性がある。埋土は灰黄褐色、褐灰色を主体とするが、柱穴掘方の遺存状況が不良で埋土の詳細な状況は判然としない。

本遺構からの出土遺物は無く、帰属する時期は不明である。

3 土坑

概要

下市築地ノ峯東通第3遺跡では、土坑を30基確認した。それらのうち20基(SK1～20)は、形態的な特徴から縄文時代に帰属する落とし穴と考えられる。SK1・5・15・20の埋土中からは縄文土器片が出土している。落とし穴以外では、規模や形態が近似した土坑を調査地南側を中心に検出し(SK21～24・26)、それらの埋土中からも少数ながら縄文土器片が出土した。

これらのうち、SK2・5・15・22の埋土から炭化物を検出したため、それらを試料とし放射性炭素年代測定を実施したところ、縄文時代前期、中期相当の測定値を得た。詳細については、本章第4節に記載している。

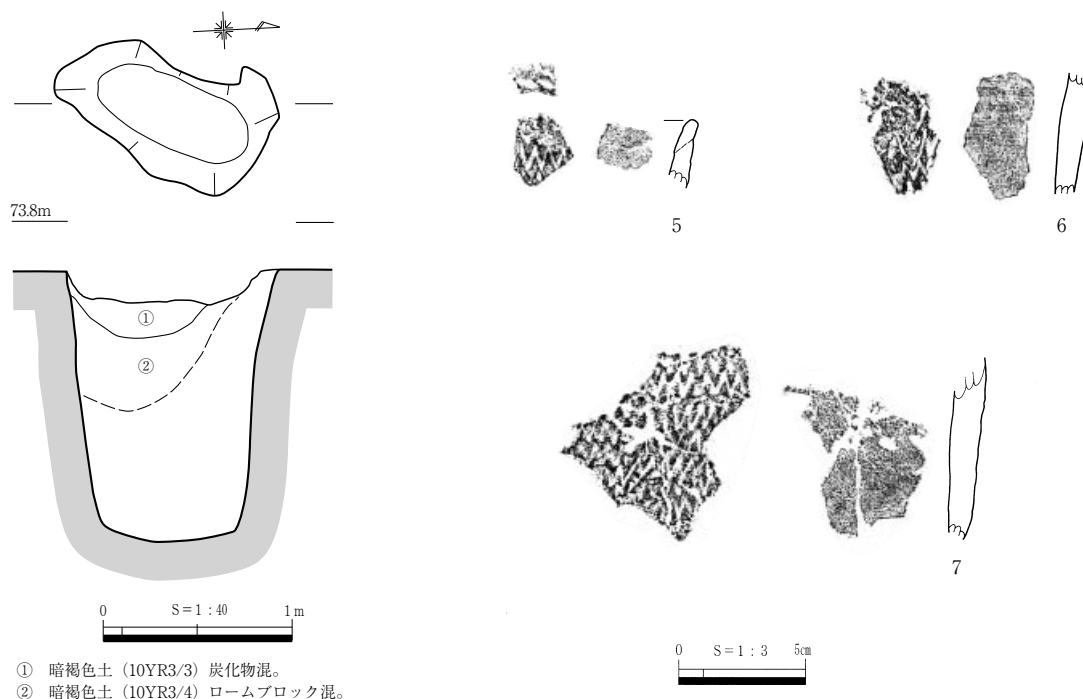
SK1 (第11図、PL.6・22)

C3グリッド、標高73.6mに位置する。表土・耕作土直下で検出した。

平面形は長軸1.10m、短軸0.51mを測る楕円形で、検出面からの深さは1.43mを測る。

埋土は暗褐色土を主体とし、自然堆積による埋没と推測する。

遺物は②層から押型文土器片(第11図5～7)が出土している。5・6は同一個体の可能性が高い。



第11図 SK1 及び出土土器

7は器面の色調が異なるが、焼成状態が異なるためかもしれない。いずれも外面に横位のネガティブな山形文が施され、内面調整はナデである。5は口縁部資料で端部には刻目が入る。これらの資料は黄島式段階に相当する可能性がある。

本土坑は、深さが1.4mある点を重視し落とし穴と考える。帰属時期は、出土遺物から縄文時代早期以降と考えられる。

SK2・3(第12図、PL.6・7)

調査地北西側の谷部、C6・7グリッドに位置する。Ⅲ層下において検出した遺構で、検出面の標高は71.9mである。両土坑は重複しており、埋土土層断面観察の結果、SK2、SK3の順に営まれたことが判明した。形態的な特徴から、両土坑は縄文時代に帰属する落とし穴と考えられる。以下、順に詳細について述べる。

SK2

平面形は径0.68mの円形で、検出面からの深さは0.85mである。

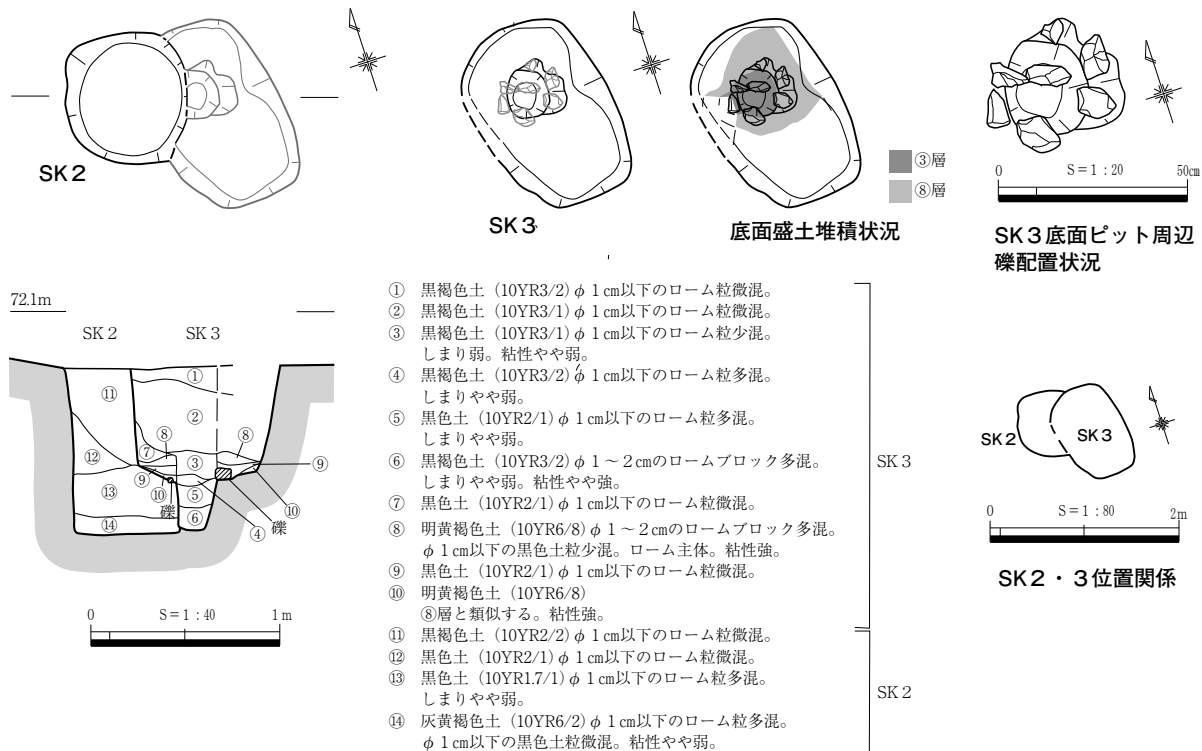
埋土は、黒色・黒褐色土を主体とし、自然堆積により埋没したものであると思われる。底面ピットは無い。

出土遺物は無く詳細な帰属時期は不明であるが、埋土最下層(⑭層)より摘出した炭化物について放射性炭素年代測定を実施し、補正年代 $5,320 \pm 30\text{yrBP}$ (IAAA-103157)と縄文時代前期中葉頃に相当するという結果を得ている。

SK3

平面形は長軸1.03m、短軸0.70mの隅丸長形状を呈する。

本遺構の底面中央では、ピットを1基確認した。ピットの規模は直径22cmの円形である。杭痕跡は確認できなかったが、ピット掘方に沿うように小礫が据えられる。礫の大きさは20cm前後で、調査地近辺で採取できる地山由来の垂角礫を用いており、杭の固定に供したものと理解できる。さらにその



第12図 SK2・3

上に地山由来の粘性の強い土が盛られ(⑧~⑩層)、杭の強固な固定を試みた様子が確認できた。盛土は、埋土掘削の際に一部掘り下げてしまったため、土坑の底面全体に施されたかどうかは不明である。底面ピットの深さは27cmを測る。

本土坑の検出面からの深さは、盛土上面までとした場合0.44m、掘方底面では0.60mとなる。盛土より上位の埋土は黒褐色・黒色土から成り、自然堆積による埋没が想定できる。

本遺構から出土した遺物は無く、詳細な帰属時期は不明である。

SK4 (第13図、PL.7)

F8グリッド、標高73.9mに位置する。表土・耕作土直下で検出した。

平面形は長軸1.03m、短軸0.53mの隅丸長方形で、検出面からの深さは0.79mである。

埋土は黒褐色土を主体とし、自然堆積による埋没と推定する。

本遺構では、底面中央付近でピットを1基検出した。ピットの平面形は長軸24cm、短軸22cmの楕円形で、土坑底面からの深さは54cmである。ピットの埋土は黒色土の単層で、大きさ5~10cm程度の自然礫が複数含まれていた。杭痕跡は認められず正確な杭の位置は不明だが、これらの礫は杭を固定するために充填されていたものと考える。

本遺構から遺物は出土していないが、形態及び規模から縄文時代の落とし穴と考える。

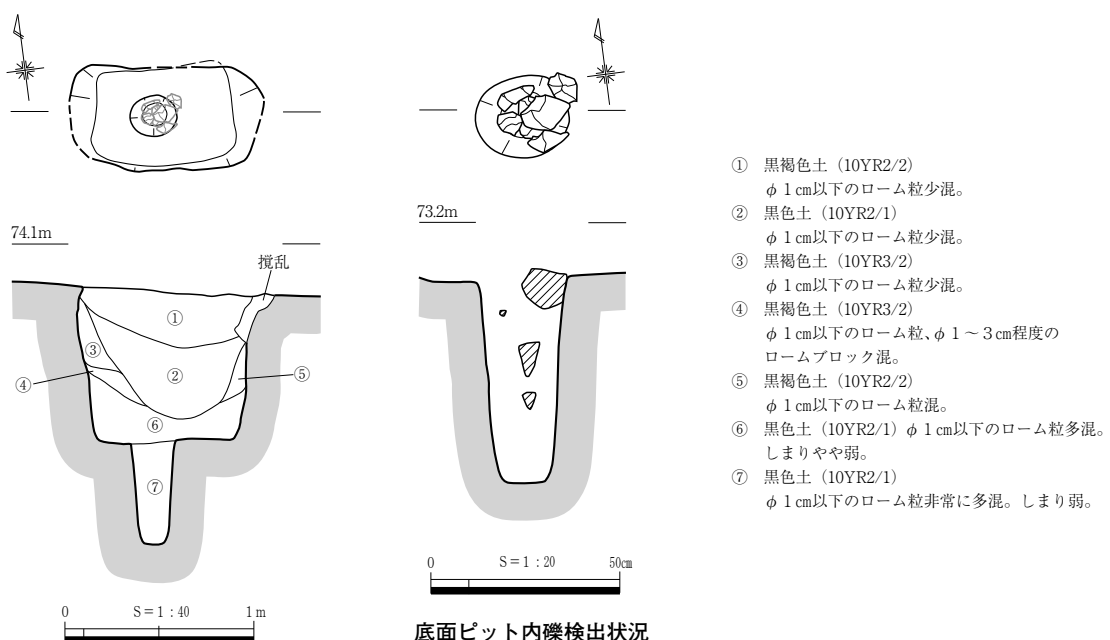
SK5 (第14図、PL.8・22)

C5~6グリッドにまたがり、標高72.5mの緩斜面に位置する。表土・耕作土直下で検出した。

平面形は長軸1.24m、短軸0.94mのやや不整な隅丸長方形で、検出面からの深さは0.66mである。

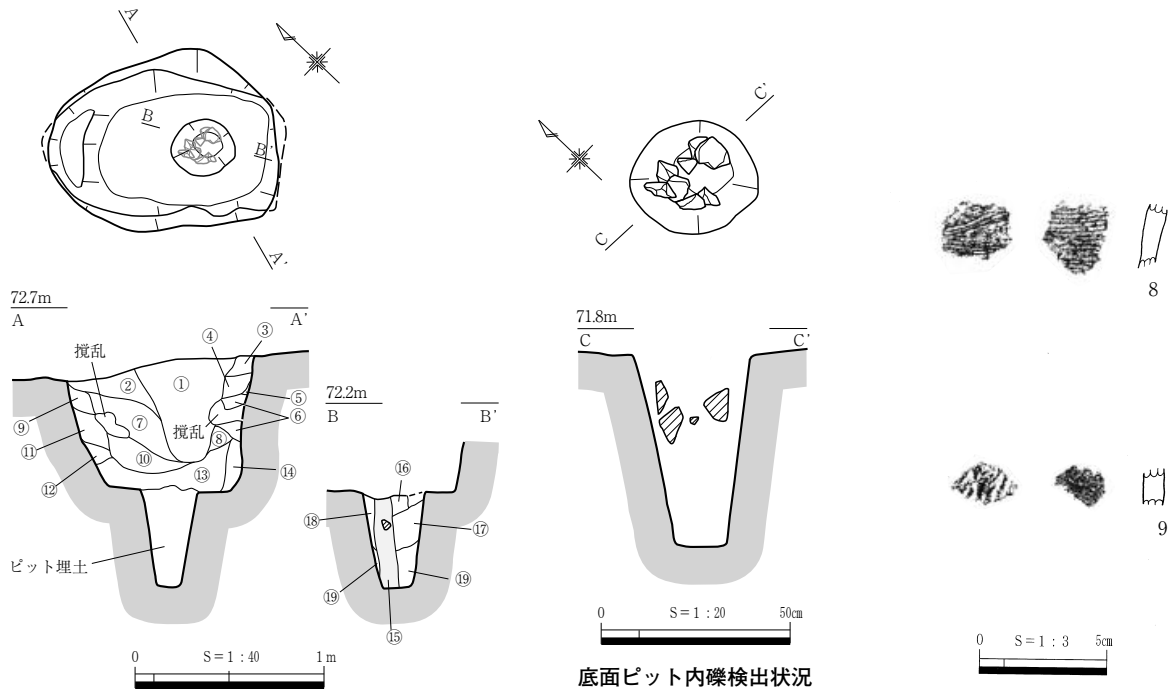
埋土は黒褐色土を主体とし、自然堆積によって埋没したものと推測する。

本遺構の底面中央付近で杭痕跡(⑮層)の認められるピットを1基検出した。ピットの規模は長軸32cm、短軸30cmのほぼ円形で、土坑底面からの深さは50cmである。杭痕跡から推定される杭の太さは径10cm程度である。



底面ピット内礫検出状況

第13図 SK4



- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1cm以下のローム・炭粒少混。 ② 暗褐色土 (10YR3/3) φ 1cm以下のローム・炭粒少混。 ③ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1cm以下のローム粒斑状に多混。 ④ 暗褐色土 (10YR3/3) φ 1cm以下のローム粒少混。土器包含。 ⑤ におい黄褐色土 (10YR5/3) φ 1cm以下のローム粒微混。 ⑥ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1cm以下のローム粒斑状に非常に多混。 ⑦ 褐色土 (10YR4/1) φ 1cm以下のローム・炭粒少混。土器包含。 ⑧ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1cm以下のローム粒少混。 ⑨ におい黄褐色土 (10YR5/3) φ 1～3cm程度のロームブロック多混。土器包含。 ⑩ 灰黄褐色土 (10YR5/2) φ 1～2cmのロームブロック少混。φ 1cm以下のローム粒多混。しまりやや弱。 | <ul style="list-style-type: none"> ⑪ 明黄褐色土 (10YR6/6) φ 1～2cmの黒褐色土ブロック少混。ローム主体 (AT 由来)。粘性やや弱。 ⑫ におい黄褐色土 (10YR5/3) φ 1cm以下のローム粒少混。 ⑬ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1cm程度のロームブロック少混。φ 1cm以下のローム粒多混。しまり・粘性やや弱。 ⑭ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1cm以下のローム粒多混。しまり・粘性やや弱。 ⑮ 黒褐色土 (10YR3/1) φ 1cm以下のローム粒非常に多混。杭痕跡。しまり弱。 ⑯ 明黄褐色土 (10YR6/6) 黒褐色土ブロック少混。ローム主体。粘性やや強。 ⑰ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1cm以下のローム粒多混。しまりやや弱。 ⑱ におい黄褐色土 (10YR5/3) 黒褐色土粒少混。ローム主体。粘性やや強。 ⑲ におい黄褐色土 (10YR6/4) 黒褐色土粒少混。ローム主体。粘性やや強。 |
|---|---|

第14図 SK5 及び出土土器

ピットの埋土は、裏込土と思われる基盤層主体のにおい黄褐色土と黒褐色土からなり、大きさ5～10cm程度の自然礫が複数含まれていた。これらの礫は杭痕跡を取り囲むように位置していることから杭を固定するために充填されていたものと考えられる。

遺物は本遺構埋土上層より縄文土器片が数点出土した。2点(第14図8・9)を図化した。8・9は条痕やケズリ状調整が施される小片で、詳細は不明だが後晩期に帰属する粗製土器の可能性のある資料である。ただ、底面付近及び底面ピット埋土中に炭化物が含まれており、底面ピット内の炭化物の放射性炭素年代測定により、補正年代 $4,070 \pm 30$ yrBP (IAAA-103159)と縄文時代中期後葉頃に相当という結果が得られている。

本遺構は形態及び規模から縄文時代の落とし穴と考える。帰属時期については、出土土器の所見と分析結果には齟齬が認められるが、ここでは分析結果を重視し縄文時代中期後葉以降と考える。

SK6 (第15図、PL.8・9)

C4グリッド、標高73.4mに位置する。表土・耕作土直下で検出した。

平面形は長軸1.26m、短軸0.86mの隅丸長方形で、検出面からの深さは1.00mである。

埋土は黒褐色土を主体とし、自然堆積によって埋没したものと推測する。

本遺構の底面中央付近でピットを1基検出した。ピットの平面形は長軸38cm、短軸25cmの不整な楕

円形で、土坑底面からの深さは38cmである。埋土はにぶい黄橙色土の単層で、大きさ10~20cm程度の自然礫が複数含まれていた。杭痕跡は認められず正確な杭の位置は不明だが、これらの礫は杭を固定するために充填されていたものとする。

本遺構から遺物は出土していないが、形態及び規模から縄文時代の落とし穴と考える。

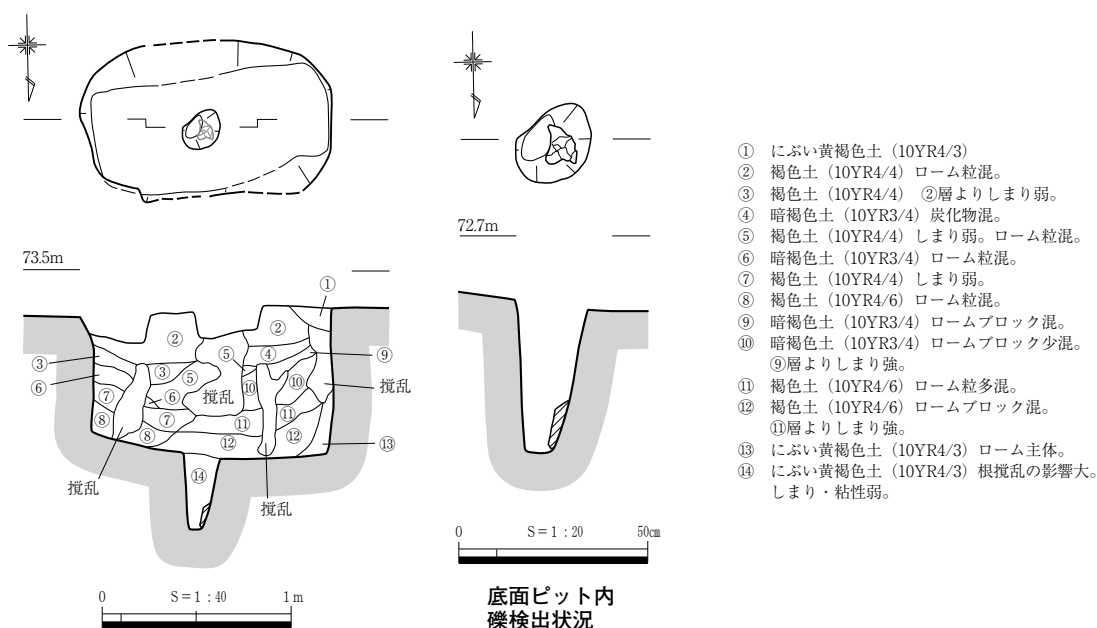
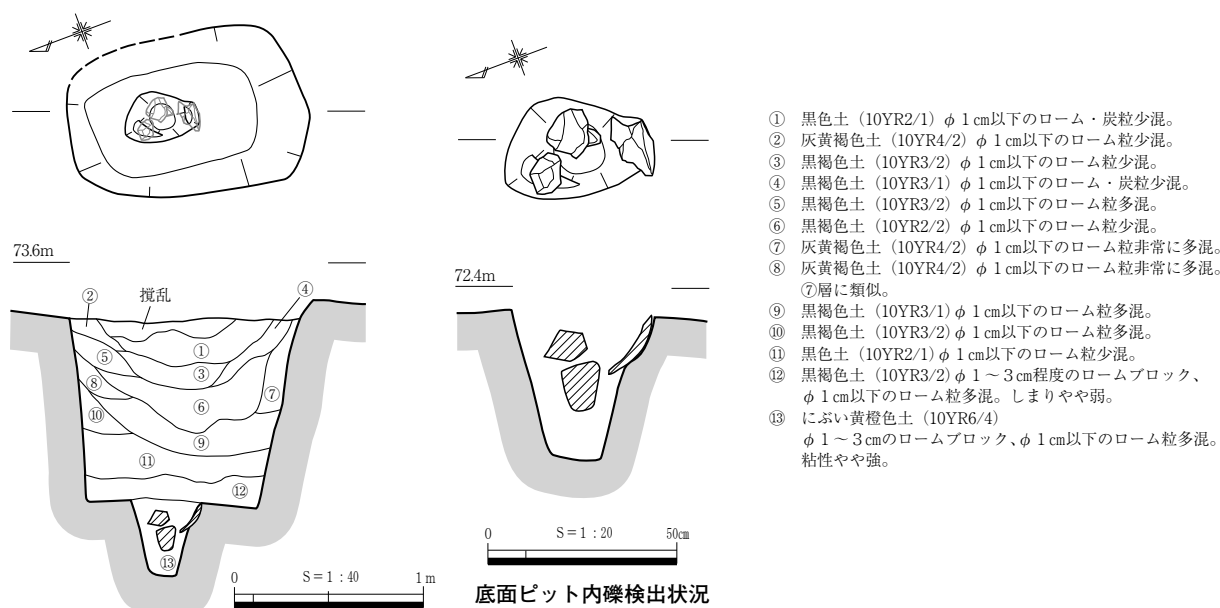
SK7 (第16図、PL.9・10)

B3グリッド、標高73.3mに位置する。表土・耕作土直下で検出した。

平面形は長軸1.28m、短軸0.80mの隅丸長方形で、検出面からの深さは0.80mである。

埋土は褐色土を主体とし、自然堆積によって埋没したものと推測する。

本遺構の底面中央付近でピットを1基検出した。ピットの平面形は長軸24cm、短軸17cmの不整な楕円形で、土坑底面からの深さは39cmである。埋土はにぶい黄褐色土の単層で、大きさ約10cmの自然礫



が含まれていた。樹木根の攪乱もあり杭痕跡は認められず正確な杭の位置は不明だが、この礫は杭を固定するために充填されていたものの一部と考える。

本遺構から遺物は出土していないが、形態及び規模から縄文時代の落とし穴と考える。

SK8 (第17図、PL.10)

C3グリッド、標高72.9mに位置する。表土・耕作土直下で検出した。

平面形は長軸1.30m、短軸0.80mの隅丸長方形で、検出面からの深さは0.88mである。

埋土は上層で暗褐色土・黒褐色土、下層はにぶい黄褐色土を主体とし、自然堆積によって埋没したものと推測する。

本遺構の底面中央付近でピットを1基検出した。ピットの平面形は径26cmの円形で、土坑底面からの深さは42cmである。ピットの埋土はにぶい黄褐色土の単層で、大きさ5～10cm程度の自然礫が複数含まれていた。杭痕跡は認められず正確な杭の位置は不明だが、これらの礫は杭を固定するために充填されていたものと考えられる。

本遺構から遺物は出土していないが、形態及び規模から縄文時代の落とし穴と考える。

SK9 (第18図、PL.11)

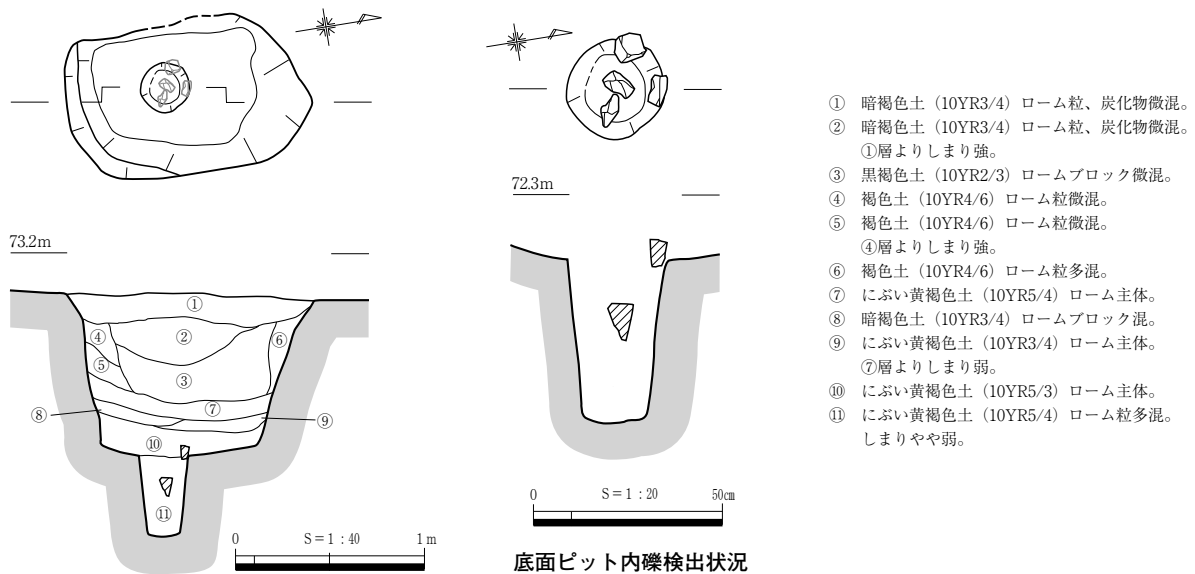
E7～8グリッドにまたがり、標高73.8mに位置する。表土・耕作土直下で検出した。

平面形は長軸1.17m、短軸0.75mの隅丸長方形で、検出面からの深さは0.69mである。

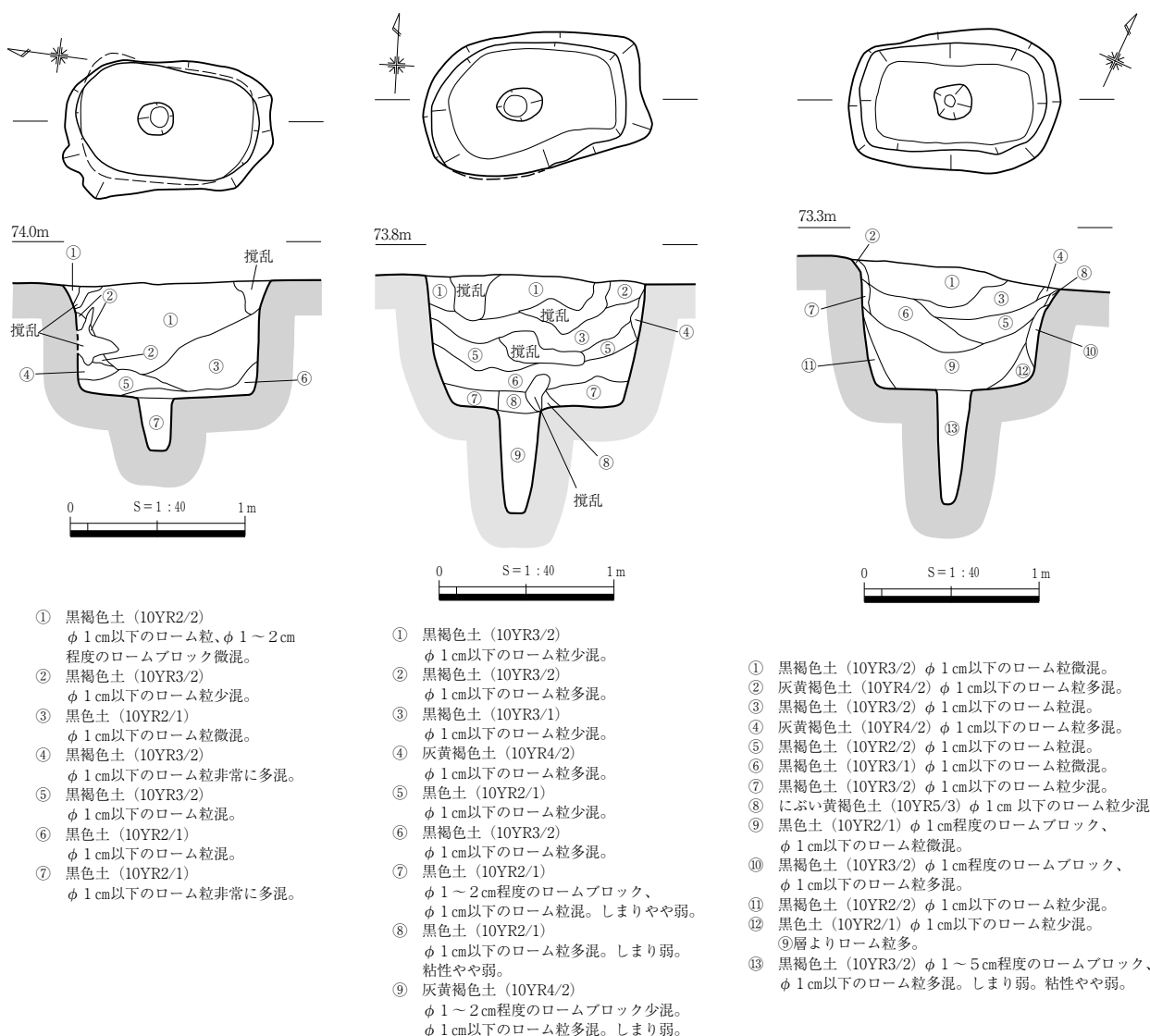
埋土は上層で暗褐色土・黒褐色土、下層はにぶい黄褐色土を主体とし、自然堆積によって埋没したものと推測する。

本遺構の底面中央付近でピットを1基検出した。ピットの平面形は長軸20cm、短軸18cmのほぼ円形で、土坑底面からの深さは30cmである。埋土は黒色土の単層である。

本遺構から遺物は出土していないが、形態及び規模から縄文時代の落とし穴と考える。



第17図 SK8



第18図 SK9

第19図 SK10

第20図 SK11

SK10(第19図、PL.11)

D7~8グリッドにまたがり、標高73.6mに位置する。表土・耕作土直下で検出した。

平面形は長軸1.26m、短軸0.78mの隅丸長方形で、検出面からの深さは0.76mである。

埋土は黒褐色土を主体とし、自然堆積によって埋没したものと推測する。

本遺構の底面中央付近でピットを1基検出した。ピットの平面形は長軸25cm、短軸18cmの楕円形で、土坑底面からの深さは55cmである。埋土は灰黄褐色土の単層である。

本遺構から遺物は出土していないが、形態及び規模から縄文時代の落とし穴と考える。

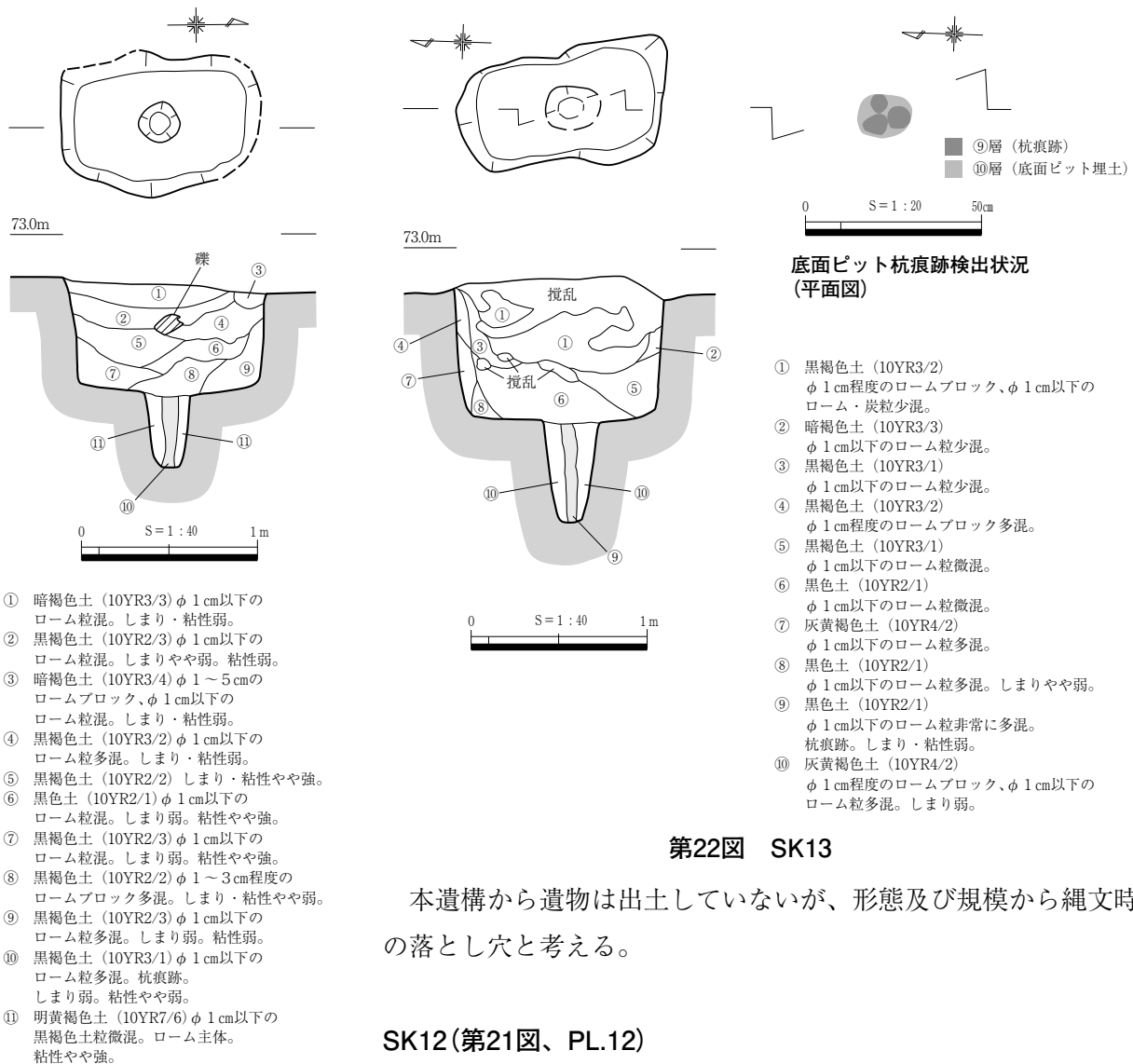
SK11(第20図、PL.12)

C7グリッド、標高73.0mに位置する。表土・耕作土直下で検出した。

平面形は長軸1.21m、短軸0.80mの隅丸長方形で、検出面からの深さは0.70mである。

埋土は黒褐色土を主体とし、自然堆積によって埋没したものと推測する。

本遺構の底面中央付近でピットを1基検出した。ピットの平面形は長軸20cm、短軸18cmの不整楕円形で、土坑底面からの深さは65cmである。埋土は黒褐色土の単層である。



第21図 SK12

平面形は長軸1.12m、短軸0.80mの隅丸長方形で、検出面からの深さは0.63mである。

埋土は黒褐色土を主体とし、自然堆積によって埋没したものと推測する。

本遺構の底面中央付近で杭痕跡(⑩層)の認められるピットを1基検出した。ピットの平面形は径24cmの不整形円で、土坑底面からの深さは40cmである。杭痕跡から、杭の径は8cm程度と思われる。

本遺構から遺物は出土していないが、形態及び規模から縄文時代の落とし穴と考える。

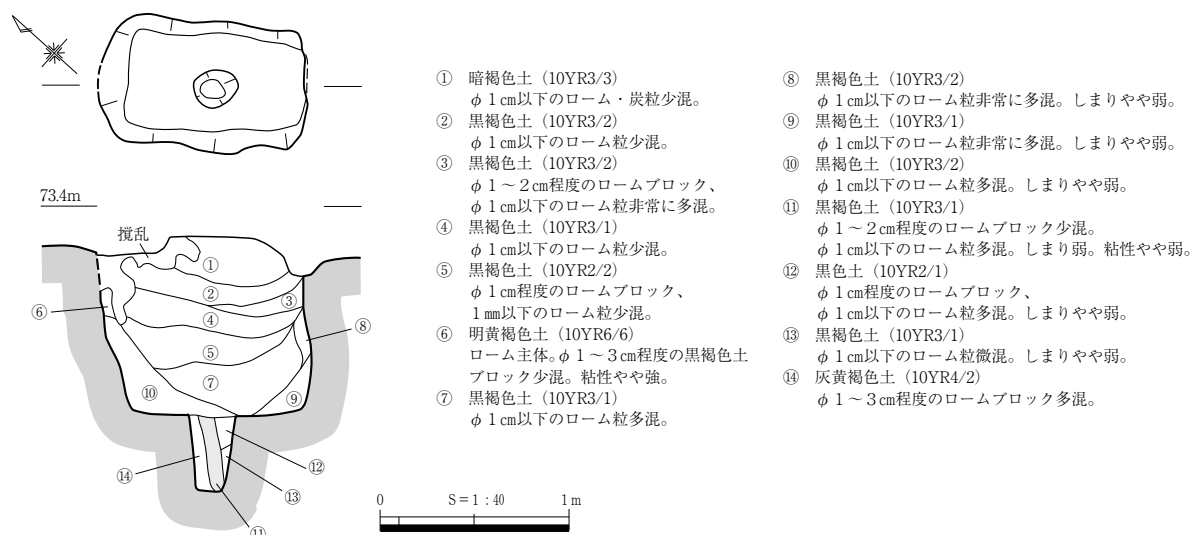
SK13(第22図、PL.13)

C5グリッド、標高72.8mに位置する。表土・耕作土直下で検出した。

平面形は長軸1.16m、短軸0.57mの隅丸長方形で、検出面からの深さは0.80mである。

埋土は上層で黒褐色土、下層では黒色土を主体とし、自然堆積によって埋没したものと推測する。

本遺構の底面中央付近で杭痕跡(⑨層)の認められるピットを1基検出した。ピットの平面形は長軸30cm、短軸25cmの楕円形で、土坑底面からの深さは55cmである。ピット検出時の平面観察で、ピット内に3本の杭を束ねるように据えた痕跡が確認された(第22図拡大図)。そこから推定される杭の径は



第23図 SK14

8～12cm程度である。複数の杭痕跡を断面においても確認しようと試みたが、埋土のしまりが弱く崩落したため果たせていない。

本遺構から遺物は出土していないが、形態及び規模から縄文時代の落とし穴と考える。

SK14(第23図、PL.13・14)

C 4・5グリッド、標高73.3mに位置し、表土・耕作土直下で検出した。

平面形は長辺1.08m、短辺0.69mの隅丸長方形で、検出面からの深さは0.94mである。

埋土は黒褐色土を主体とし、堆積状況から自然堆積により埋没したものと推測する。

本遺構の底面中央で杭痕跡(⑪層)の認められるピット1基を検出した。ピットの平面形は長辺23cm、短辺20cmの不整な円形で、土坑底面からの深さは40cmを測る。杭痕跡から推定される杭の規模は径8cm程度である。

本遺構から遺物は出土していないが、形態及び規模から縄文時代の落とし穴と考える。

SK15(第24図、PL.14)

B 4グリッド、標高73.0mに位置し、表土・耕作土直下で検出した。

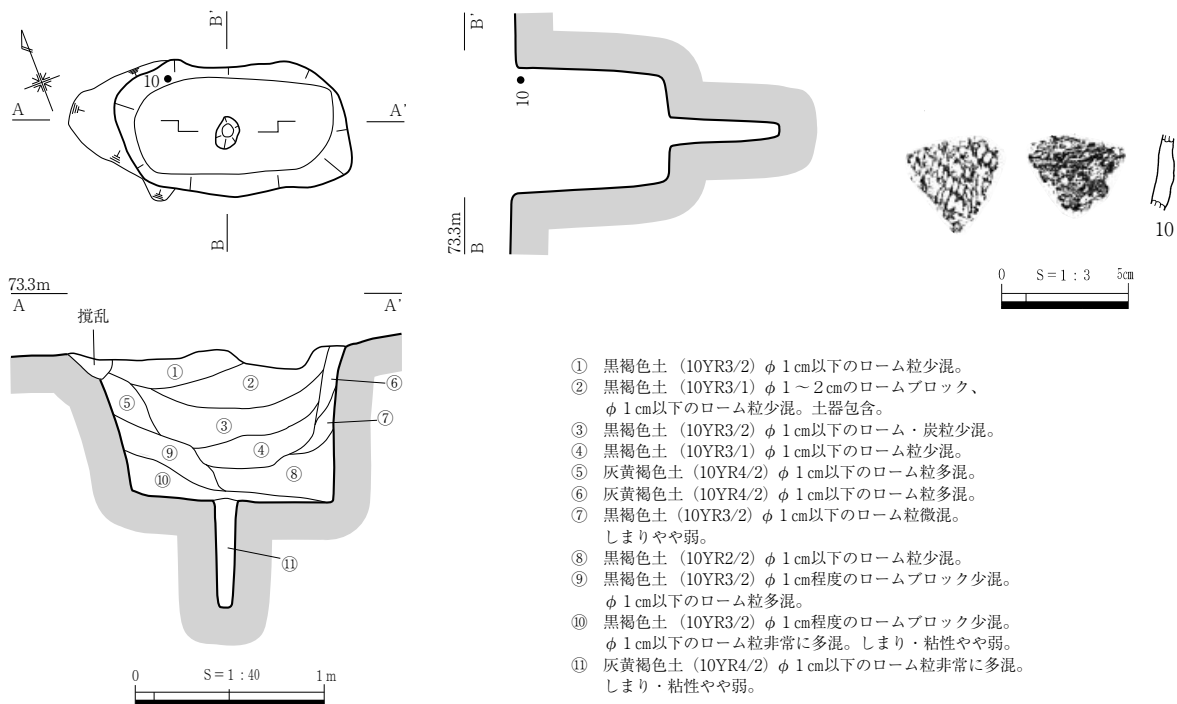
平面形は長辺1.20m、短辺0.68mの隅丸長方形で、検出面からの深さは0.78mである。

埋土は黒褐色土を主体とし、堆積状況から自然堆積により埋没したものと推測する。

本遺構の底面中央では、ピット1基を検出した。ピットの規模は長辺16cm、短辺10cmの不整な円形で、土坑底面からの深さは55cmを測る。

遺物は②層から縄文時代土器小片(第24図10)が出土した。10は外面が縄文地だが撚りが浅く施文が不明瞭で、中期に帰属する可能性がある。また、最下層及び底面ピット埋土中に炭化物が含まれ、底面ピット内の炭化物の放射性炭素年代測定による補正年代値で4,130±30yrBP(IAAA-103158)と縄文時代中期後葉頃という結果を得た。

本遺構は出土遺物や分析結果、遺構の形態から縄文時代中期後葉以降の落とし穴と考える。



第24図 SK15及び出土土器

SK16(第25図、PL.15・22)

E6グリッド、標高73.6mに位置し、表土・耕作土直下で検出した。

平面形は長辺1.10m、短辺0.90mの楕円形で、検出面からの深さは1.20mである。

埋土は中層部分に一部崩落土と思われる堆積が確認できるが、概ね黒褐色土を主体とする。堆積状況から自然堆積により埋没したものと推測する。

本遺構の底面中央では、杭痕跡(⑩層)の認められるピット1基を検出した。ピットの規模は直径15cmの円形で、土坑底面からの深さは25cmを測る。杭痕跡から杭の規模は径6cm程度である。

本遺構から遺物は出土していないが、形態及び規模から縄文時代の落とし穴と考える。

SK17(第26図、PL.15)

D6グリッド、標高73mに位置し、表土・耕作土直下で検出した。

平面形は長辺1.22m、短辺1.02mの隅丸長方形で、検出面からの深さは0.67mである。

埋土は黒褐色土を主体とし、堆積状況から自然堆積により埋没したものと推測する。

本遺構の底面中央では、ピット1基を検出した。ピットの規模は長辺15cm、短辺10cmの不整円形で、土坑底面からの深さは35cmを測る。

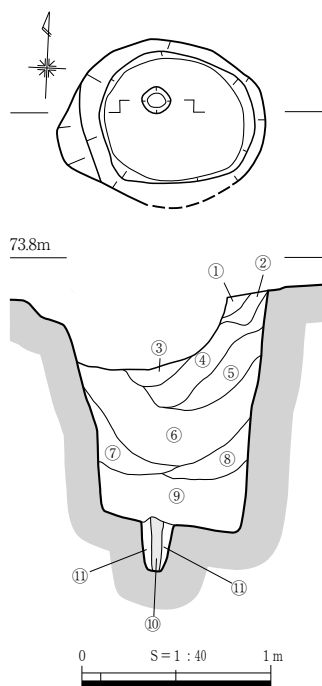
本遺構から遺物は出土していないが、形態及び規模から縄文時代の落とし穴と考える。

SK18(第27図、PL.16)

D5グリッド、標高73.7mに位置し、表土・耕作土直下で検出した。

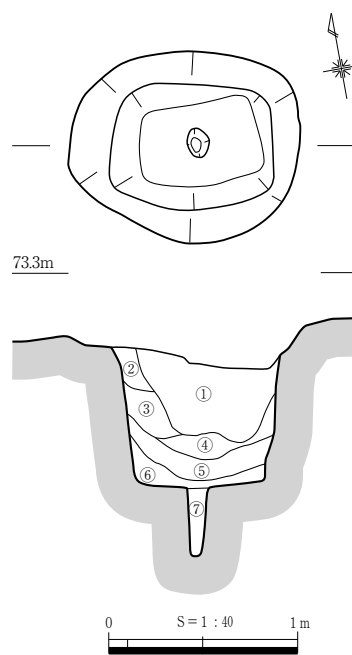
平面形は長辺1.02m、短辺0.78mの隅丸長方形で、検出面からの深さは0.69mである。

埋土は、壁面崩落土と思われる堆積が目立つが、黒褐色土の堆積も混じる。堆積状況から自然堆積により埋没したものと推測する。



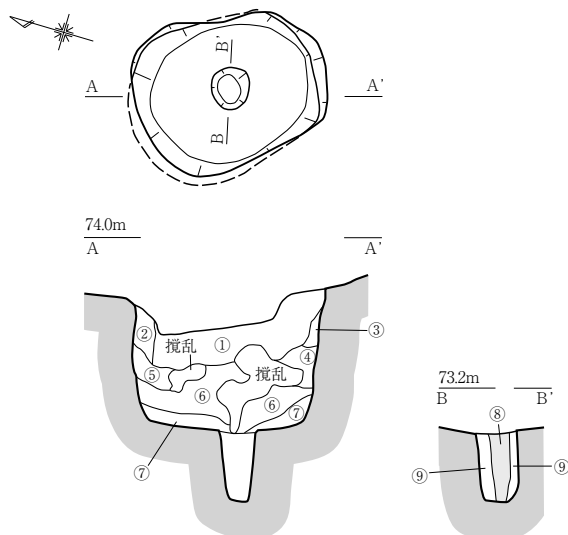
- ① 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1cm以下のローム粒少混。
- ② 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1cm以下のローム粒多混。
- ③ 黒褐色土 (10YR2/2) φ 1cm以下のローム粒少混。
- ④ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1cm以下のローム粒少混。
- ⑤ 黒褐色土 (10YR2/2) φ 1~2cm程度のロームブロック少混。
- ⑥ 暗褐色土 (10YR3/3) φ 1cm程度のロームブロック、φ 1cm以下のローム粒少混。
- ⑦ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1cm以下のローム粒少混。
- ⑧ におい黄褐色土 (10YR3/3) φ 1cm以下のローム粒多混。
- ⑨ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1cm以下のローム粒少混。
- ⑩ におい黄褐色土 (10YR5/3) φ 1~3cm程度のロームブロック非常に多混。杭痕跡。しまりやや弱。粘性やや強。
- ⑪ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1cm以下のローム粒多混。しまり弱。

第25図 SK16



- ① 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1cm程度のロームブロック、φ 1cm以下のローム粒少混。
- ② 黒褐色土 (10YR3/1) φ 1cm以下のローム粒多混。
- ③ 黒褐色土 (10YR2/2) φ 1cm以下のローム粒多混。
- ④ 黒色土 (10YR2/1) φ 1cm以下のローム粒多混。
- ⑤ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1cm以下のローム粒多混。
- ⑥ 黒色土 (10YR2/1) φ 1cm以下のローム粒多混。
- ⑦ 黒色土 (10YR2/1) φ 1cm程度のロームブロック少混。φ 1cm以下のローム粒多混。

第26図 SK17

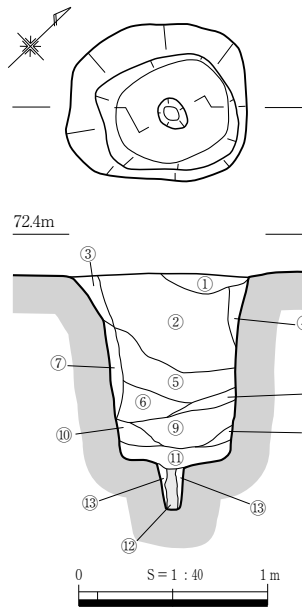


- ① 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1cm以下のローム粒・炭粒多混。
- ② におい黄褐色土 (10YR5/3) φ 1cm程度のロームブロック、φ 1cm以下のローム粒多混。
- ③ 明黄褐色土 (10YR6/6) φ 2cm程度の灰黄褐色土ブロック少混。ローム主体。粘性やや強。
- ④ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1~2cm程度のロームブロック少混。
- ⑤ におい黄褐色土 (10YR5/3) φ 1cm以下のローム粒多混。
- ⑥ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1cm以下のローム粒少混。
- ⑦ 灰黄褐色土 (10YR5/2) φ 1cm以下のローム粒多混。
- ⑧ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1~2cm程度のロームブロック、φ 1cm以下のローム粒多混。杭痕跡。しまり・粘性やや弱。
- ⑨ におい黄褐色土 (10YR5/4) φ 1~2cm程度の黒褐色土ブロック少混。ローム主体。粘性やや強。

第27図 SK18

本遺構の底面中央では、杭痕跡(⑧層)の認められるピット1基を検出した。ピットの規模は直径22cmの不整な円形で、土坑底面からの深さは36cmを測る。杭痕跡から杭の規模は径10cm程度である。

本遺構から遺物は出土していないが、形態及び規模から縄文時代の落とし穴と考える。



- ① 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1cm以下のローム粒多混。
- ② 黒褐色土 (10YR3/1) φ 1cm以下のローム粒多混。
- ③ におい黄褐色土 (10YR5/4) φ 1～3cm程度のロームブロック多混。
- ④ におい黄褐色土 (10YR5/4) φ 1～3cm程度のロームブロック多混。
- ⑤ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1cm程度のロームブロック、φ 1cm以下のローム粒多混。
- ⑥ 黒色土 (10YR2/1) φ 1cm以下のローム粒微混。
- ⑦ 黒色土 (10YR2/1) φ 1cm以下のローム粒多混。
- ⑧ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1cm以下のローム粒非常に多混。
- ⑨ 黒色土 (10YR2/1) φ 1cm以下のローム粒多混。
- ⑩ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1cm以下のローム粒非常に多混。
- ⑪ 黒色土 (10YR2/1) φ 1cm以下のローム粒多混。しまりやや弱。
- ⑫ 黒色土 (10YR2/1) φ 1cm以下のローム粒多混。杭痕跡。しまり弱。粘性やや弱。
- ⑬ におい黄褐色土 (10YR6/4) φ 1cm以下の黒色土粒多混。ローム主体。しまり弱。

第28図 SK19

SK19(第28図、PL.16・17)

C6グリッド、標高72.4mに位置し、谷部表土・耕作土下の黒色土(Ⅲ層)除去後に検出した。

平面形は長辺0.93m、短辺0.82mの方形に近い隅丸長方形で、検出面からの深さは1.00mである。

埋土は一部崩落土と思われる堆積が確認できるが、概ね黒褐色土・黒色土からなる。堆積状況から自然堆積により埋没したものと推測する。

本遺構の底面中央では、杭痕跡(⑫層)の認められるピット1基を検出した。ピットの規模は長径18cm、短径15cmの不整円形で、土坑底面からの深さは22cmを測る。杭痕跡から推定される杭の規模は径6cm程度である。

本遺構から遺物は出土していないが、形態及び規模から縄文時代の落とし穴と考える。

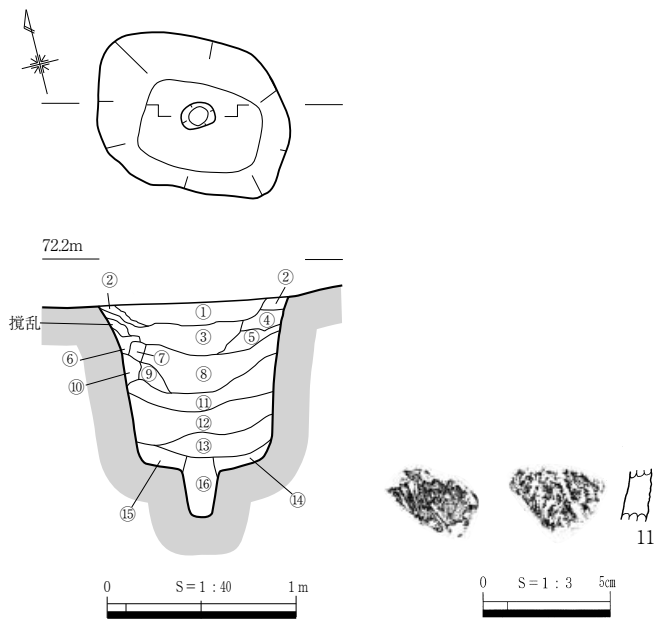
SK20(第29図、PL.17)

C6グリッド、標高72mに位置し、表土・耕作土直下で検出した。

平面形は長辺1.02m、短辺0.80mのやや歪みがある隅丸長方形で、検出面からの深さは0.88mである。

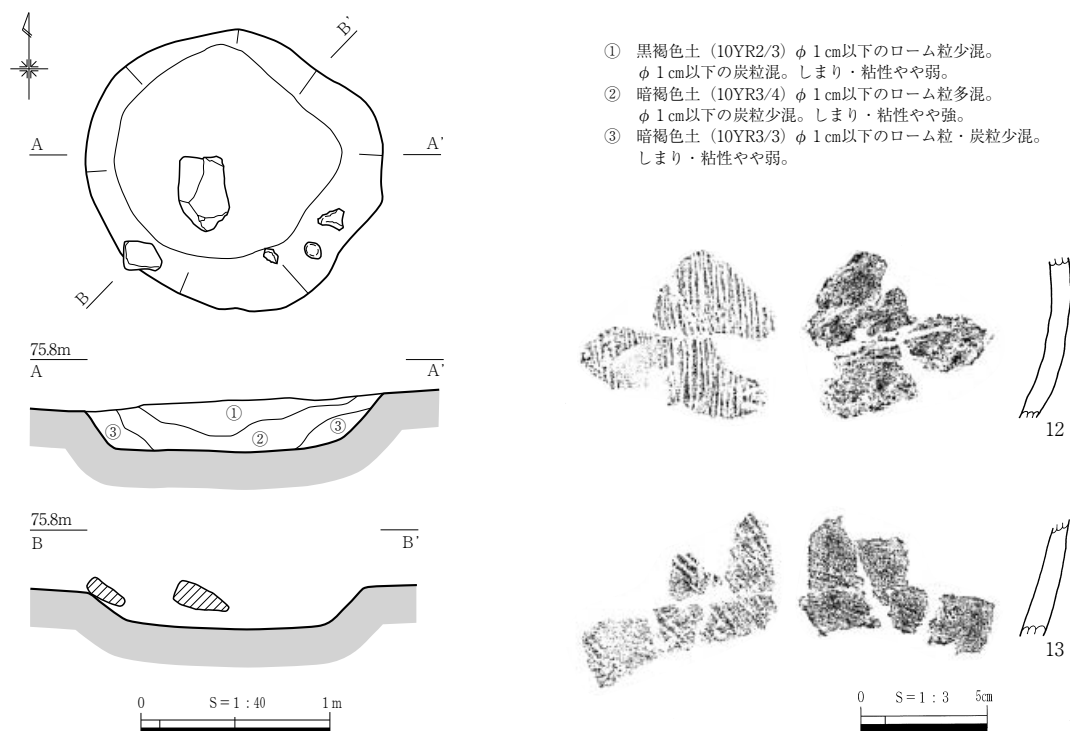
埋土は下層で崩落土と思われる堆積が確認できるが、概ね黒褐色土・黒色土からなる。堆積状況から自然堆積により埋没したものと推測する。

本遺構の底面中央ではピット1基を検出した。ピットの規模は長径17cm、短径13cmの楕円形で、土



- ① 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1cm以下のローム粒微混。
- ② 黒褐色土 (10YR2/3) φ 1cm以下のローム粒多混。しまりやや弱。
- ③ 黒褐色土 (10YR2/2) φ 1cm以下のローム粒少混。
- ④ 黒褐色土 (10YR2/3) φ 1cm以下のローム粒微混。しまりやや弱。
- ⑤ 暗褐色土 (10YR3/3) φ 1cm以下のローム粒多混。しまりやや弱。
- ⑥ 暗褐色土 (10YR3/4) 黒褐色土ブロック少混。しまりやや弱。粘性強。
- ⑦ 褐色土 (10YR4/4) φ 1cm以下のローム粒多混。しまりやや弱。粘性強。
- ⑧ 黒色土 (10YR2/1) φ 1cm以下のローム粒微混。
- ⑨ 黒褐色土 (10YR2/3) φ 1cm以下のローム粒少混。しまりやや弱。
- ⑩ 暗褐色土 (10YR3/3) φ 1cm以下のローム粒多混。しまりやや弱。粘性強。
- ⑪ 黒色土 (10YR2/1) φ 1～2cmのロームブロック少混。しまりやや弱。
- ⑫ 褐色土 (10YR4/6) φ 2cm程度のロームブロック多混。粘性強。
- ⑬ 暗褐色土 (10YR3/4) φ 2cm程度のロームブロック多混。粘性強。
- ⑭ 黒色土 (10YR2/1) φ 1cm以下のローム粒少混。しまりやや弱。
- ⑮ 褐色土 (10YR4/6) φ 1cm程度のロームブロック多混。粘性強。
- ⑯ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1cm以下のローム粒多混。しまり弱。粘性強。

第29図 SK20及び出土土器



第30図 SK21及び出土土器

坑底面からの深さは24cmを測る。

遺物は埋土上層から縄文時代土器片が出土した。第29図11は外面がケズリ状調整、内面は条痕が認められる小片で、後晩期に帰属する粗製土器の可能性はある。

本遺構は、出土遺物や遺構の形態及び規模から縄文時代の落とし穴と考える。

SK21(第30図、PL.17・18)

H4グリッド、標高75.6mに位置し、表土・耕作土直下で検出した。

平面形は径1.56mのやや歪みのある円形で、検出面からの深さは0.26mである。本遺構が位置する地点は削平が及んでおり、本遺構掘削時の深さは検出時よりも深かったと考える。

埋土は上層が黒褐色土、下層が暗褐色土からなり、微細炭化物を含み、10~40cm大の礫が含まれていた。いずれの礫も底面から浮いた状態で検出され、配置も意図的では無いと判断されるため、直接本遺構に伴うものとは言い難い。

遺物は、埋土中から縄文時代土器片が出土し、2点を図示した。12・13は外面に粗い条痕が施されており、後晩期に帰属する粗製土器の可能性はある。

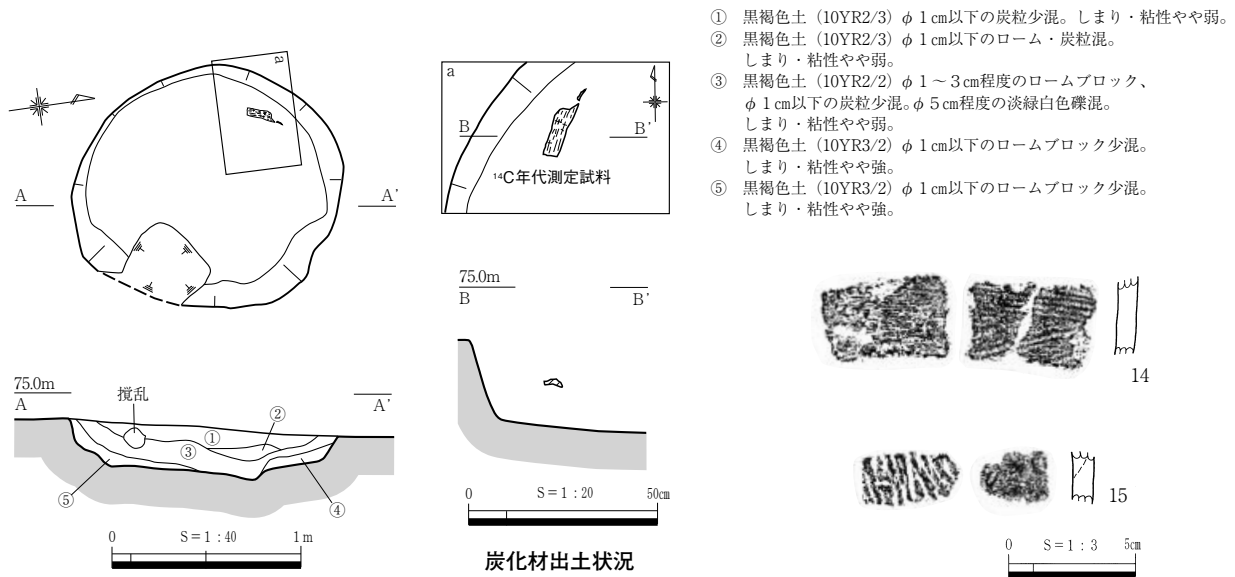
本遺構の性格は判断しかねるが、出土土器から縄文時代後晩期に帰属する可能性を持つと考える。

SK22(第31図、PL.18)

G3グリッド、標高74.8mに位置し、表土・耕作土直下で検出した。

平面形は径1.44mのやや歪みのある円形で、検出面からの深さは0.24mである。本遺構が位置する地点は削平が及んでおり、本遺構掘削時の深さは検出時よりも深かったと考える。

埋土は黒褐色土で、下層で炭化材を1点検出した。炭化材は長さ25cm、幅8cmを測り、放射性炭素年代測定を実施したところ、補正年代値で $4,480 \pm 30$ yrBP (IAAA-103156)と縄文時代中期前葉相当



第31図 SK22及び出土土器

の結果が出た。

遺物は埋土中から縄文土器片が出土し、2点(第31図14・15)を図示した。14は外面にケズリ状調整、内面は条痕が施され、粗製土器の可能性を持つ。15は外面に条痕が確認できる小片だが、磨耗が進行し詳細は不明である。

本遺構の性格については不明である。帰属時期は分析結果と出土土器の所見が異なるが、土器は小片で詳細不明であることから、放射性炭素年代測定の結果を踏まえ縄文時代中期前葉以降と考える。

SK23(第32図、PL.19)

G3グリッド、標高74.9mに位置し、表土・耕作土直下で検出した。

平面形は長径1.53m、短径1.31mのやや歪みのある円形で、検出面からの深さは0.22mである。本遺構が存在する地点は削平が及んでおり、本遺構の掘削時における深さは検出時よりも深かったと考える。

埋土は黒褐色土で、微細炭化物が混じる。

出土遺物は無く、本遺構の性格・時期については不明だが、周辺のSK21・22と形態及び規模、埋土の類似性が認められることから、一連の遺構である可能性を考える。

SK24(第33図、PL.19)

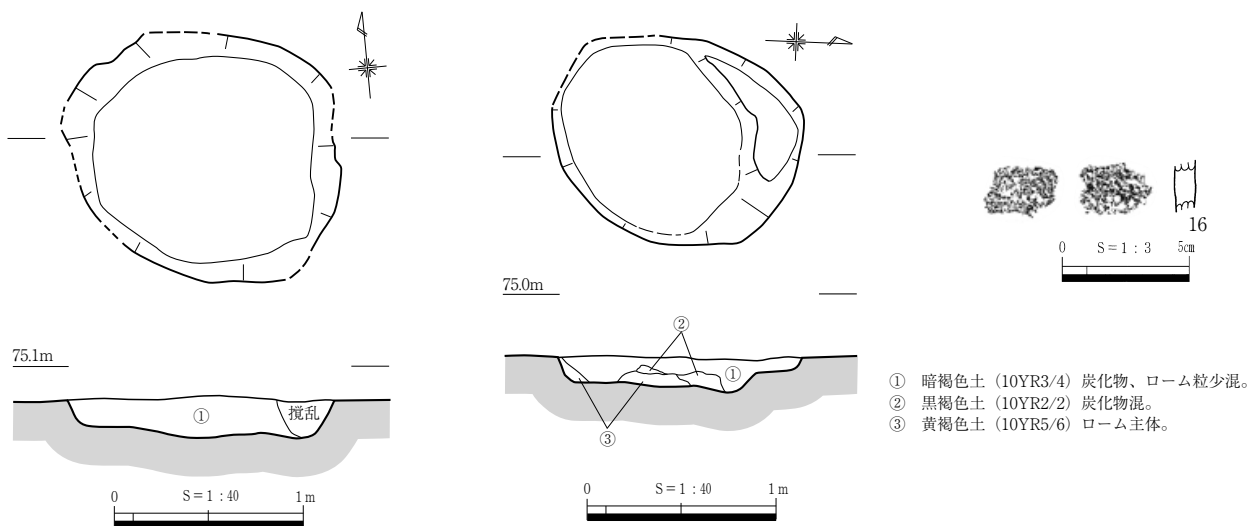
H6グリッド、標高74.7mに位置し、表土・耕作土直下で検出した。

平面形は長辺1.32m、短辺1.09mの楕円形で、検出面からの深さは0.15mである。本遺構が存在する地点は削平が及んでいた可能性が高いため、本遺構掘削時の深さは検出時よりも深かったと考える。

埋土は暗褐色土を主体とし、堆積状況から自然堆積により埋没したものと推測する。

遺物は、埋土中から縄文土器片が少数出土し、1点を図示した(第33図16)。16は磨耗が著しく不明瞭だが、外面に条痕の痕跡が残る。後晩期の粗製土器片か。

本遺構の性格については不明だが、埋土中から縄文土器片が出土し、周辺のSK21～23と形態や規模が近似することから一連の遺構である可能性を考える。

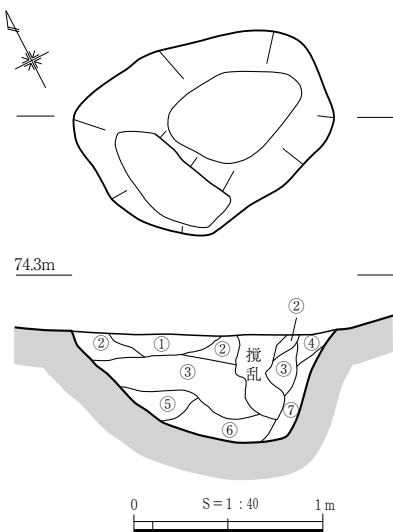


- ① 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物、ローム粒少混。
- ② 黒褐色土 (10YR2/2) 炭化物混。
- ③ 黄褐色土 (10YR5/6) ローム主体。

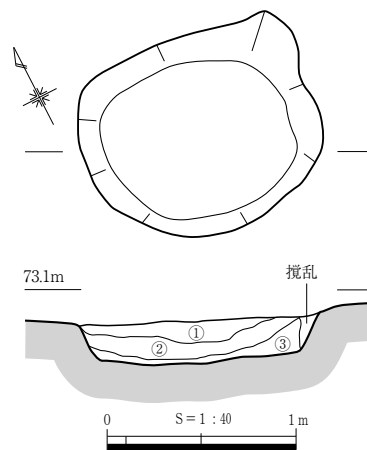
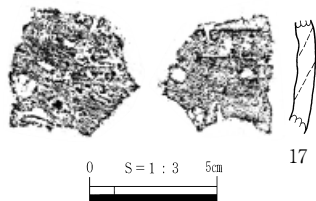
- ① 黒褐色土 (10YR2/2) φ 1cm程度のロームブロック、φ 1cm以下の炭粒・焼土粒少混。しまり・粘性やや弱。

第33図 SK24及び出土土器

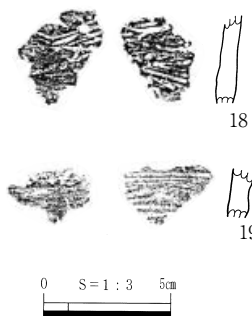
第32図 SK23



- ① 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1cm以下のローム粒微混。
- ② 灰黄褐色土 (10YR5/2) φ 1cm以下のローム粒微混。
- ③ におい黄褐色土 (10YR4/3) φ 1~2cm程度のロームブロック、φ 1cm以下のローム・炭粒微混。
- ④ におい黄褐色土 (10YR5/4) φ 1cm以下のローム粒少混。
- ⑤ におい黄褐色土 (10YR5/3) φ 1cm程度のロームブロック多混。
- ⑥ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1cm以下のローム粒多混。しまりやや弱。
- ⑦ におい黄褐色土 (10YR5/3) φ 1cm以下のローム粒多混。しまり・粘性やや弱。



- ① 褐色土 (7.5YR4/4) 焼土粒多混。しまり強。
- ② 褐色土 (7.5YR4/6) 焼土粒多混。しまり強。
- ③ 褐色土 (10YR4/4) しまり強、粘性やや強。



第34図 SK25及び出土土器

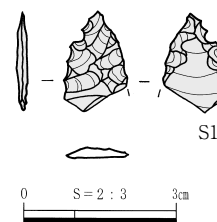
SK25 (第34図、PL.20)

G2グリッド、標高74.1mに位置し、表土・耕作土直下で検出した。平面形は長辺1.30m、短辺0.92mのやや歪な隅丸長方形で、検出面からの深さは0.56mである。

埋土はにおい黄褐色土・灰黄褐色土からなり、根攪乱の影響を強く受ける。堆積状況からは自然堆積により埋没したと推測する。

遺物は縄文土器片が少数出土し、1点を図示した(第34図17)。17は、外面ケズリ状調整、内面ナデ

第35図 SK26及び出土遺物



調整が施される。後晩期に帰属する粗製土器と思われる。

本遺構の性格については不明だが、出土土器から帰属時期は縄文時代後晩期以降と考える。

SK26(第35図、PL.20)

A4グリッド、標高72.9mに位置し、表土・耕作土直下で検出した。

平面形は長辺1.30m、短辺1.08mのやや歪な円形で、検出面からの深さは0.22mである。本遺構が位置する地点は削平が及んでおり、本遺構掘削時の深さは検出時よりも深かったと考える。

埋土は基盤層由来の褐色土で、焼土を多量に含む。本遺構の壁面に被熱痕は無く、周辺で火を用いたものと考えられ、人為的に埋め戻されたと考えられる。

遺物は、埋土中から縄文土器が小片で多数出土したほか、黒曜石製石器(S1)が出土した。多量に出土した縄文土器片は胎土から同一個体と思われるが、ほとんど接合しなかった。破片のうち、2点を図示した(第35図18・19)。器面調整は条痕及びナデで、後晩期の粗製土器の可能性はある。S1は黒曜石の石鏃未製品である。薄い剥片素材で、裏面の押圧剥離は縁辺にとどまる。基部が欠損し、全面に被熱を受けている。

本遺構の性格は判然としないが、出土遺物から本遺構の帰属時期は縄文時代後晩期以降と考える。

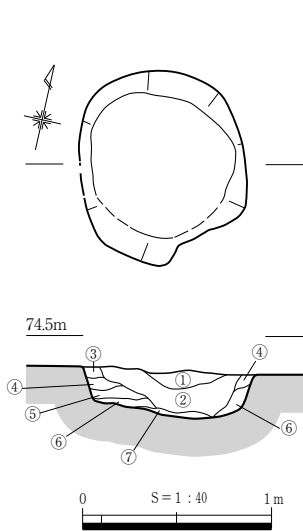
SK27(第36図、PL.20)

G~H7グリッド、標高74.4mに位置し、表土・耕作土直下で検出した。

平面形は長辺1.04m、短辺0.86mの不整円形で、検出面からの深さは0.24mである。

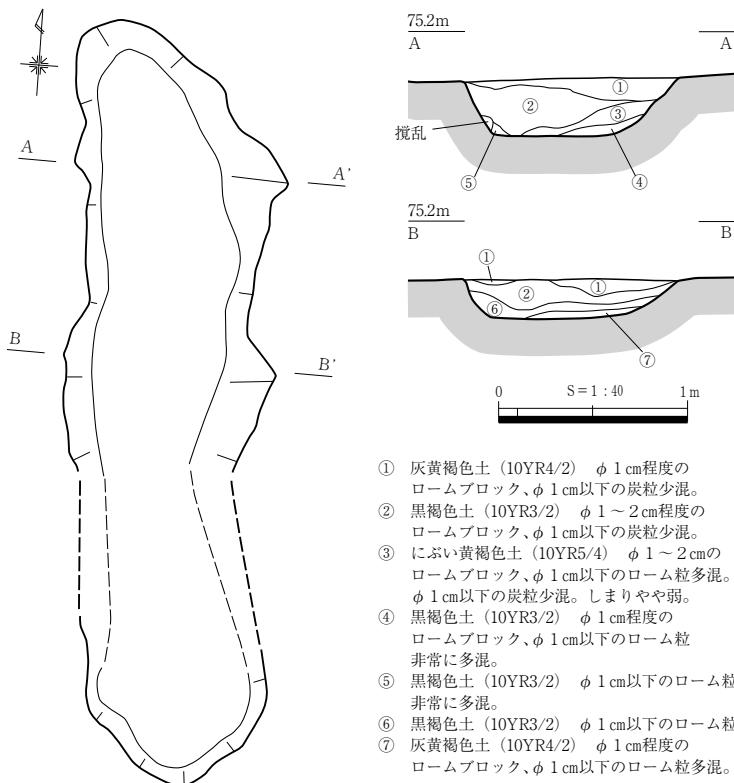
埋土は黒褐色土を主体とし、堆積状況から自然堆積により埋没したものと推測する。

本遺構からの出土遺物は無く、帰属する時期、遺構の性格共に不明である。



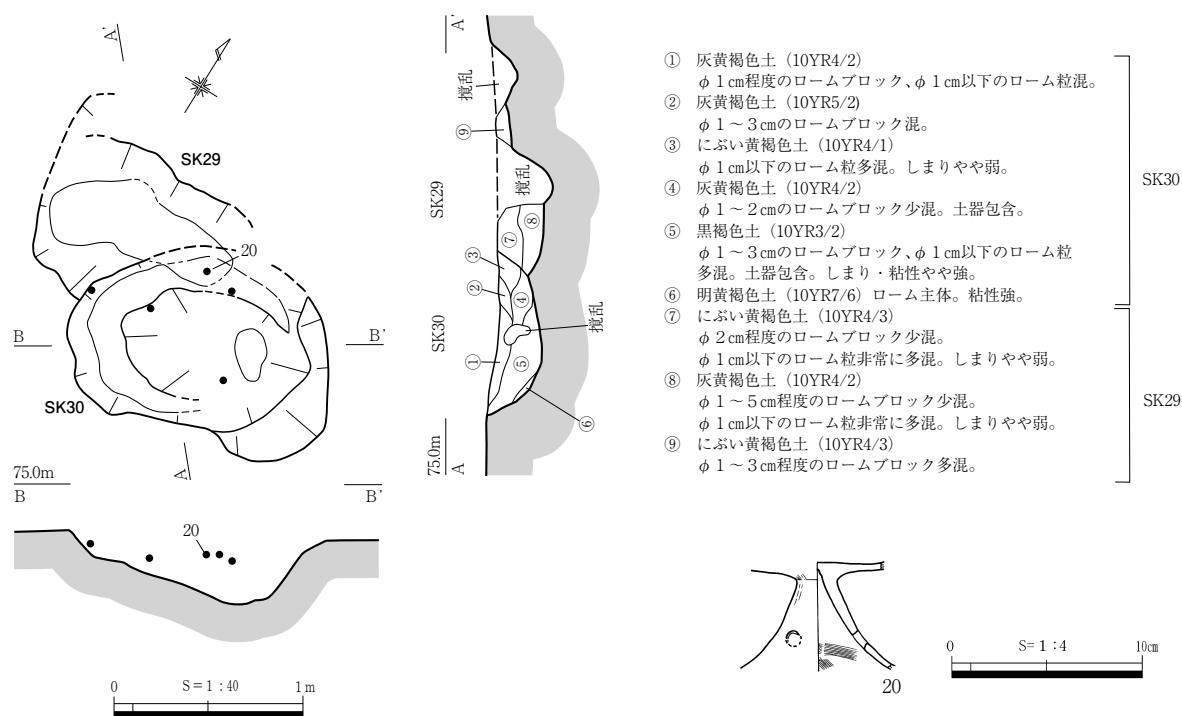
- ① 暗褐色土 (10YR3/3) 炭化物混。
- ② 黒褐色土 (10YR2/2) 炭化物混。
- ③ 暗褐色土 (10YR3/4)
- ④ 暗褐色土 (10YR3/4) φ 1cm以下のローム粒混。
- ⑤ 黒褐色土 (10YR2/2) φ 1cm以下のローム粒混。
- ⑥ 褐色土 (10YR4/4) φ 1cm程度のロームブロック、φ 1cm以下のローム粒混。
- ⑦ 黄褐色土 (10YR5/6) ローム主体。

第36図 SK27



- ① 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1cm程度のロームブロック、φ 1cm以下の炭粒少混。
- ② 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1~2cm程度のロームブロック、φ 1cm以下の炭粒少混。
- ③ にぶい黄褐色土 (10YR5/4) φ 1~2cmのロームブロック、φ 1cm以下のローム粒多混。φ 1cm以下の炭粒少混。しまりやや弱。
- ④ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1cm程度のロームブロック、φ 1cm以下のローム粒非常に多混。
- ⑤ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1cm以下のローム粒非常に多混。
- ⑥ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1cm以下のローム粒多混。
- ⑦ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1cm程度のロームブロック、φ 1cm以下のローム粒多混。

第37図 SK28



第38図 SK29・30及び出土土器

SK28 (第37図、PL.21)

G5グリッド、標高74.9mに位置し、表土・耕作土直下で検出した。

平面形は長辺4.04m、短辺1.12mの不整な楕円形で、検出面からの深さは最大で0.30mである。

埋土は黒褐色土を主体とし、堆積状況から自然堆積により埋没したものと推測する。

本遺構からの出土遺物は無く、帰属する時期、遺構の性格共に不明である。

SK29・30 (第38図、PL.21・23)

調査地南側の丘陵部、H5グリッドに位置する。表土・耕作土下で検出した遺構で、標高は約74.8mである。両土坑は重複しており、埋土土層断面の観察からSK29、SK30の順に掘削されたことを確認した。以下、順に概要について述べる。

SK29

SK30と一部掘方が重複し、SK30に掘り込まれる。耕作等の攪乱を大きく受けており遺存状態は不良だが、平面形は長軸1.20m、短軸0.80m程度の歪な楕円形状を呈するとみられる。検出面からの深さは最大で0.25mである。

埋土の色調はにぶい黄褐色、灰黄褐色を呈する。出土遺物は無く、帰属時期及び性格は不明である。

SK30

平面形は長軸1.40m、短軸1.10mの不整な楕円形で、検出面からの深さは0.27mである。

埋土はロームブロックが多く混じる灰黄褐色土を主体とし、土器片が若干数出土した。細片が多く、時期比定が可能な資料は極少数であったが、土器器小型器台(20)を図示した。小型の坏部にハの字状に開く脚部が付くが、坏部の大半は欠損している。脚部中位には三方向に円孔が穿たれる。

本遺構の性格については不明である。帰属時期は、時期比定のできる資料が少なく判然としないが、20の年代観から古墳時代前期前葉以降と考えられる。

第3節 遺構外出土遺物

1 土器(第39~41図、PL.22・23)

本調査において土器は、数量は多くないものの縄文土器、弥生土器、土師器が出土した。その中では縄文土器の出土が比較的目立ち、約130点を数える。既述したように、本調査地は全体が後世の耕作等により大きく削平されているため厳密には原位置をとどめないが、出土した縄文土器の分布の概略を把握するため、グリッド毎の出土点数を集計し、階層化を行い図化した(第39図)。A4・B2・B3グリッドといった調査地北東側、丘陵尾根部縁辺から斜面にかけて分布のピークが認められ、丘陵上から東側斜面へ流出した状況をよく示している。だが、調査地北東側において縄文時代に帰属する可能性を持つ遺構は落とし穴を除くとSK26の1基で出土土器分布状況とは齟齬があり、その他の遺構が後世の改変により失われた可能性が高い。

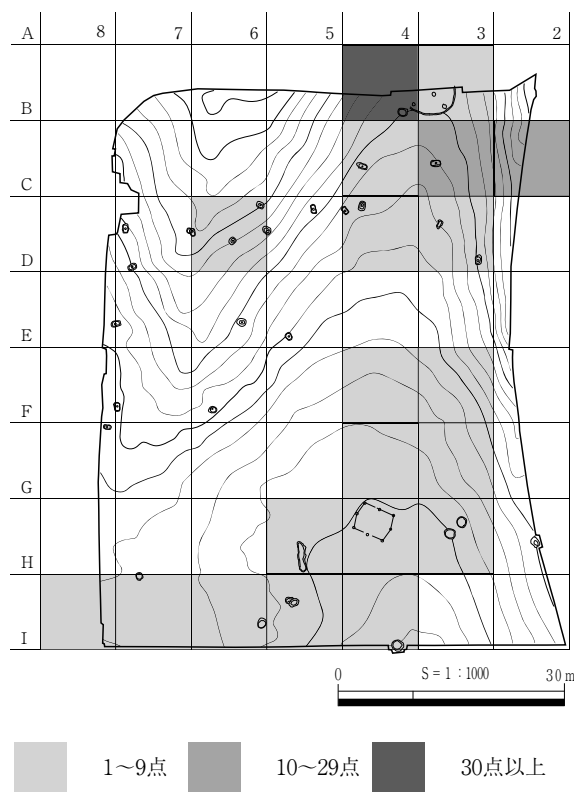
E4・G3・H4グリッド等、調査地南側でも一定数の出土がある。調査地北東側と同様、尾根部及び斜面部にかけてが該当する。当該範囲では縄文土器片が出土する土坑が少数検出されており、それらとの関連性は高いと想定される。

弥生土器や土師器については出土数はさらに少ないが、やはり調査地東半の丘陵尾根部に中心がある。縄文時代から古墳時代頃にかけて、断続的に人間活動が丘陵尾根部を中心に展開していたことを示すものと考えられる。

第40図に縄文土器を図示した。小片のため判然としないが、器種は特に断りがない限り深鉢である。

21~23は同一個体とみられるがいずれも接合せず、施文や形態的特徴を示すため掲載した。口縁部から頸部にかけての資料で、貼付突帯と押し

沈線の組合せで区画された横長の楕円形状を呈する文様区を持ち、区内にはナデ調整後に竹管状工具を用いた刺突文を密に施している。22は口縁部資料である。端部には突帯を貼り付け、それにより肥厚した端面には縄文が施される。突帯直下の押し沈線より下位に文様区を形成している。21は文様区が最も良好に遺存している破片である。上端の破面付近に押し沈線がわずかに確認でき、口縁部資料22の状況と併せると文様区は少なくとも二段から成ると推察される。23は斜位・横位の押し沈線が重複する部位である。下端の破面付近に文様区がわずかに窺え、文様区一段目と二段目の境界付近と考えられる。これら施文の特徴は縄文時代中期の船元Ⅱ式に近似した例があり、現状では当該期に帰属するものと考えておきたい。

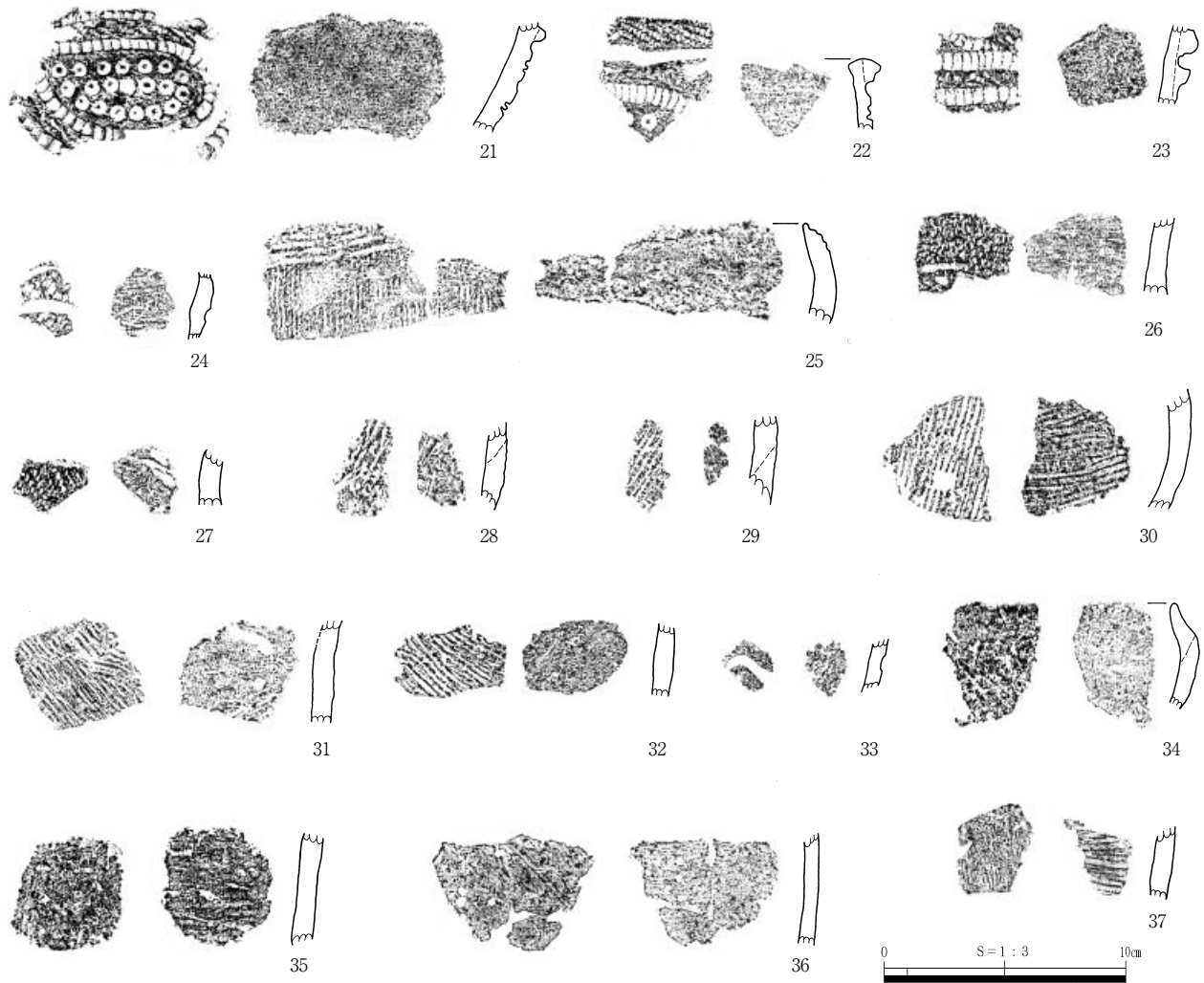


第39図 縄文土器出土点数模式図

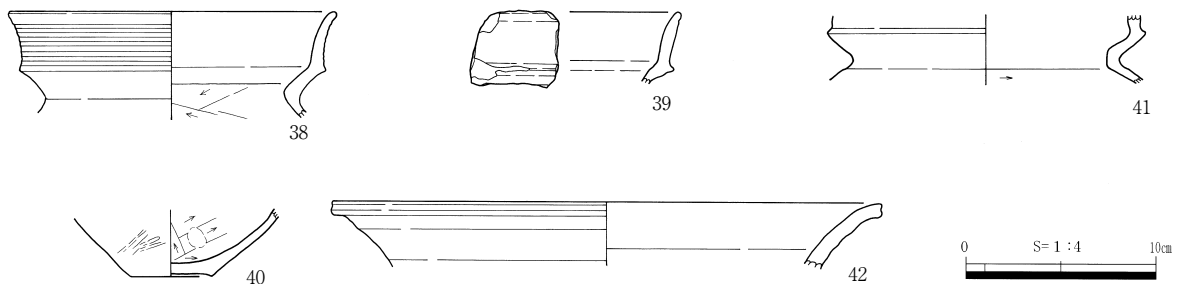
24は縄文地に沈線が施され、船元Ⅲ式の可

能性を持つ。25は地文が撚糸文で、内湾する口縁部外面に4条の沈線を施す。里木Ⅱ式に該当か。26・27は地文である縄文の撚りが浅く施文が不明瞭で、中期的な様相を示す資料である。28・29はいずれも磨耗が進行しているが外面に撚糸文が確認できる。

30～32は外面に条痕が施される。内面は条痕又はケズリ状調整後ナデ調整。後晩期に帰属する粗製土器の可能性ある。33は時期不明の小片で内外面ナデ調整され、外面には浅い沈線文が認められる。34は口縁部で緩く屈曲し、短く立ち上がり端部に至る。磨耗が進行するが条痕ないしナデ調整される。晩期に帰属する可能性があるが、判然としない。35～37は条痕又はケズリ状調整後、ナデ調整される



第40図 遺構外出土土器(1)

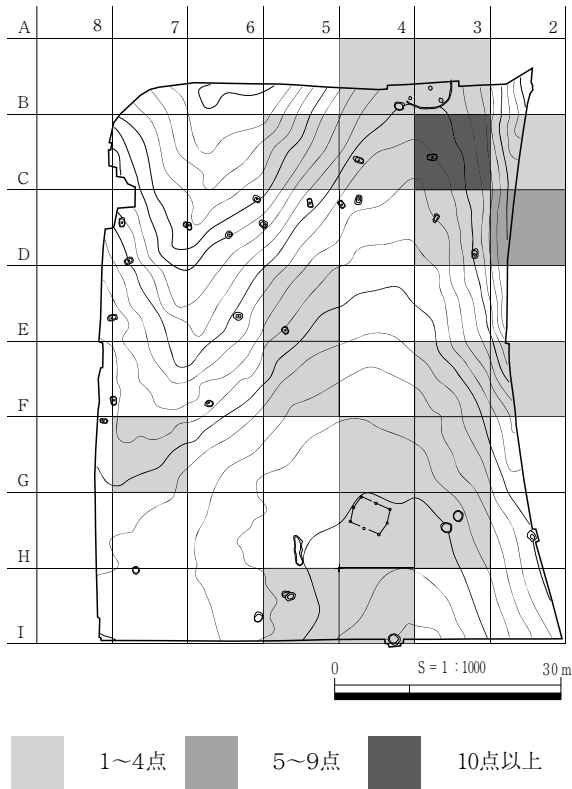


第41図 遺構外出土土器(2)

一群で、後晩期に帰属する粗製土器の可能性はある。

第41図には弥生土器、土師器を示した。38～40は弥生土器である。38・39は甕で、38は外反する複合口縁部に多条平行沈線文が施される。39はやや外反しながら立ち上がる複合口縁部を持ち、先端はやや尖り気味に収める。38は後期後葉、39は終末期に帰属すると考える。40は壺又は甕の底部資料で、小さい平底状を呈する。41・42は土師器である。41は壺で複合口縁部の上半を失うが、その立ち上がり

りは内傾もしくは直立するとみられる。42はやや大型の甕で、口縁部は大きく外方に開く。胴部を失っているため詳細は判然としない。



第42図 石器出土点数模式図(礫石器を除く)

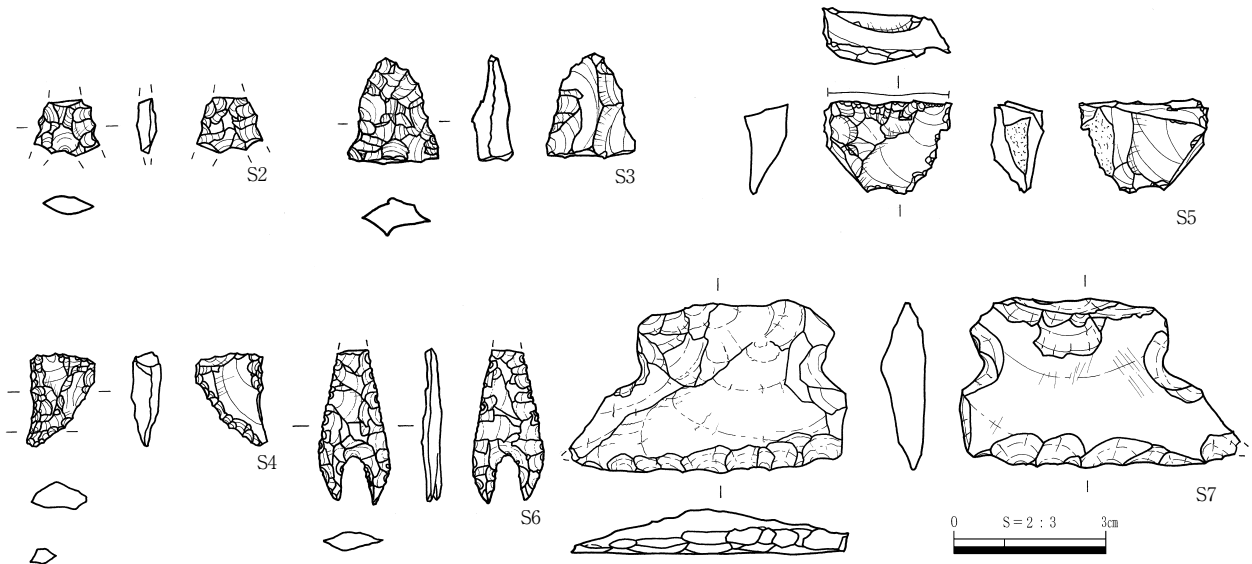
2 石器(第42・43図、表2、PL.22)

石器は総数で53点と少数ながら出土した(表2)。礫石器(13点)を除き石材別に見ると、黒曜石製が38点とほとんどを占める。他の石材はサヌカイト、チャート製があるが各1点と極少数である。器種別では、残滓類として石核が1点、剥片・碎片が計32点で、石鏃等の石器器種が僅かに伴う。石材や器種から、これらは縄文時代に帰属するものと考えられる。

グリッド毎の出土点数により分布状況を見ると、土器と同様に丘陵尾根部及び東斜面に中心がある。尾根縁辺から斜面に位置するB3グリッドの14点を最大とし、次いで斜面部のC2グリッドで7点と調査地北東側で最も多い。丘陵上から斜面に流出した状況が看取できる。北

表2 石器石材別組成表

| 器種 \ 石材 | 石鏃 | 石鏃未製品 | 石錐又はスクレイパー | 加工痕のある剥片 | 剥片 | 碎片 | 石核 | 石匙 | 石錘 | 敲石・磨石 | 合計点数 |
|---------|----|-------|------------|----------|----|----|----|----|----|-------|------|
| 黒曜石 | 1 | 2 | 1 | 1 | 25 | 7 | 1 | | | | 38 |
| サヌカイト | | | | | | | | 1 | | | 1 |
| チャート | 1 | | | | | | | | | | 1 |
| 粗粒軟質安山岩 | | | | | | | | | 4 | 9 | 13 |
| 器種別総数 | 2 | 2 | 1 | 1 | 25 | 7 | 1 | 1 | 4 | 9 | 53 |



第43図 遺構外出土石器

隣の中山町教育委員会による平成13年度調査区でも落とし穴や縄文土器が出土する土坑が見つかり、削平のため遺存状況は不良ながら、それらとの関連性が窺える。また、数量を減じるが、調査地内における尾根部南寄りでも出土が認められる。当該範囲は、性格不明ながら縄文土器を包含する土坑が点在しており（SK21～23等）、土器と同様にそうした状況が反映した可能性もある。

剥片石器のうち、6点を第43図に示した。S2～S5は黒曜石製石器である。S2は石鏃で、切先と基部を欠損する。S3は石鏃未製品。三角形状を呈する剥片の表面に押圧剥離痕が認められるが、裏面側は左側縁に少し施されるのみで、途中で調整を止めていると推察される。S4は石錐か。楔形石器削片を素材とし、左側縁及び下縁に二次調整を施し下端を尖らせている。左側縁は表面側、下縁は両面から調整される。小型のスクレイパーである可能性もあるが、左側縁、下縁共に刃部にしては稜があまい印象を受ける。S5は、表面側の剥離がやや大きいことから石核と判断した。剥片作出により下面を欠くが、表面上縁が潰れており、両極打法を用いた剥片作出が窺える資料である。

S6は石鏃で、チャート製と考えられる。抉りが深く、基部外縁が丸みを帯びる長脚鏃である。切先を欠くが、破面も風化している。鳥取県内ではほとんど認められない石材及び形態で、近畿地方及び四国地方といった他地域からの搬入品の可能性が高い。形態的に縄文時代早期以前に帰属すると思われる。S7は横長の石匙で、石材はサヌカイトと推察される。大型の剥片を素材とし、両面に調整を加えて刃部を形成している。

礫石器は、図示しなかったが打欠石錘、敲石、磨石が認められた。表土や攪乱土中からの出土がほとんどで、原位置から離れた状況で確認された。

第4節 自然科学分析の成果

下市築地ノ峯東通第3遺跡の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

下市築地ノ峯東通第3遺跡は、下市川の左岸に位置し、弥生時代の集落跡に伴う遺構や縄文時代の土坑等が検出されている。

本報告では、下市築地ノ峯東通第3遺跡の縄文時代と考えられる土坑から出土した炭化材を対象として、遺構の年代確認のための放射性炭素年代測定を実施する。

1 試料

試料は、土坑4基(SK2、SK5、SK15、SK22)から出土した炭化材各1点、合計4点である。

2 分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.00(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正は、測定誤差 σ 、2 σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する

表3 下市築地ノ峯東通第3遺跡の放射性炭素年代測定結果

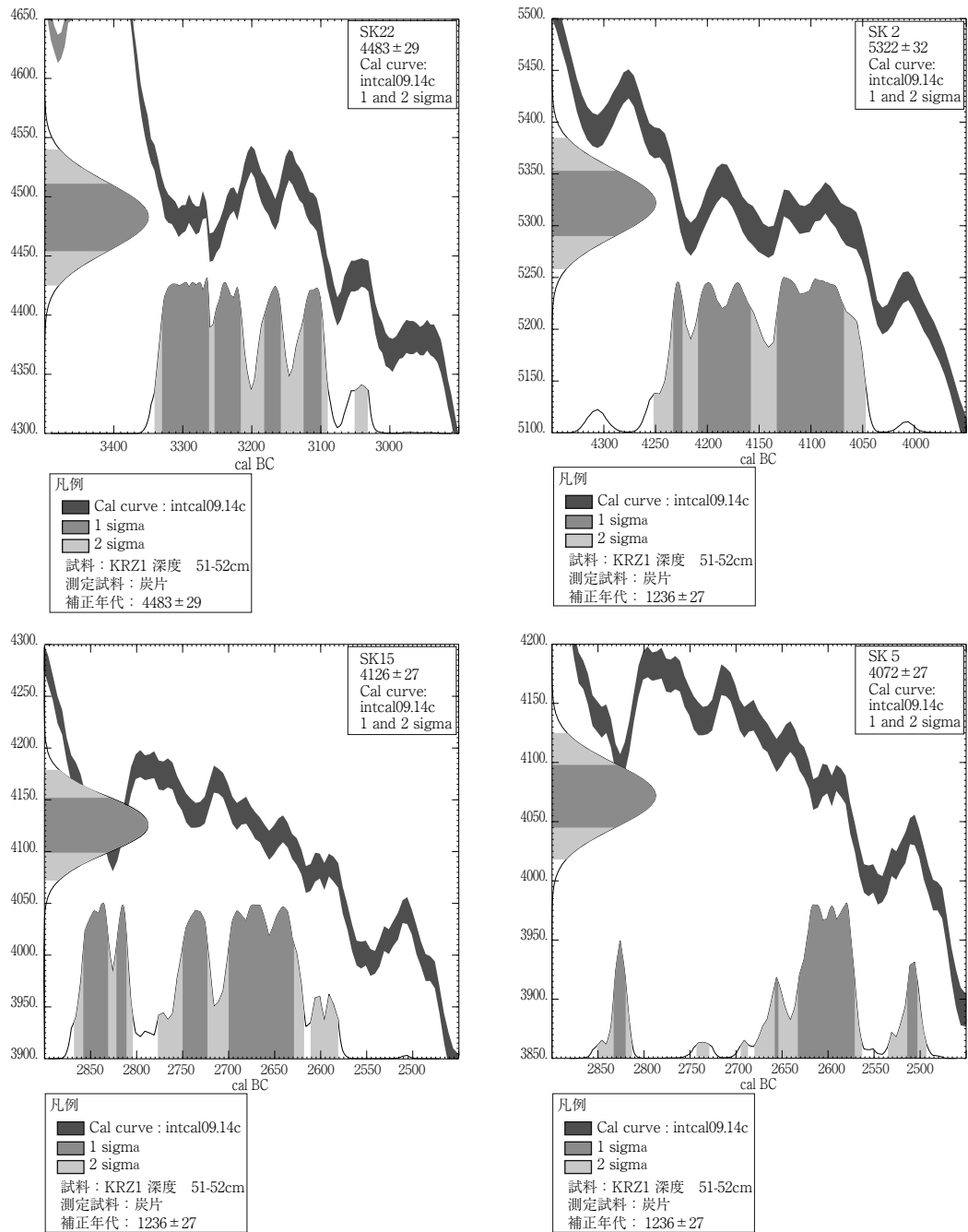
| 番号 | 遺構 | 層位 | 取上No | 種類 | 処理方法 | 測定年代 BP | $\delta^{13}C$ (‰) | 補正年代 BP | 暦年較正結果 | | | | | | | | | | | | Code No. | |
|----|------|--------|------|-----|------|---------|--------------------|----------------------|-----------|------|-----|------|------|-----|--------|------|------|-------|-------|-------------|----------|-----|
| | | | | | | | | | cal BC/AD | | | | | | cal BP | | | | | | | 相対比 |
| | | | | | | | | | cal BC | BC | cal | BC | cal | BP | cal | BP | cal | BP | cal | BP | | |
| 1 | SK22 | 埋土下層 | 79 | 炭化材 | AaA | 4570±30 | -29.98±0.52 | 4480±30 (4483±29) | σ | 3330 | cal | BC | 3262 | cal | BP | 5279 | - | 5211 | 0.452 | IAAA-103156 | | |
| | | | | | | | | | 2σ | 3253 | cal | BC | 3215 | cal | BP | 5202 | - | 5164 | 0.238 | | | |
| | | | | | | | | | | 3182 | cal | BC | 3157 | cal | BP | 5131 | - | 5106 | 0.148 | | | |
| | | | | | | | | | | 3124 | cal | BC | 3098 | cal | BP | 5073 | - | 5047 | 0.162 | | | |
| 2 | SK2 | 埋土最下層 | | 炭化材 | AaA | 5450±30 | -32.55±0.53 | 5320±30 (5322±32) | σ | 3051 | cal | BC | 3089 | cal | BP | 5290 | - | 5038 | 0.972 | IAAA-103157 | | |
| | | | | | | | | | 2σ | 4233 | cal | BC | 4223 | cal | BP | 6182 | - | 6172 | 0.084 | | | |
| | | | | | | | | | | 4208 | cal | BC | 4158 | cal | BP | 6157 | - | 6107 | 0.390 | | | |
| | | | | | | | | | | 4132 | cal | BC | 4067 | cal | BP | 6081 | - | 6016 | 0.525 | | | |
| 3 | SK15 | 底面ピット内 | | 炭化材 | AaA | 4170±30 | -27.85±0.36 | 4130±30 (4126±27) | σ | 2750 | cal | BC | 2723 | cal | BP | 4699 | - | 4672 | 0.194 | IAAA-103158 | | |
| | | | | | | | | | 2σ | 2887 | cal | BC | 2804 | cal | BP | 4816 | - | 4753 | 0.276 | | | |
| | | | | | | | | | | 2777 | cal | BC | 2617 | cal | BP | 4726 | - | 4566 | 0.669 | | | |
| | | | | | | | | | | 2610 | cal | BC | 2581 | cal | BP | 4559 | - | 4530 | 0.055 | | | |
| 4 | SK5 | 底面ピット内 | | 炭化材 | AaA | 4130±30 | -28.55±0.36 | 4070±30 (4072±27) | σ | 2882 | cal | BC | 2820 | cal | BP | 4781 | - | 4769 | 0.115 | IAAA-103159 | | |
| | | | | | | | | | 2σ | 2658 | cal | BC | 2653 | cal | BP | 4607 | - | 4602 | 0.029 | | | |
| | | | | | | | | | | 2633 | cal | BC | 2571 | cal | BP | 4582 | - | 4520 | 0.767 | | | |
| | | | | | | | | | | 2513 | cal | BC | 2503 | cal | BP | 4462 | - | 4452 | 0.090 | | | |
| | | | | | | | | 2σ | 2850 | cal | BC | 2813 | cal | BP | 4799 | - | 4762 | 0.129 | | | | |
| | | | | | | | | | 2743 | cal | BC | 2729 | cal | BP | 4692 | - | 4678 | 0.014 | | | | |
| | | | | | | | | | 2695 | cal | BC | 2687 | cal | BP | 4644 | - | 4636 | 0.008 | | | | |
| | | | | | | | | | 2680 | cal | BC | 2562 | cal | BP | 4629 | - | 4511 | 0.714 | | | | |
| | | | | | | | | | 2535 | cal | BC | 2493 | cal | BP | 4484 | - | 4442 | 0.135 | | | | |

- 1) 処理方法は、酸処理-アルカリ処理-酸処理 (AAA 処理) であるが、アルカリ濃度がIN未満であったためAaAと表記している。
- 2) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 3) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 4) 付記した誤差は、測定誤差σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。
- 5) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を使用した。
- 6) 暦年の計算には、補正年代に () で示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
- 7) 年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正年代値は1桁目を丸めていない。
- 8) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である
- 9) 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

3 結果

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を表3、第44図に示す。補正年代は、SK22が4,480±



第44図 下市築地ノ峯東通第3遺跡の暦年較正曲線

30BP、SK 2 が $5,320 \pm 30$ BP、SK15が $4,130 \pm 30$ BP、SK 5 が $4,070 \pm 30$ BPである。

測定誤差を σ として計算させた暦年較正結果は、SK22がcalBC3,330-3,098、SK 2がcalBC4,233-4,067、SK15がcalBC2,858-2,628、SK 5 がcalBC2,832-2,503である。

4 考察

年代測定の結果、土坑はいずれも縄文時代の年代値が得られており、発掘調査所見とも矛盾しない。このうちSK15とSK 5は、補正年代で $4,130 \pm 30$ BPと $4,070 \pm 30$ BPを示し、暦年較正結果の比較からも近い時期の土坑と考えられる。一方、SK22の炭化材は $4,480 \pm 30$ BP、SK 2の炭化材は $5,320 \pm 30$ BPの補正年代を示すことから、SK15やSK 5よりも古い時期の土坑と考えられる。

第5節 総括

1 調査成果のまとめ(第45図)

本調査地は耕作等に伴う攪乱及び削平が進行し、遺跡の遺存状態は全般的にみて芳しくなかったが、縄文時代、弥生時代後期を中心とした遺構・遺物を確認することができた。

以下、時期毎に概観し調査成果のまとめとする。なお、遺跡の評価については、平成13年度に中山町教育委員会(現大山町教育委員会)により実施された北側隣地(以降、平成13年度調査区と記載)における発掘調査成果(中山町教育委員会2002)も参考に述べることとする。

縄文時代

縄文時代に帰属する可能性が高い遺構は、形態から落とし穴と考えられる土坑20基(SK1～20)、性格不明の土坑5基(SK21～24・26)である。

落とし穴は調査地北半に偏在し、平成13年度調査区においても検出されている。掘方の平面形は隅丸長方形もしくは隅丸方形で、底面にピットが認められるものが主体となる。本遺跡では、落とし穴の重複例(SK2・3)が認められた。両者には形態的な差異(平面形、底面ピットの有無)があり、それが時期差に伴う可能性を示す好例となった。通例、落とし穴からは出土遺物が少なく、帰属時期を推し量る材料に欠ける。そこで今回の調査では、埋土最下層及び底面ピット埋土を採取し水洗選別により炭化物抽出を試みた。その結果、炭化物を採取できたのは3基で、それらを試料として放射性炭素年代測定を実施したところ、縄文時代前期、中期に相当する結果が得られた。これらの年代については、他遺跡におけるデータの蓄積を待ち、出土土器や形態等特徴の比較を以て総合的に評価していく必要があると考えるが、本遺跡において古いタイプと捉えているSK2が最も遡った年代を示した点では齟齬が無い。落とし穴間における先後関係把握の一助にはなり得ると考える。落とし穴の詳細については次項で述べる。

性格不明土坑はSK26を除き調査地南側に位置する。いずれも浅い土坑だが形態・規模的に近似しており、埋土に縄文土器片を包含する。SK22では炭化材を検出し、放射性炭素年代測定を実施すると縄文時代中期に相当する結果を得た。これら土坑の性格については判断しかねるが、遺構外における縄文土器出土量を勘案すると、周辺にさらなる遺構の存在が想定できる。北側ではSK26のほか、平成13年度調査区におけるSK-04も形態・規模が近似し、同様な遺構と推察される。詳細は不明ながら尾根部に集落が存在した時期があった可能性が高い。出土土器相からその時期は、大雑把だが中期から後晩期にかけてと考えられる。

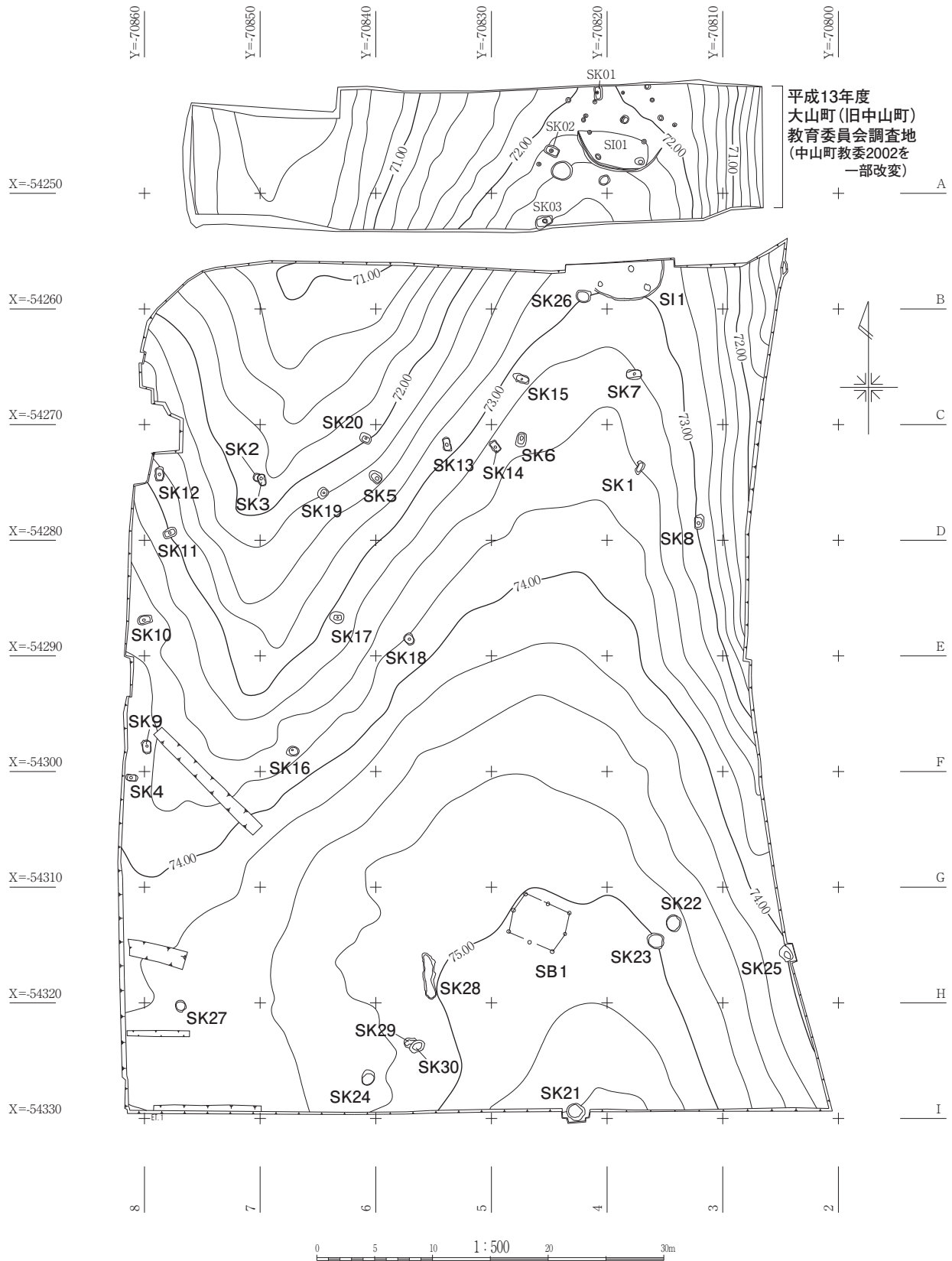
以上から、縄文時代における本調査地とその近隣は、狩猟の場であった時期、集落が展開した時期があることを窺わせる結果となった。

弥生時代以降

弥生時代後期後葉に帰属する竪穴住居跡を1棟(SI1)検出した。平成13年度調査区においても同時期の竪穴住居跡が1棟(SI-01)検出されている。いずれも後世の削平により遺存状況が不良である。

当該期の遺物は遺構外で比較的に見つかっており、かつては尾根部を中心に集落が展開していた可能性が指摘できる。尾根部南寄りで検出された掘立柱建物(SB1)も柱穴の深さが20cm程度にとどまり、削平の大きさを物語っている。遺物が無く帰属時期が不明だが、当該期の集落に伴う可能性はある。

その他では、古墳時代前期の資料をSK30等で散見するが、以降の時期に帰属する出土遺物はほと



第45図 下市築地ノ峯東通第3遺跡遺構配置図

んど無く、人為的な活動の痕跡は本調査地では見出せていない。

2 落とし穴について

本項では、下市築地ノ峯東通第3遺跡で検出された落とし穴の形態的特徴、分布状況等を整理し若干の検討を試みたい。ここでも本調査地と同一丘陵に位置する平成13年度調査区(中山町教育委員会2002)の成果(SK-01~03)を加えた計23基を検討対象とする。

形態的特徴

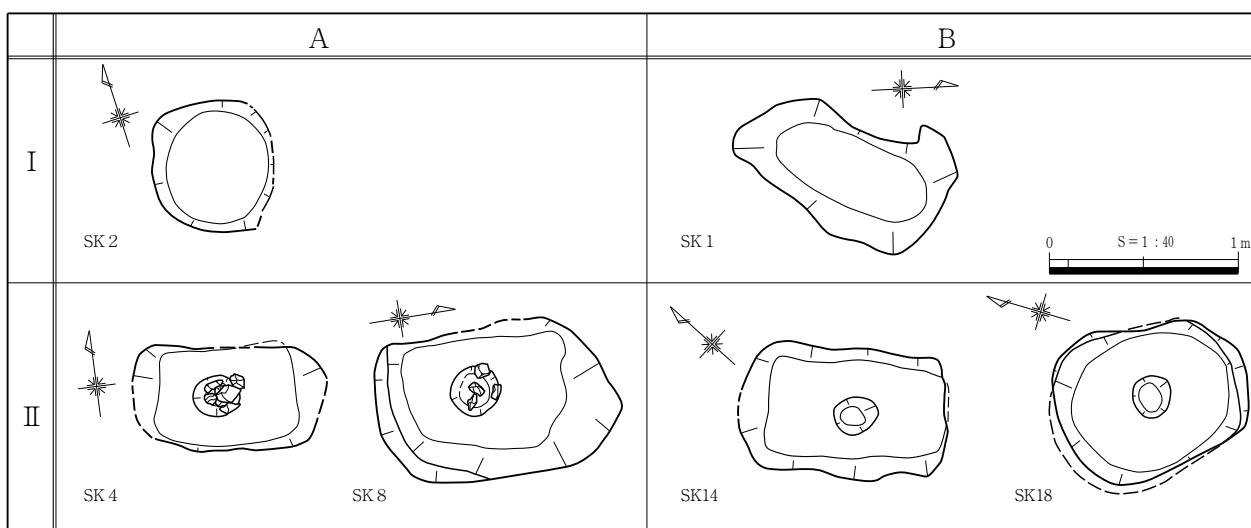
本調査において検出された落とし穴の形態的特徴を整理し、分類を行う(第46図、表4)。まず、土坑底面に穿たれたピットの有無により分け、無いものをⅠ類、有るものをⅡ類とする。Ⅰ類は全23基のうち2基にとどまり、ほとんどが底面ピットを有するⅡ類で構成される。なお、県内では中部を中心に底面ピットが複数基認められる事例が少なくないが(倉吉市中尾遺跡など；倉吉市教育委員会1992)、本遺跡の落とし穴は全て1基である。

平面形についてみると、Ⅰ類では円形と楕円形がある。検出数が少ないため詳細な検討はここでは行わないが、円形のものをⅠA、楕円形をⅠBとする。Ⅱ類は隅丸長方形及び隅丸方形で、円形のものはない。ただ、長方形と方形の区分が難しい一群があるため、ここでは平面形による細分は行わない。Ⅱ類は、底面ピットの形態により細分する。底面ピット埋土中及び掘方上面に小礫が確認されるものをⅡAとする。ⅡBは、小礫を持たないものである。検出数の内訳は、ⅡAが7基、ⅡBが14基で、ⅡBが多数を占める。

ⅡAは、ピット掘方上面及び埋土中に小礫を据えることにより、杭を保持する手法と捉えることができる。小礫は基盤層由来の風化が進行した角礫で、容易に入手できたものとする。礫を杭周りに添えるため、ピット掘方の規模は比較的大きい傾向にある。SK3は遺存状態が良好で、ピット掘方上面に沿って円形に巡るように小礫が検出されており、杭を保持する意図が明瞭である。さらに、SK3では土坑掘方底面に基盤層由来土を杭周辺に盛り、杭をより強固に支持する意図が窺えた。このように盛土を用いて杭を固定する手法は、米子市尾高御建山遺跡でも確認されている(鳥取県教育文化財団1994)。落とし穴の調査において、埋土最下層付近に基盤層に類似した堆積を認めることがある。壁面の崩落に由来する可能性も考えられる

表4 下市築地ノ峯東通第3遺跡落とし穴分類

| 分類 | 掘方の平面形 | 底面ピット | |
|----|-------------|-------|---|
| | | 有無 | 礫 |
| Ⅰ | A 円形 | × | - |
| | B 楕円形 | × | - |
| Ⅱ | A 隅丸長方形及び方形 | ○ | ○ |
| | B 隅丸長方形及び方形 | ○ | × |



第46図 下市築地ノ峯東通第3遺跡 落とし穴分類図

が、断面が杭を中心とした土手状となるなど、その堆積状況によっては杭の固定に供する人為的な盛土の可能性も考慮に入れる必要がある。

ⅡBは礫を用いないため、ピットの径はⅡAに比べてやや小さい傾向にある。小穴を穿ちつつ杭を打ち込むなどして設置した可能性が考えられる。

杭痕跡については全てにおいては把握できず、確認できたのは18基中7基にとどまった。ⅡBのSK13では底面ピット上面の平面観察により、3本の杭を束ねるようにして据えた状況が見て取れた。残念ながら断面観察による追認はできなかったが、平成13年度調査区におけるSK-03(ⅡB)でも2本の杭痕跡が確認されており、今後の調査では杭の設置本数にも注意を払いたい。杭の規模は、杭痕跡から見ると径6～10cm程度が多数を占める。

帰属時期

先述したが、本調査では落とし穴の重複例(SK2・3)があったほか、埋土中から出土した土器片、埋土最下層及び底面ピット埋土から抽出した炭化物の放射性炭素年代測定により、断片的ながら帰属時期についての情報を得ることができた(第3章第4節)。重複事例はⅠA(SK2)とⅡA(SK3)であり、底面ピットを持つⅡAが後出することが判明した。また、ⅠBのSK1埋土中からは早期の押型文土器が出土し、他の落とし穴出土土器と比較し古相を示すことを勘案すると、底面ピットを持たないⅠ類はⅡ類に先行すると考えられる。放射性炭素年代測定においても、ⅠAのSK2が縄文時代前期中葉頃に相当する年代を示したのに対し、ⅡAのSK5、ⅡBのSK15は共に縄文時代中期後葉頃に相当する結果となり、上記との矛盾は無い。

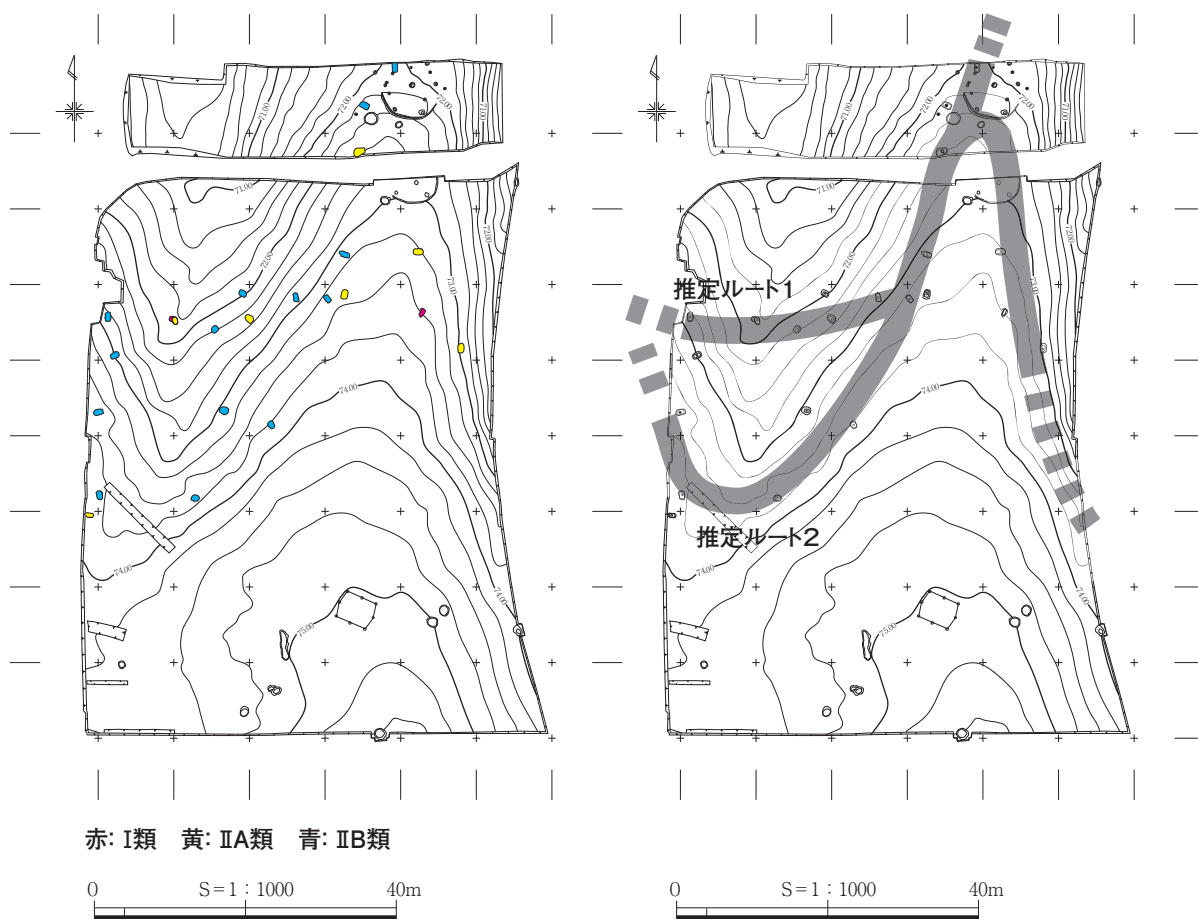
ⅡAとⅡBは、先述の放射性炭素年代測定結果でSK5(ⅡA)が $4,070 \pm 30\text{yrBP}$ 、SK15(ⅡB)が $4,130 \pm 30\text{yrBP}$ と、近似した年代値を示した。出土土器について見ると、いずれも小片で埋土上層出土のため扱いには注意を要するが、SK15(ⅡB)からは中期の可能性を持つ資料が、SK5(ⅡA)・SK20(ⅡB)からは後晩期の粗製土器の可能性のある資料が出土しており、放射性炭素年代測定結果と齟齬をきたす事例も認められた。そのため、Ⅱ類は現状では時期幅を以て理解する必要がある。まとめると、ⅡAとⅡBは明瞭に先後関係を求めることは難しく、放射性炭素年代測定結果と併せると大雑把ながら縄文時代中期から後晩期にかけて帰属すると考えておく。さらなる調査例、自然科学分析結果等の蓄積を待ち、今後の課題としたい。

分布状況

前項で述べたとおり、落とし穴の分布は調査地北半に偏在する。全23基のうち、21基を占めるⅡ類を中心に検討する。

分布状況を見ると、調査地西側において帯状に延びる分布域が2箇所確認できる(第47図)。北西側の谷地形を東西に横断し、丘陵尾根部へと続く一群(推定ルート1)と、尾根縁辺(標高73～74m)に沿うように続く一群(推定ルート2)である。両ルートは調査地中央北寄りの尾根部縁辺で合流し、そのまま狭い尾根部の縁辺をなぞるように分布する。ただ、平成13年度調査区の北側に尾根はまだ延びるため、分布は調査地外へ続く可能性がある。一方、調査地東側の細い谷方向には分布せず、引き続き尾根縁辺に沿って調査地南東側へ続くと思われる。谷を挟んで東隣に位置する下市築地ノ峯東通第2遺跡では落とし穴は確認されておらず(註1)、本遺跡が載る丘陵より東側には展開しないと考えられる。

一方、本遺跡の西側は宮川が流れる谷へと続く緩斜面となるが、その中腹に位置する下市前築地遺



第47図 下市築地ノ峯東通第3遺跡 落とし穴分類別分布及び推定ルート

跡において、落とし穴が4基見つかった（鳥取県埋蔵文化財センター 2012）。いずれも底面ピットを持たず、平面形が円形を呈するもので、本報告の形態分類に当てはめるとIAとなる。本遺跡で主体となるII類は無く、異なる時期もしくは分布域に属する一群と考えられる。

落とし穴という性格上、獲物の移動経路、すなわち獣道に沿う形で掘削すると考えられる。個々の落とし穴相互の関連性は明瞭ではないが、巨視的に見ると落とし穴の帯状分布を想定できる。II類に先行するI類は2基のみだが、II類の分布域内に位置する。落とし穴の重複例で明示されたように、時期を超えて同じ場所に落とし穴が掘削されることは、周辺が良好な狩猟場であったことの証左と考える。

【註】

(1) 下市築地ノ峯東通第2遺跡の発掘調査報告書は、平成24年度刊行予定である。

【参考文献】

中山町教育委員会 2002『下市築地ノ峯東通第2遺跡 下市築地ノ峯東通第3遺跡』中山町文化財調査報告書第24集

倉吉市教育委員会 1992『中尾遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第69集

財団法人鳥取県教育文化財団 1994『尾高御建山遺跡 尾高古墳群』鳥取県教育文化財団調査報告書34

鳥取県埋蔵文化財センター 2012『松河原上奥田第2遺跡 下市前築地遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書44

表5 下市築地ノ峯東通第3遺跡出土土器観察表(1)

| 掲載番号 | 取上番号 | 遺構地区 層位名 | 挿図 番号 | PL 番号 | 種類 器種 | 法量 (cm) | 手法上の特徴 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備考 |
|------|------|----------------|----------|----------|---------------|----------------------|---|-----|----|----------------------|--------------------|
| 1 | 94 | SI1 床面 | 9 | 23 | 弥生土器 壺または甕 | 器高 4.8△ | 外面多条平行沈線文、摩耗のため不明瞭。 内面摩耗のため調整不明瞭。 | 密 | 良好 | 内外面赤褐色 | |
| 2 | 95 | SI1 床面 | 9 | 23 | 弥生土器 甕 | 口径 12.8※ 器高 3.35△ | 外面口縁部～頸部ナデ、口縁部下端～頸部煤付着。 内面ナデ。 | 密 | 良好 | 内外面橙色 | |
| 3 | 52 | SI1 埋土 | 9 | 23 | 弥生土器 甕 | 器高 3.7△ | 外面ナデ、ミガキ。 内面口縁～頸部ナデ、ミガキ。頸部以下ケズリ。 | 密 | 良好 | 外面明赤褐色 内面橙～明赤褐色 | 内外面赤色塗彩 |
| 4 | 49 | SI1 埋土 | 9 | 23 | 弥生土器 甕または壺 | 底径 6.6※ 器高 7.3△ | 外面ハケ。底部粗いナデ。部分的に煤付着。 内面底部ケズリ。 | 密 | 良好 | 内外面明黄褐色 | |
| 5 | 99 | SK1 埋土(②層) | 11 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 2.75△ | 外面山形押型文。口縁端部粗い工具痕、ナデ。 内面ナデ。口縁端部粗い工具痕、ナデ。 | 密 | 良好 | 外面黒～橙色 内面橙色 | 5と同一個体か |
| 6 | 99 | SK1 埋土(②層) | 11 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 4.9△ | 外面山形押型文。 内面ナデ。 | 密 | 良好 | 外面にぶい褐色 内面褐灰～明黄褐色 | |
| 7 | 99 | SK1 埋土(②層) | 11 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 7.3△ | 外面山形押型文、摩耗著しい。 | 密 | 良好 | 外面浅黄褐色 内面にぶい黄褐色 | |
| 8 | 106 | SK5 埋土(上層) | 14 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 2.5△ | 外面ケズリ状調整、ナデ。 内面条痕後ナデ。 | 密 | 良好 | 外面褐色 内面にぶい褐色 | |
| 9 | 105 | SK5 埋土(上層) | 14 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 1.4△ | 外面条痕。 内面ナデ。 | 密 | 良好 | 外面にぶい黄褐色 内面にぶい黄褐色 | |
| 10 | 82 | SK15 埋土(②層) | 24 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 3.1△ | 外面縄文。 内面ナデ。 | 密 | 良好 | 外面にぶい褐色 内面にぶい黄褐色 | 中期か |
| 11 | 123 | SK20 埋土(上層) | 29 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 2.1△ | 外面ケズリ状調整。 内面条痕後ナデ。? | 密 | 良好 | 外面灰褐～黒色 内面にぶい褐色 | 粗製土器 |
| 12 | 53 | SK21 埋土 | 30 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 6.4△ | 外面条痕。 内面ナデ。 | 密 | 良好 | 内外面にぶい黄褐色 | |
| 13 | 53 | SK21 埋土 | 30 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 4.7△ | 外面粗い条痕?、ナデ。 内面ナデ。 | 密 | 良好 | 外面明赤褐色 内面にぶい黄褐色 | |
| 14 | 80 | SK22 埋土 | 31 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 3.1△ | 外面ケズリ状調整。 内面条痕、ナデ。 | 密 | 良好 | 外面にぶい褐色 内面にぶい黄褐色 | 粗製土器 |
| 15 | 80 | SK22 埋土 | 31 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 2.1△ | 外面条痕。 内面ナデ、摩耗著しく調整不明瞭。 | やや密 | 良好 | 外面にぶい黄褐色～ 褐色 | |
| 16 | 62 | SK24 埋土 | 33 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 2.0△ | 外面条痕?、摩耗著しい。 内面ナデ?、摩耗著しく調整不明瞭。 | 密 | 良好 | 外面褐色 内面明褐色 | |
| 17 | 136 | SK25 埋土 | 34 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 4.6△ | 外面ケズリ状調整。 内面ナデ。 | 密 | 良好 | 内外面にぶい黄褐色 | 攪乱土中出土か |
| 18 | 131 | SK26 埋土 | 35 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 3.5△ | 内外面条痕後ナデ。 | 密 | 良好 | 外面にぶい褐色 内面にぶい黄褐色 | 19と同一個体 |
| 19 | 85 | SK26 埋土 | 35 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 2.0△ | 外面ナデ。 内面条痕後ナデ。 | 密 | 良好 | 外面にぶい褐色 内面黒褐色 | |
| 20 | 64 | SK30 埋土 | 38 | 23 | 土師器 小型器台 | 器高 5.7△ | 外面ミガキ。全体に摩耗。台部下半上位に穿孔。 内面台部下位ハケメ。受け部および台部上・中位 摩耗のため調整不明瞭。 | 密 | 良好 | 外面明赤褐色 内面橙色 | |
| 21 | 122 | B2グリッド 攪乱土 | 40 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 4.7△ | 外面文様区内竹管状工具による刺突文後ナデ。 文様区外貼付突起、押し沈線。 内面ナデ。 | 密 | 良好 | 外面にぶい黄褐色 内面にぶい褐色 | 22・23と同一個体 船元Ⅱ式 |
| 22 | 59 | B2グリッド 表土下 | 40 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 3.0△ | 外面口縁部文様区内竹管状工具による刺突文。 文様区外押し沈線。口縁端部ナデ後縄文。 内面ナデ。口縁端部ナデ後縄文。 | 密 | 良好 | 内外面にぶい褐色 | |
| 23 | 59 | B3グリッド 表土下 | 40 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 3.4△ | 外面2条押し沈線、ナデ、縄文。 内面ナデ。 | 密 | 良好 | 内外面にぶい褐色 | |
| 24 | 128 | B3グリッド 攪乱土 | 40 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 2.8△ | 外面縄文、沈線。 内面ナデ。 | 密 | 良好 | 外面にぶい褐色 内面褐色 | |
| 25 | 30 | E2グリッド 表土 | 40 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 4.2△ | 外面口縁部4条沈線、擦余文。 内面ナデ。 | 密 | 良好 | 外面明黄褐色 内面黄褐色 | 里木Ⅱ式か |
| 26 | 21 | F4グリッド 攪乱土 | 40 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 3.2△ | 外面縄文。 内面ナデ。 | 密 | 良好 | 内外面にぶい黄色 | 中期か |
| 27 | 21 | F4グリッド 攪乱土 | 40 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 2.3△ | 外面縄文。 内面ナデ。 | 密 | 良好 | 外面にぶい黄褐色 内面灰黄褐色 | |
| 28 | 121 | E4グリッド 攪乱土 | 40 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 3.8△ | 外面擦余文。摩耗著しい。 内面ナデ。 | 密 | 良好 | 外面にぶい褐色 内面にぶい黄褐色 | |
| 29 | 121 | E4グリッド 攪乱土 | 40 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 3.7△ | 外面擦余文。 内面ナデ。 | 密 | 良好 | 外面褐色 内面明黄褐色 | |
| 30 | 59 | B3グリッド 表土下 | 40 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 5.1△ | 外面条痕。 内面条痕後ナデ。 | 密 | 良好 | 外面褐色 内面にぶい黄褐色 | |
| 31 | 77 | G5グリッド 攪乱土 | 40 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 4.2△ | 外面条痕。 内面ナデ。 | 密 | 良好 | 外面にぶい黄褐色 内面にぶい黄褐色 | |
| 32 | 55 | G3グリッド 攪乱土 | 40 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 3.2△ | 外面条痕。 内面ケズリ状調整後ナデ。 | 密 | 良好 | 内外面にぶい黄褐色～ にぶい黄褐色 | |
| 33 | 128 | B3グリッド 攪乱土 | 40 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 2.3△ | 外面沈線文、ナデ。 内面ナデ。 | 密 | 良好 | 外面明赤褐色 内面にぶい黄褐色 | 時期不明 |
| 34 | 121 | E4グリッド 攪乱土 | 40 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 4.4△ | 外面口縁部条痕、端部ナデか。摩耗で調整不明瞭。 内面ナデ。 | 密 | 良好 | 内外面にぶい黄褐色 | 晩期か |
| 35 | 121 | E4グリッド 攪乱土 | 40 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 4.7△ | 外面ナデ、摩耗で不明瞭。 内面ナデ。 | 密 | 良好 | 外面褐色 内面褐灰色 | |

表6 下市築地ノ峯東通第3遺跡出土土器観察表(2)

| 掲載 番号 | 取上 番号 | 遺構 地区 層位名 | 挿図 番号 | P L 番号 | 種類 器種 | 法量 (cm) | 手法上の特徴 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備考 |
|----------|----------|-----------------|----------|-----------|---------------|---------------------|--|----|----|--------------------|------|
| 36 | 28 | H2グリッド 攪乱土 | 40 | 22 | 縄文土器 | 器高 4.7△ | 外面丁寧なナデ。 内面ナデ。 | 密 | 良好 | 内外面明褐色 | |
| 37 | 128 | B3グリッド 攪乱土 | 40 | 22 | 縄文土器 深鉢 | 器高 3.1△ | 外面ケズリ状調整後ナデ。 内面条痕後ナデ。 | 密 | 良好 | 内外面黄褐色 | 粗製土器 |
| 38 | 42 | A4グリッド 攪乱土 | 41 | 23 | 弥生土器 甕 | 口径 17.1※ 器高 5.7△ | 外面口縁部9条の平行沈線文。頸部ナデ。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。 | 密 | 良好 | 外面にぶい黄橙色 内面明黄褐色 | |
| 39 | 58 | E3グリッド 表土下 | 41 | 23 | 弥生土器 甕 | 器高 4.0△ | 内外面口縁部ナデ。全体に摩耗。 | 密 | 良好 | 内外面にぶい橙色 | |
| 40 | 21 | F4グリッド 攪乱土 | 41 | 23 | 弥生土器 甕または壺 | 底径 4.25 器高 3.5△ | 外面底部ミガキ、煤付着。 内面底部ケズリ、指押さえ。 | 密 | 良好 | 外面橙色 内面明黄褐色 | |
| 41 | 35 | D3グリッド 攪乱土 | 41 | 23 | 土師器 壺 | 器高 3.6△ | 外面口縁部下端～胴部上端ナデ。 内面口縁部下端～頸部ナデ。胴部上端ケズリ。 | 密 | 良好 | 外面浅黄褐色 内面浅黄色 | |
| 42 | 17 | G2グリッド 表土下 | 41 | 23 | 土師器 甕 | 口径 29.0※ 器高 3.5△ | 内外面口縁部ナデ。全体に摩耗。 | 密 | 良好 | 内外面にぶい黄褐色 | |

表7 下市築地ノ峯東通第3遺跡出土石器観察表

| 遺物 番号 | 取上 番号 | 遺構 地区 層位名 | 挿図 番号 | P L 番号 | 種類 器種 | 石材 | 最大長 (cm) | 最大幅 (cm) | 最大厚 (cm) | 重量 (g) | 備考 |
|----------|----------|------------------|----------|-----------|----------|-------|----------|----------|----------|--------|-------------|
| S1 | 92 | SK26 埋土 | 35 | 22 | 石鏃未製品 | 黒曜石 | 2.0 | 1.25 | 0.2 | 0.444 | 二次的な被熱受ける |
| S2 | 40 | B3グリッド 攪乱土 | 43 | 22 | 石鏃 | 黒曜石 | 1.1 | 1.3 | 0.35 | 0.485 | |
| S3 | 130 | B3グリッド 攪乱土 | 43 | 22 | 石鏃未製品 | 黒曜石 | 2.1 | 1.8 | 0.8 | 1.798 | |
| S4 | 71 | G4グリッド 攪乱土 | 43 | 22 | 石鏃 | 黒曜石 | 1.9 | 1.4 | 0.6 | 1.202 | スクレイパーの可能性有 |
| S5 | 22 | F4グリッド 攪乱土 | 43 | 22 | 石核 | 黒曜石 | 1.8 | 2.55 | 1.1 | 4.102 | 両極打法による剥片作出 |
| S6 | 61 | F7グリッド 表土・攪乱土 | 43 | 22 | 石鏃 | チャート? | 3.1△ | 1.4 | 0.4 | 1.232 | |
| S7 | 16 | G3グリッド 表土下 | 43 | 22 | 石匙 | サヌカイト | 3.4 | 5.55 | 0.85 | 16.5 | |